第5章　鈴谷式土器編年再論

1.　再論の理由

鈴谷式土器は、伊東信雄氏がサハリンの先史時代土器編年を検討する際に、代表的な遺跡である鈴谷貝塚の名を採って設定した土器型式である（伊東 1942)。鈴谷式土器をめぐっては、オホーツク文化の成立過程に関わる問題として、各氏が様々な意見を述べてきた（熊木 1996 参照。その後の主な論文には、菊池 1998、小野・天野 2002、Ｂａｓｉｌｅｖｓｋｉｙ 2002b、前田 2002 がある)。しかし、現在でも基本的な型式編年についてすら意見の一致を見ていない。

鈴谷式をめぐる議論が混沌としているのはなぜか。理由の第一は、伊東氏の設定した鈴谷式に、縄線文・櫛目文、平底・丸底など器形・文様上様々なバリエーションが含まれていたことにあろう。異なる文様要素・器形を持つ土器群を同時期と認定し、同一の型式にまとめた点こそが伊東編年の優れた点であったが、それが逆に議論の余地を生む結果にもなってきた。すなわち、様々なバリエーションを持つ鈴谷式土器に対して、型式の定義・細別から型式学的バリエーションの背景となる土器・人の動きに至るまで多岐に及ぶ内容が議論され、多様な解釈が提示されてきたのである。

鈴谷式をめぐる各氏の解釈には齟齬が多数あるが、一部では共通理解も生じつつある。それは、鈴谷式の縄線文は続縄文土器の系統である一方、櫛目文はサハリン以北の伝統に連なるものであり、二つの系統が混淆する鈴谷式期の土器様相は南北の文化交流を反映している、という認識である。このような鈴谷式期の南北交流を経て、次の十和田式の時期にオホーツク文化が成立することから、オホーツク文化の成立プロセスに直接関わる問題として、鈴谷式期の北／南の地域差と交渉が重要視されてきたのである。

筆者も以上の問題意識のもと、過去に私見を述べたことがある（熊木 1996。以下「旧編年」と略)。北海道北端部の編年については現在でも変更の必要性を感じていないが、最近、サハリンの新資料に接して、鈴谷式全体の型式変遷はもっと平易に説明できることに気づいた。「旧編年」を含めた従来の細別が、主として文様要素（縄線文／櫛目文）や底部形態（平底／丸底(注1)）に基づいていたのに対し、新たに施文の密／粗、文様帯幅の広／狭などの視点を加えることによって、型式変遷全体を「複雑から単純へ」という一貫した流れで説明できるようになったの

である。こうして「旧編年」ではうまく説明できなかった、サハリン資料を含めた鈴谷式全体の編年をすっきりと理解できるようになった。その結果、鈴谷式の型式変遷は南北交流が段階的に進行するプロセスであることが、よりはっきりとしてきた。

以上の理解に到達する以前の「旧編年」では、型式学的対比が煩雑で一貫性がなかったり、サハリン資料の検討が不十分であるなどの至らない点があった。また筆者自身の続縄文土器研究の進展によって訂正が必要になった部分もある。さらに紙幅の都合から、先学の見解との異同に関する説明を十分に尽くしていなかった。本章ではこれらの点を修正しながら、新しい型式変遷観に基づき、鈴谷式土器の編年を再検討してみたい。

2.　基礎データの確認

鈴谷式土器の編年が難しい理由の第一は、同時期であることが確実な一括資料が少ないことにある。層位的・地域的なまとまりがはっきりしないため、編年の決め手を欠いてきたのである。

そこで本論では、具体的な型式細別を行う前に、筆者が編年の拠り所とする層位や分布のデータを再確認しておくことにする。細別編年の根拠を論理的に示すことこそ、議論を生産的にする早道と考えるからである。

1）戦前のサハリン調査成果

伊東氏は鈴谷式土器を設定する際に、サハリン資料の文様要素について以下のデータを提示した。

データ a：サハリンの鈴谷式には縄線文と櫛目文の 2 種がある。これらの文様は同一遺跡において混在し、また一つの土器で両方の文様を持つものがあるので、「同時的存在であることは明らか」である（伊東 1942：7）。

データ b：その一方、サハリン南部（アニワ湾沿岸の鈴谷貝塚など）では縄線文が多く、サハリン中部西海岸（来知志遺跡など）では櫛目文が多いという地域差がある。

ちなみに伊東氏は、縄線文の土器と櫛目文の土器が、地域差あるいは時期差として「二型式に分たるべきものかも知れない」という見通しも示している（伊東前掲：8）。なお器形については、縄線文土器・櫛目文土器とも尖底・丸底と平底の両者があるとされているのみで、地域差・時期差については明言されていない。

一方、新岡武彦氏は、戦前のより詳細な調査成果をもとに伊東氏の鈴谷式を再検討している（新岡 1970）。氏は、鈴谷貝塚の土器が 4 つ以上の群に分類できることを示し、これらの土器群を一

括して「鈴谷式」とすることに疑問を投げかけたのである。この論考で提示されたデータのうち、筆者が特に重要と考えるのは以下の2点である。

データ c：サハリン中部西海岸には櫛目文・尖底・小型という土器がまとまって出土する遺跡が存在する。恵須取式（第 43 図 6～11）は、この土器群の標式遺跡名を採って新岡氏が設定した土器型式である。

データ d：鈴谷貝塚第 2 層では、櫛目文や撚糸文以外の文様要素、特に刻文を特徴とする土器群が櫛目文・撚糸文と併存して出土する。

以上のデータ a～d が基礎となって、鈴谷式の型式編年研究が進められてきたのである。戦後、ロシア側から新情報が追加されつつあるが情報は限られており、現在でもこれらデータ a～d は層位・分布上の基礎データとしての重要性を失っていない。現在でも多くの研究者が依拠しているデータといえよう。

鈴谷式の型式編年をめぐる意見の対立は、実は、このデータ a～d の後に追加された情報に対する解釈の相違が主な原因となって生じているのである。それらの戦後のデータであるが、ここでは大きく 3 者－ロシア側の調査報告、北海道の出土資料、最近報告されたサハリン中部西海岸ウスチ･アインスコエ遺跡竪穴の資料－にまとめておこう。このうち北海道の出土資料とウスチ・アインスコエ遺跡の資料について以下で再確認し、筆者の編年の根拠を明示する。ロシア側の調査報告については詳細不明な部分が多いので基礎データとはせず後述する。なおロシア側の報告については、最近、菊池俊彦氏が要点を簡潔にまとめているので参照されたい（菊池 1998）。

2）北海道の出土資料

北海道北端部の鈴谷式(注 2)は、各氏が指摘しているとおり以下のデータ e がサハリンと異なり、地域差が認められる。

データ e：道北端部の鈴谷式では、胴部に縄文を施す例が多い。また、櫛目文や刻文など、縄線文以外の文様要素を有する例はほとんどない。

「旧編年」では、これら道北端部の鈴谷式のうち、代表的な 3 つの遺跡（礼文島香深井 B 遺跡（大場・大井編 1981）（第 40 図 4～6）、利尻島利尻富士町役場遺跡（内山編 1995）（第 40 図 2・3・7・8）、稚内市オンコロマナイ遺跡（泉・曽野編 1967））（第 41 図 6～8）の資料を対象に編年を試みた。「旧編年」の要点を再掲しておく。

データ f：道北端部の底部形態に注目すると、ほぼ平底のみからなる遺跡（香深井 B、役場）と丸底のみからなる遺跡（オンコロマナイ）の 2 者にはっきりと分かれ、平底と丸底は一つの遺跡で混淆しない(注 3)。

データ g：道北端部の口縁部文様と地文を分析すると、異同はわずかではあるが、役場遺跡 I 類

（第 40 図 2・3）と香深井 B 遺跡、役場遺跡Ⅱ類（第 40 図 7・8）とオンコロマナイ遺跡がそれぞれ近い関係にある。両者の主な違いは、香深井 B 遺跡では口縁部の刺突文や地文の縄文がない例が各々2 割程度あるのに対し、役場・オンコロマナイの両遺跡ではそれらの文様がほぼ完備されているというもので、香深井 B 遺跡の特徴の方がサハリン資料に近い(注 4)。

データ h：役場遺跡Ⅰ類とⅡ類では、前者が層位的に古い。

「旧編年」では以上のデータ f～h をもとに、役場Ⅰ類・香深井 B→役場Ⅱ類→オンコロマナイという型式変遷を設定し、さらに平底・丸底という製作技法上の大きな差を重視し(注 5)、役場Ⅰ類・香深井 B・役場Ⅱ類と、オンコロマナイという 2 大別を設定した。この部分に関しては現在でも筆者の考えに全く変更はない(注 6)。

3) ウスチ・アインスコエ遺跡竪穴出土土器

最近、サハリンのウスチ・アインスコエ遺跡で 1993 年度に行われた調査の概要が報告され、竪穴住居から出土した鈴谷式土器が公開された（山浦 2002a）（第 42 図、第 43 図 1～5）。これらの土器の多くは竪穴住居床面から出土したとされている。破片が多く、全てを同時期と見なすのには問題が残るかもしれない。しかし、層位的にある程度まとまっていること、型式的にも後述のように共通性が認められることなどからすると、少なくとも第 42 図・第 43 図 1～5 の土器は全てほぼ同時期である可能性が高いと考えられる。

報告者の山浦氏は、これらの土器を縄線文（第 42 図）と櫛目文（第 43 図 1～5）の二つの群に分類している。まずは縄線文を持つ群について、筆者が注目する点をあげておこう。

データ i：ウスチ・アインスコエ竪穴の縄線文土器の文様には、口唇下の OI 刺突文（第 42 図 8・9）や、2 本一組の縄線文（第 42 図 7・8）など、北海道やサハリン南部に多いとされてきた文様要素・モチーフが数多く認められる

このデータ i は、上記データ b と一部抵触するようにも思われる。これは後に考察する。

次に縄線文・櫛目文の両群に共通する特徴として、以下の点に注目しておきたい。

データ j：ウスチ・アインスコエ竪穴資料全体の特徴として、幅の広い文様帯、幾重にも重ねられた文様要素を挙げることができる。具体的には、文様要素列が水平、斜めなどに幾重にも重ねられた口縁部文様帯、口縁部文様帯下縁に施された縄の圧痕列や櫛目文列（第 42 図 1・2・6・9、第 43 図 2)、口唇面にも施された文様が、共通する特徴である。

ウスチ・アインスコエ竪穴資料では、縄線文・櫛目文という文様要素の違いを超えてデータ j の特徴が共有されている点が重要である（前田 2002：189)。また、注目すべきは、データ j が北海道北端部の鈴谷式を特徴づける属性でもある、という点である。実はこの点に鈴谷式土器の型式細別のヒントがあると筆者は考える。

3.　編年の再検討

1）型式細別

以上のデータ a～j を基礎とし、やや不確実な情報に基づく推論を交えながら、鈴谷式の型式細別と編年を考察してゆくことにする。まずは鈴谷式をいくつかのタイプに分類する。

①**タイプA**:2本一組の縄線文モチーフと、幅の広い口縁部文様帯を特徴とするタイプ（第40図・第41図・第42図）。

型式学的特徴は以下のとおりである。

i）2本一組の縄線文モチーフを含む。

ii）縄線文モチーフが水平に幾重にも重ねられ、口縁部文様帯の幅が広くなる。

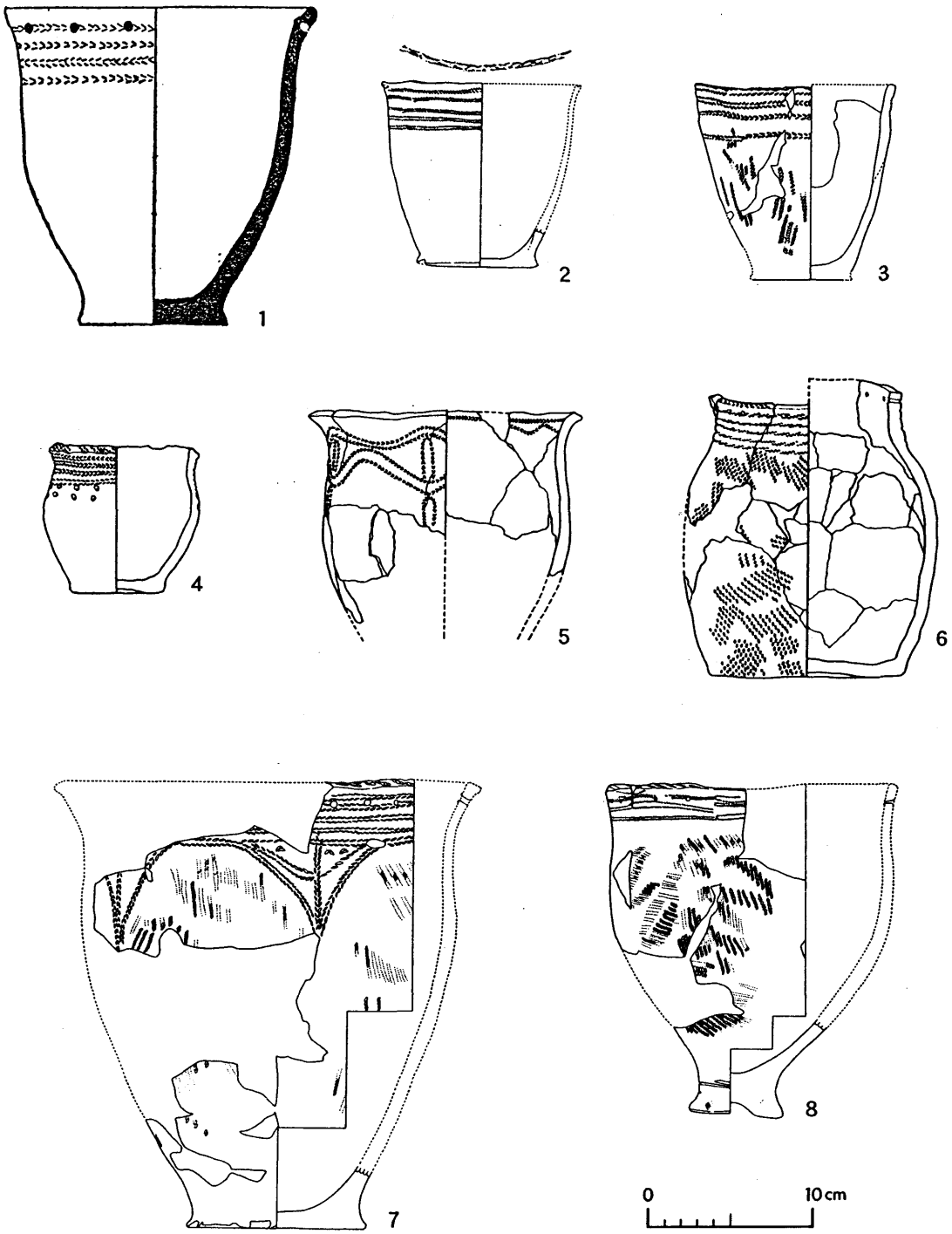
iii）口縁部文様帯下縁に縄の圧痕列等の施文が施される例がある。

iv）口唇部下に、貫通する、もしくは突瘤となる細い刺突文列を持つ例がある。

v）口唇面にも施文される例がある。

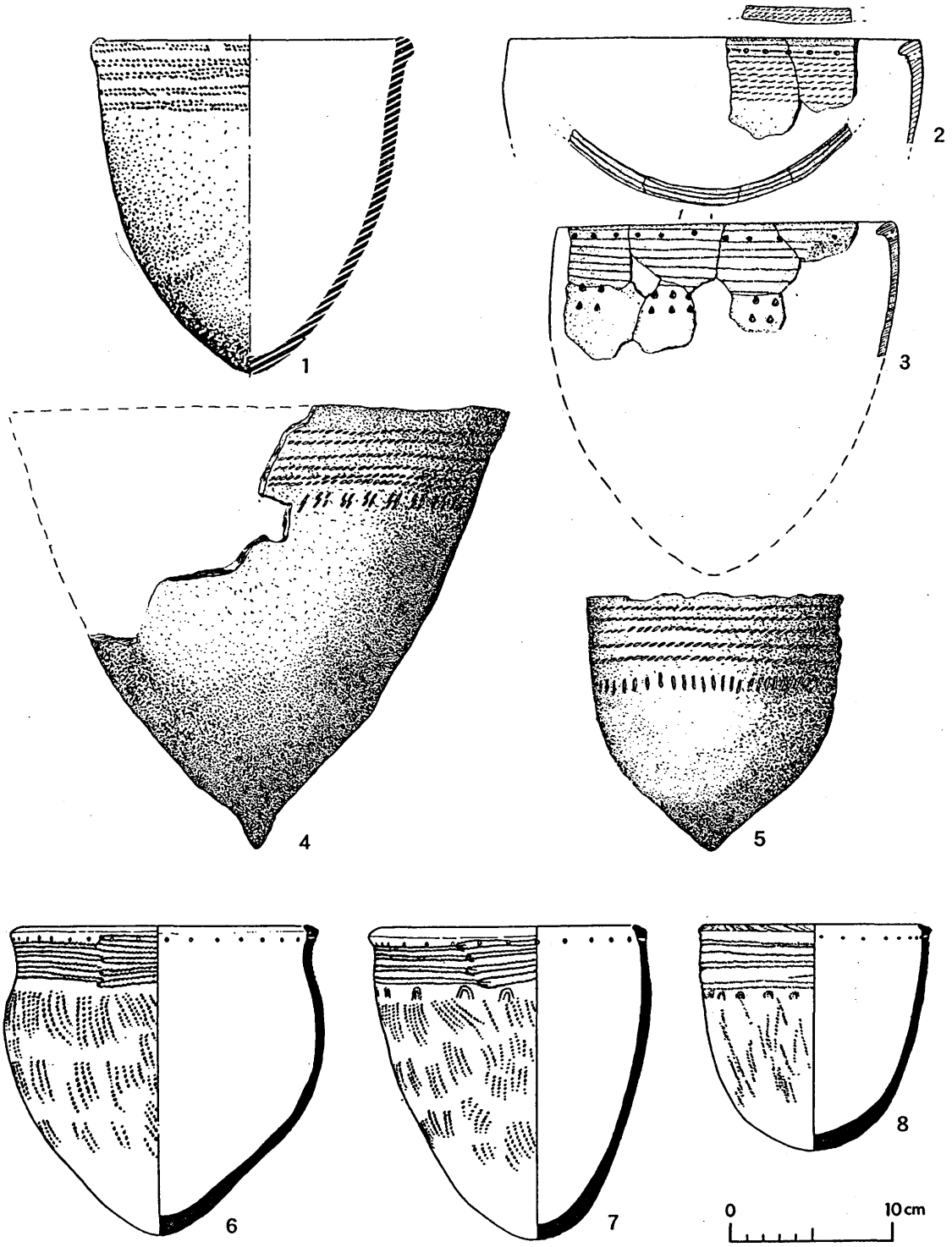
サハリンでの出土例を確認しておく。縄線文の土器は多数出土しているが、タイプ A はそのうちの一部であり、別のタイプ（後述するタイプ C）とすべき縄線文土器も存在する。タイプ A のややまとまった出土例は、鈴谷貝塚や留多加貝塚（伊東 1942：付図第一（2））などのサハリン南部の遺跡のほか、前述のウスチ・アインスコエ遺跡竪穴やテルペニエ I 遺跡（Γ e p y c 1979）（第 41 図 2・3）といった中部西海岸・東海岸でも確認されている。従来、縄線文の土器はサハリン南部に多いとされてきたが（データ b）、ウスチ・アインスコエ、テルペニエ I はサハリン中部の例であり（データ i）、注意が必要である。底部形態については平底と丸底が確認されている。丸底がまとまって出土したとみられる例には前掲のウスチ・アインスコエ竪穴・テルペニエ I の資料があるが、他の遺跡では出土状況が不明であり、サハリンでは平底／丸底が排他的に出土するのか否か確言できない。逆に、平底／丸底が共伴するという積極的なデータもない。

一方北海道では、道北端部の鈴谷式が全てこのタイプに含まれる。前述のように道北端部とサハリンの差は、地文の縄文の有無である。また道北端部では平底（**タイプA1**）と丸底（**タイプA2**）に細別が可能で、前者が古い（データ e・f・g・h）。



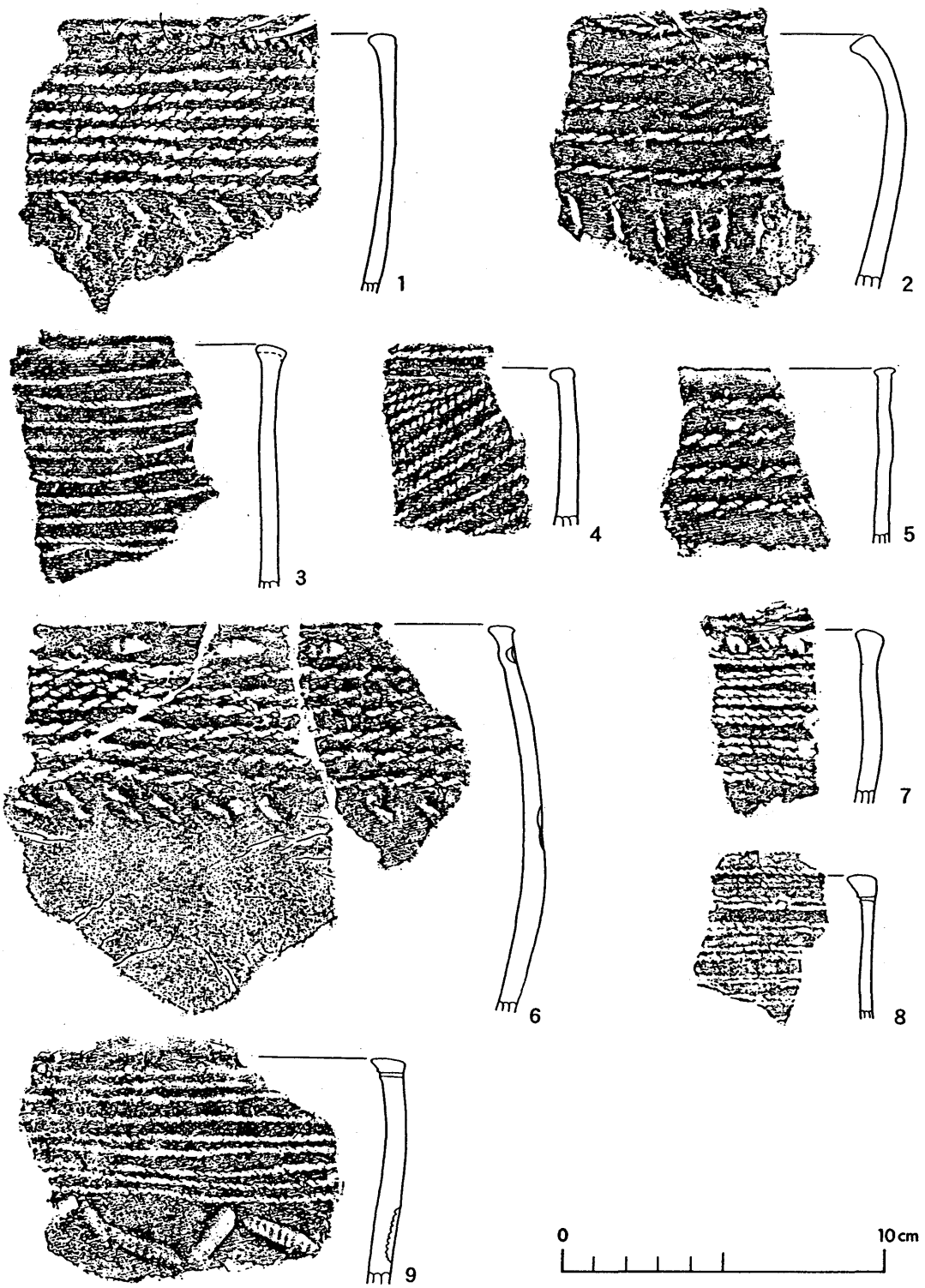
第40図　鈴谷式土器タイプA1

1：鈴谷貝塚　2・3：利尻富士町役場Ⅰ類　4～6：香深井B　7・8：利尻富士町役場Ⅱ類



第41図　鈴谷式土器タイプA2

1：鈴谷貝塚　2・3：テルペニエⅠ　4・5：スタロドゥプスコエⅡ2 号住居址　6～8：オンコロマナイ



第42図　鈴谷式土器タイプA

1～9：ウスチ・アインスコエ竪穴

②**タイプ B**：文様要素の配置法はタイプ A と共通するが、文様要素が櫛目文からなるタイプ（第43図）。

櫛目文の土器のうち、ウスチ・アインスコエ遺跡竪穴例のような文様構成を持つタイプを一括する。型式学的特徴は以下のとおりである。

i）文様要素は主に櫛目文からなるが、型押文に近い例や、刺突文も存在する。

ii）文様要素列が水平・斜めなどに幾重にも重ねられ、口縁部文様帯の幅が広くなる。

iii）口縁部文様帯下縁にも装飾列が施される例がある。

iv）口唇面にも施文される例がある。

サハリンでの出土例を確認しておく。やはりタイプ B も、従来櫛目文土器とされてきた資料の一部であり、全ての櫛目文土器がタイプ B となるわけではない。タイプ B の出土例はやや少ないが、サハリン中部・南部で確認されている。中部西海岸ではウスチ・アインスコエ遺跡竪穴例の他に、恵須取川口第 3 号遺跡（新岡 1940）発見の土器群すなわち「恵須取式」の標式資料のうちの、多くの例（第 43 図 6～11）がこのタイプに相当する。南部では留多加出土例（東北大学文学部考古学研究室編 1982：図版 N046）、鈴谷貝塚の例（馬場 1940：第 27 図左上段）などがある。タイプ B の底部形態は、上記の資料で確認できた例は全て丸底である。しかし確認例はごく限られており、平底が存在する可能性もある。

なお、北海道ではタイプ B の出土は確認されていない。

③**タイプ C**：施文が減少し、文様構成が単純化されたタイプ（第44図）。

このタイプにはタイプ A・B 以外の縄線文・櫛目文土器が含まれる。他にこのタイプに特有の例として刻文が縦に重ねられる土器を含めておく。結果的にタイプ C の文様は多くのバリエーションを含むことになるが、全体の特徴は以下のようにまとめられる。

i）文様要素には縄線文、櫛目文、刻文等がある。

ii）文様要素が水平に連続する例では、水平列の数が少なく、口縁部文様帯の幅が狭くなる。

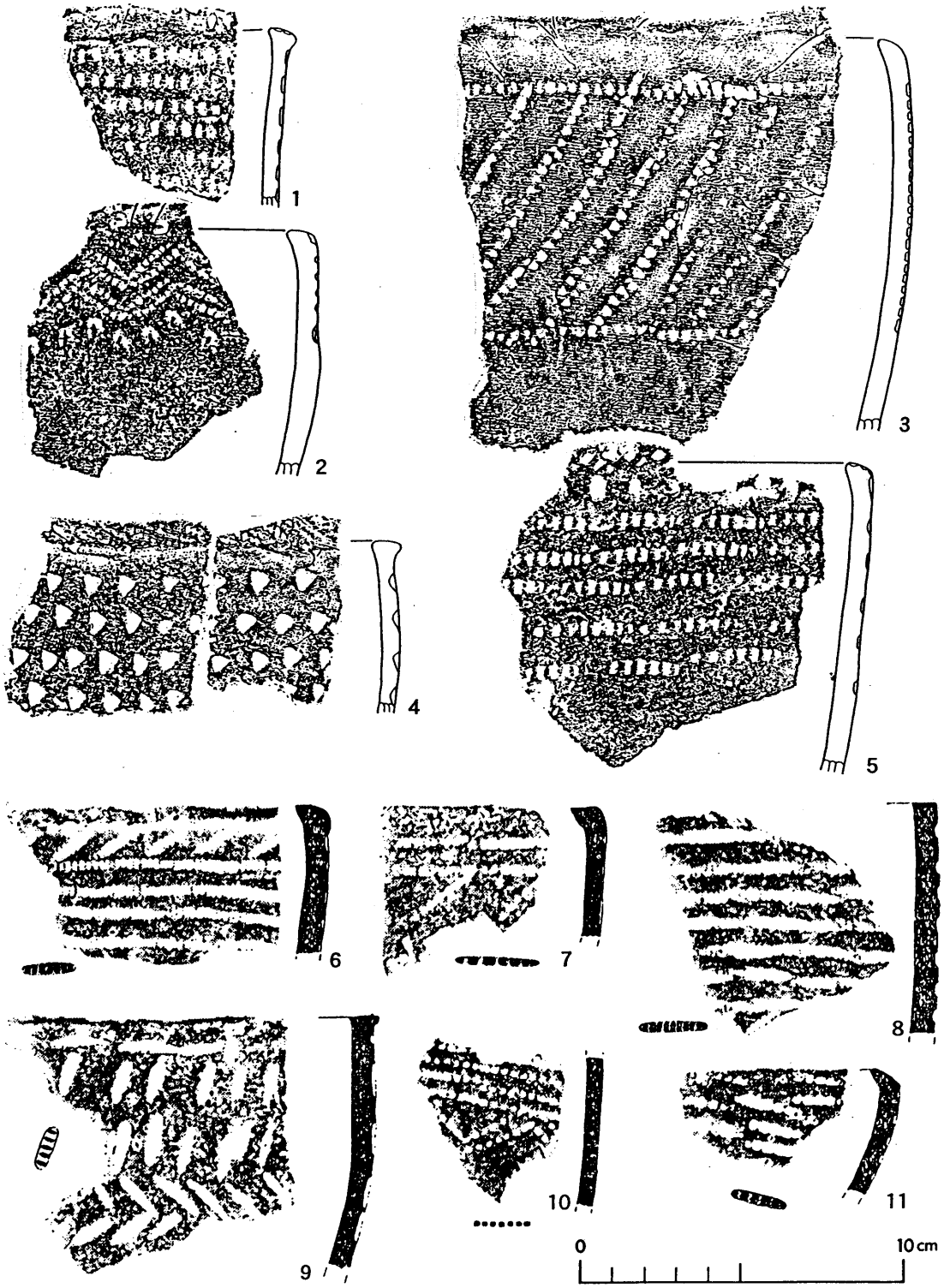
iii）口縁部文様帯下縁や口唇面に施文がない。

iv）縄線文を持つ例では、2 本一組のモチーフがかなり崩れているか、1 本単位の施文のみとなる。

v）櫛目文を持つ例では、縦方向にも櫛目文が揃えられている例がある（第44図2・6）。

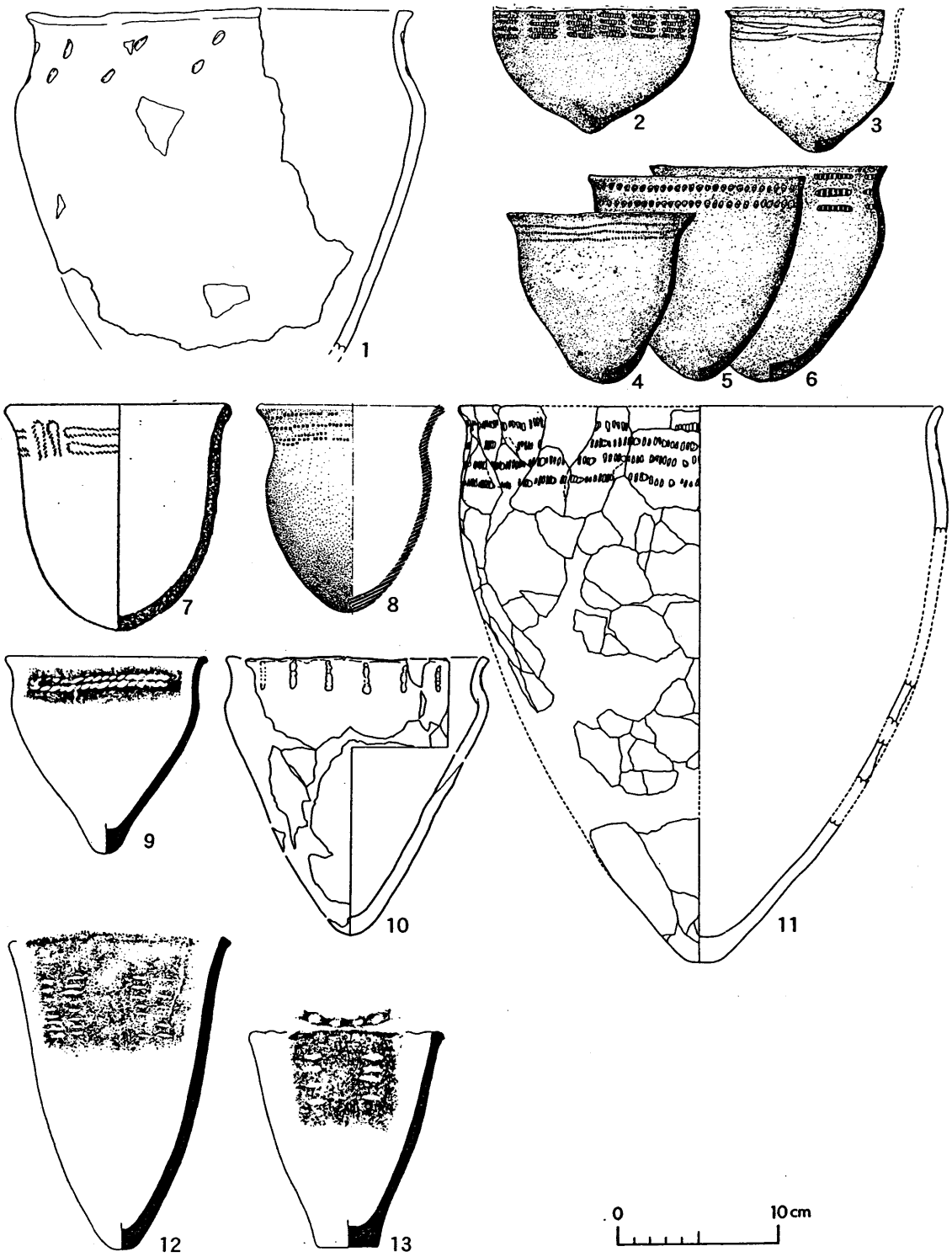
vi）刻文を持つ例では、いわゆる「舟形刻文」を縦に重ねる例（菊池 1971 で「短刻線」とされたもの）が特徴的である（第44図12・13）。

タイプ C には種々の文様要素が含まれるが、施文が減少し、文様構成が単純化されている、という点で共通しており、この点がタイプ A・B と異なっている。



第43図　鈴谷式土器タイプB

1～5：ウスチ・アインスコエ竪穴　6～11：恵須取川口第3号遺跡



第44図　鈴谷式土器タイプC1（1～11）・タイプC2（12・13）

1：ウスチ・アインスコエ第5地点　2～6：アジョールスクⅠ第2層　7～9・12・13：鈴谷貝塚

10：ピラガ丘第Ⅱ地点　11：常呂川河口

なお、タイプ C の土器群の器形と文様の組み合わせに注目すると、タイプ A・B と器形や文様が近いもの（第 44 図 1～11）と、器形が縦に長く、文様は縦に重ねられた刻文が特徴的なもの（第 44 図 12・13）に細別が可能なようである。前者を**タイプ C1**、後者を**タイプ C2** としておく。底部形態は、タイプ C1・タイプ C2 とも丸底が多いようであるが、平底もある。

タイプ C の出土例であるが、サハリンでは中部・南部で確認されている。まず南部では多くの遺跡で出土している。アジョールスク I 遺跡第 2 層（Васильевский, Голубев 1976、Шубин 1979、菊池 1998）でまとまって出土している完形の土器群（第 44 図 2～6）はタイプ C1 の好例であろう。東北大学所蔵の蘭泊、多蘭泊出土の土器群（東北大学文学部考古学研究室編 1982：図版 N037～N045））は、図録掲載資料では 1 点（同上：図版 N040）を除く 8 点がタイプ C1 としてよい。鈴谷貝塚（大場 1967）ではタイプ C1（第 44 図 7～9）のほか、タイプ C2（第 44 図 12・13）が出土している。中部では、来知志（アインスコエ）出土の例にタイプ C1 が認められる（東北大学文学部考古学研究室編 1982：図版 N034・N035）、前田 2002：図 24-33（第 44 図 1））。

タイプ C は北海道でも 2 例出土している。常呂町常呂川河口遺跡例（武田編 2002）（第 44 図 11）と、斜里町ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点例（米村ほか 1972：62）(注 7)（第 44 図 10）で、いずれもタイプ C1 である。2 例とも東部オホーツク海側の出土であり、道北端部のタイプ A を出土する遺跡群からは、タイプ C は全く出土していない。

以上、鈴谷式土器をタイプ A・B・C に分類した。ある意味当然ではあるが、各タイプの間には中間的な土器群も存在する。例えば、伊東氏がデータ a で明らかにしたとおり、タイプ A・B の折衷例は従来から注目されていた。また、スタロドゥプスコエⅡ遺跡 2 号住居址出土例（第 41 図 4・5））はタイプ A と言えようが、図から判断する限り 2 本 1 組の縄線文がやや崩れるなどタイプ C にも近い様相を呈している。ほかにタイプ B と C の中間的な例もある。しかし、このような中間的な土器の存在は、タイプ A・B・C が全て同時期であることを示しているのではない。以下、出土状況等から各タイプの編年を検討し、細別型式を設定してみよう。

2）編年

まずはタイプ A と B の関係である。タイプ B はサハリン南部では出土しているようであるが、北海道では全く出土していない。これはタイプ B の分布が北にやや偏っていることを示唆している。先のデータ b・データ c と突き合わせても、タイプ A・B の分布の中心がそれぞれ南／北に偏っているという見方は可能であろう。一方、ウスチ・アインスコエ竪穴ではタイプ A とタイプ B の両方が床面から出土している。共伴と言い切るには多少の問題があるが、型式学的な

類似性やタイプ A・B の折衷例の存在からみても、同時期の可能性は高いと考えられる(注 8)。以上の点からすると、タイプ A と B の関係は、分布範囲は大きく重なるものの基本的に地域差で、両者はほぼ併行すると考えられる。併行関係をもう少し詳しくみておこう。前述のとおりタイプ A は細分可能で、少なくとも北海道では平底（タイプ A1）が古く、丸底（A2）が新しい。サハリンのタイプAでも同じ細別が可能か否か確言できないが、ウスチ・アインスコエ竪穴例・テルペニエ I 例の丸底のまとまりを考慮すれば、同じ基準（平底／丸底）による細別が仮設できる。だとすればウスチ・アインスコエ竪穴資料は丸底主体であるから、厳密にいえばタイプ A2 の時期でのみ、タイプAとBの併行関係が確認できたことになる。

次にタイプ A・B と C の関係である。タイプ C は北海道～サハリン中部まで広い範囲で出土しており、タイプ A・B と C の関係が地域差だとは考えにくい。一方で、北海道北端部の出土例はタイプ A のみ、ウスチ・アインスコエ遺跡竪穴例はタイプ A・B のみで、双方とも同じ遺跡・遺構からタイプ C は出土していない。このような出土状況は、タイプ A・B と C の関係が時期差であることを示唆している。問題はどちらが古いかであるが、タイプ C1 がまとまって出土したアジョールスク I 遺跡第 2 層では、タイプ C2 は無いようだが、タイプ A・B と思われる土器破片も出土している。このような出土状況は、タイプ A・B～タイプ C1～タイプ C2 という型式組列を示唆している。続縄文土器の系統に連なるタイプ A が、十和田式土器に近いとみられるタイプC2より古いことは確実であるから、この型式組列は古～新の順序で解釈できる。

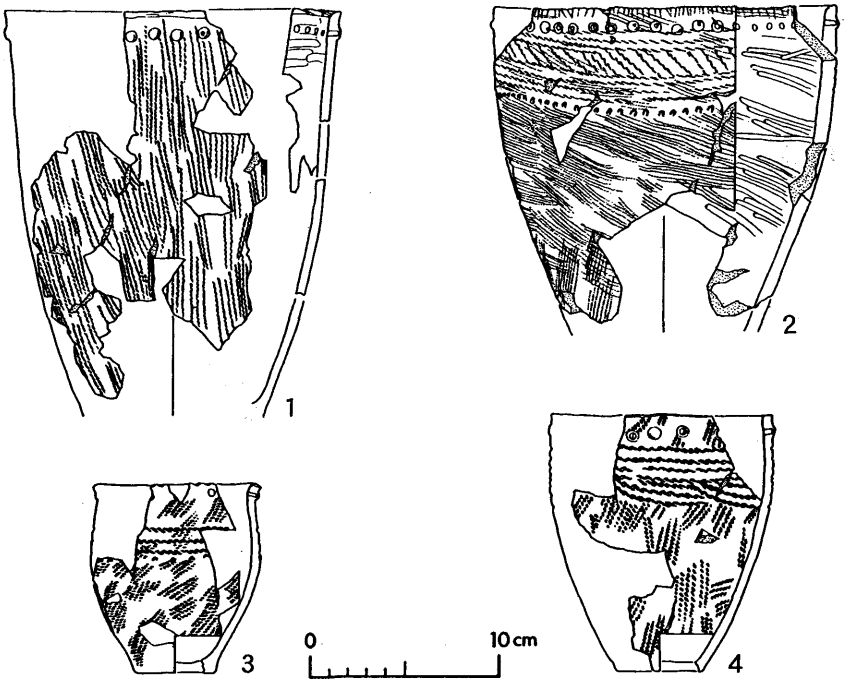
以上、タイプ A・B・C 全体の編年をまとめると、A1 → A2・B → C1 → C2 となろう。地域別に代表的な遺跡・遺構を挙げると第 46 図上の表のようになる。なお、タイプ C1 と C2 の細別を前半・後半の「段階」として扱っているのは、細別の根拠がやや弱いからである。

4.　鈴谷式土器の変遷過程および他型式との関係

次に第 46 図上の表に基づいて鈴谷式土器の変遷・展開過程をトレースし、タイプ A・B・C 間の変遷や交渉、さらに他の土器型式との関係について考察してみたい。

1）成立から I 期まで

a）先行する続縄文土器と鈴谷式土器の型式学的関係



第45図　声問川大曲遺跡Ⅲ群B類土器

道北端部の鈴谷式タイプ A1 と、先行する続縄文土器の関係については「旧編年」ですでに述べたし、別稿（熊木 2003）でもまとめ直す機会があった。ここではその概要を記すとともに「旧編年」の一部を訂正し、別稿で省略した説明を付記しておく。

続縄文初頭から宇津内ⅡaⅠ式期にかけて、北海道北端部にはいわゆる「メクマ式」（大場・菅 1972）や稚内市声問川大曲遺跡Ⅲ群 B 類土器（土肥・種市 1993）といった土器型式群が分布し、一方同時期のサハリン南端部には「遠淵式」（伊東 1937、伊東 1942）や「アニワ文化」に伴う土器群（Ｂａｓｉｌｅｖｓｋｉｙ 2002a）が認められる。道北端部とサハリンで多少の地域差はあるものの、これらの土器型式群は系統的にも分布的にもひとつながりのものといえる（第 46 図下の表）。「旧編年」でも述べたように、これらの型式群と鈴谷式タイプ A1 との間には系統的な関連性が認められる。両者の型式学的な関係を再確認しておこう。

検討対象とするのは、時期的には最も近い関係にある、の声問川大曲Ⅲ群 B 類土器（宇津内ⅡaⅠ式併行）（第 45 図）と、古手の鈴谷式土器である香深井 B 遺跡出土土器群（第 40 図 4～6）である。両者の型式学的な類似点を以下にまとめる。

ⅰ）器形

両者とも、底部中央が内面に向かってやや凹む、上底の例がある。底面外面には縄文を施文する例があるが、これも両者共にある。

ⅱ）文様割りつけ原理

両者とも文様を縦に割りつけることはなく、全て「追いまわし」施文である。声問川大曲Ⅲ群 B 類土器に縦の割りつけがないのは、宇津内ⅡaⅠ式古段階との横つながりで説明ができる。一方、香深井 B 遺跡例に縦の割りつけがないのは、縦の系統（声問川大曲Ⅲ群 B 類からの流れ）と捉えるべきか、横の影響すなわちサハリン以北（タイプ B の祖形？）との関連で説明すべきなのか結論を下すのは難しい。筆者は、併行期のサハリンの様相（後述）から推察してこの時期の南北交渉はまだ活発ではないと考えているので、縦の系統の可能性が強いと推測している。

ⅲ）文様帯・文様要素

口縁部の文様帯・文様要素に共通点がある。文様帯の幅やそこに施された水平線の意匠、縄線文という文様要素の類似については言うまでもなかろう。さらに、声問川大曲例・香深井 B 例ともに縄線文からなる口縁部の文様帯が欠落する例があるのだが、欠落例の割合が前者は 41.6%、後者は 46.9%と組成が似通っており（熊木 1996）、これも偶然ではないとみられる。また、口唇部に施文される例が多数見られるという点にも共通性がある。

時期区分	土器のタイプ	器形	北海道	サハリン		
				南部西海岸～アニワ湾岸	南部・中部の東海岸	中部西海岸
Ⅰ期	A1(･B?)	南部では平底	役場Ⅰ類 香深井B 役場Ⅱ類	鈴谷（第2図1）		※1
Ⅱ期	A2･B	丸底	オンコロマナイ	鈴谷（第3図1）	テルペニエⅠ スタロドゥブスコエⅡ2号	ウスチ･アインスコエ竪穴
Ⅲ期前半	C1	丸底主体	常呂川河口 ピラガ丘	アジョールスクⅠ2層 蘭泊･多蘭泊（東北大学資料）	＋	＋
Ⅲ期後半	C2			鈴谷（第6図12･13）	スタロドゥブスコエⅡ1号	

＋は断片的に資料が確認されていることを示す。

※1　タイプ B とほぼ同じ土器群が、丸底・櫛目文主体で分布することが予想される。恵須取川口第 3 号遺跡資料の大半はこの段階に当てはまる可能性が高い。

	道北端部		サハリン南部		共通する特徴
	型式名	地域的特色	型式名（遺跡名）	地域的特色	
早期	メクマ式・種屯内Ⅰ群	変形工字文等の沈線文 口縁部無文帯	遠淵式・アニワA・アニワB（ユージナヤ2）	―	OI 刺突文・IO 突瘤文（OI 刺突文がやや優勢） 1～3 条程度の縄線文 地文の縄文
前期前半	声問川大曲Ⅲ群 B 類	地文の撚糸文	アニワC・アニワD（プレドレフリャンカ）	地文なし	IO 突瘤文 4 条以上の縄線文

※　早期・前期前半の地域区分は宇田川洋氏による 5 期区分に準じたものだが、早期は一部を改変している。

※　OI は器面外側から、IO は器面内側からの刺突をあらわす。

第 46 図　上：鈴谷式土器編年表

下：宗谷海峡地域の続縄文土器（熊木 2003 より転載）

b）鈴谷式土器と他の続縄文土器の編年対比

以上のように、声問川大曲Ⅲ群 B 類土器と香深井 B 遺跡出土土器群の間には、型式学的な関連性・系統性は認められるとしてよい。問題は両者の時間的関係である。「旧編年」では、鈴谷式タイプ A2 が大沼忠春氏のいう「一般的な後北 C_2・D 式」（大沼 1982b）と併行するとし、そのことから鈴谷式タイプ A1 と声問川大曲Ⅲ群 B 類等の間には、数型式分（続縄文前期後半～中期相当分）の時間的間隙がある、と位置づけた。筆者は現在でもこの編年観自体は概ね妥当と考えているが、鈴谷式タイプ A2 と後北 C_2・D 式の併行関係が確実であるとした点はやや性急であったと反省している。現状では鈴谷式と後北式の詳細な編年対比は困難であり(注 9)、結果的に鈴谷式タイプA1と声問川大曲Ⅲ群B類等との時間的関係についても結論を留保せざるを得ない。ここでは、声問川大曲Ⅲ群 B 類等と鈴谷式が直接連続するとした場合（「連続説」）と、両者間に間隙を認めた場合（「間隙説」）の比較検討をしておく。最近、「連続説」に近い立場の編年が示されている（小野・天野 2002、前田 2002）が、以下に述べるように筆者は現在でも「間隙説」（「旧編年」の編年観）に分があると考えている。

まずは「連続説」である。鈴谷式タイプA1は、前段階の声問川大曲Ⅲ群B類等からの伝統（系統的な類似）が認められるが、続縄文前期後半～中期にかけての、併行することになる続縄文土器の諸型式（後北 A 式・同 B 式、宇津内ⅡaⅡ式、宇津内ⅡbⅠ式など）からの影響は全くと言ってよいほど確認できない。とりわけ、先に述べたように、文様の縦の割りつけというこの段階から続縄文土器全体に盛行してゆく属性が全く認められない点は重要である。道北端部ではこれらの諸型式も断片的ながら出土しているから、「連続説」では鈴谷式の成立過程での接触を想定しなければならないが、その痕跡は全くない。無論、土器製作者による意図的な「作りわけ」等の可能性は皆無ではない。しかし直前の続縄文土器伝統を受け継ぎながら、鈴谷式の段階で突然併行する続縄文土器型式との関係が完全に断ち切られるという説明はかなり不自然である。

次に「間隙説」である。この場合、道北端部では一旦型式連続が途絶え、鈴谷式タイプ A1 の段階でサハリンから鈴谷式が南下してくるという過程が想定される。問題は、タイプ A1 の段階ですでにサハリンと道北端部の間に地域差（胴部縄文の有無等）が存在する可能性がある点である。すなわち、サハリンから道北端部に鈴谷式が侵入してくるとする「間隙説」が正しいのであれば、侵入の時点では宗谷海峡間に顕著な地域差は認められないはずであり、矛盾が生じる。この問題点に対しては、古手の鈴谷式タイプ A1（香深井 B 等）の特徴がよりサハリンに近い、という事実が有効な反論となる。あとはサハリンのタイプ A1 例にも縄文が確認できれば問題はほぼ解決する。サハリン南部のクズネツォーヴォ（宗仁）Ⅰ遺跡では、タイプ A で胴部に縄文を持つ土器が確認されている（小野・天野 2002：112、カシツィン 2003：図 4-4～13）。またタイプ B の例ではあるが、ウスチ・アインスコエ竪穴例の口唇部には縄文が施されている（第 43 図

4)。これらの例は、サハリンの鈴谷式にも縄文が一定の割合で存在する可能性を示唆している。

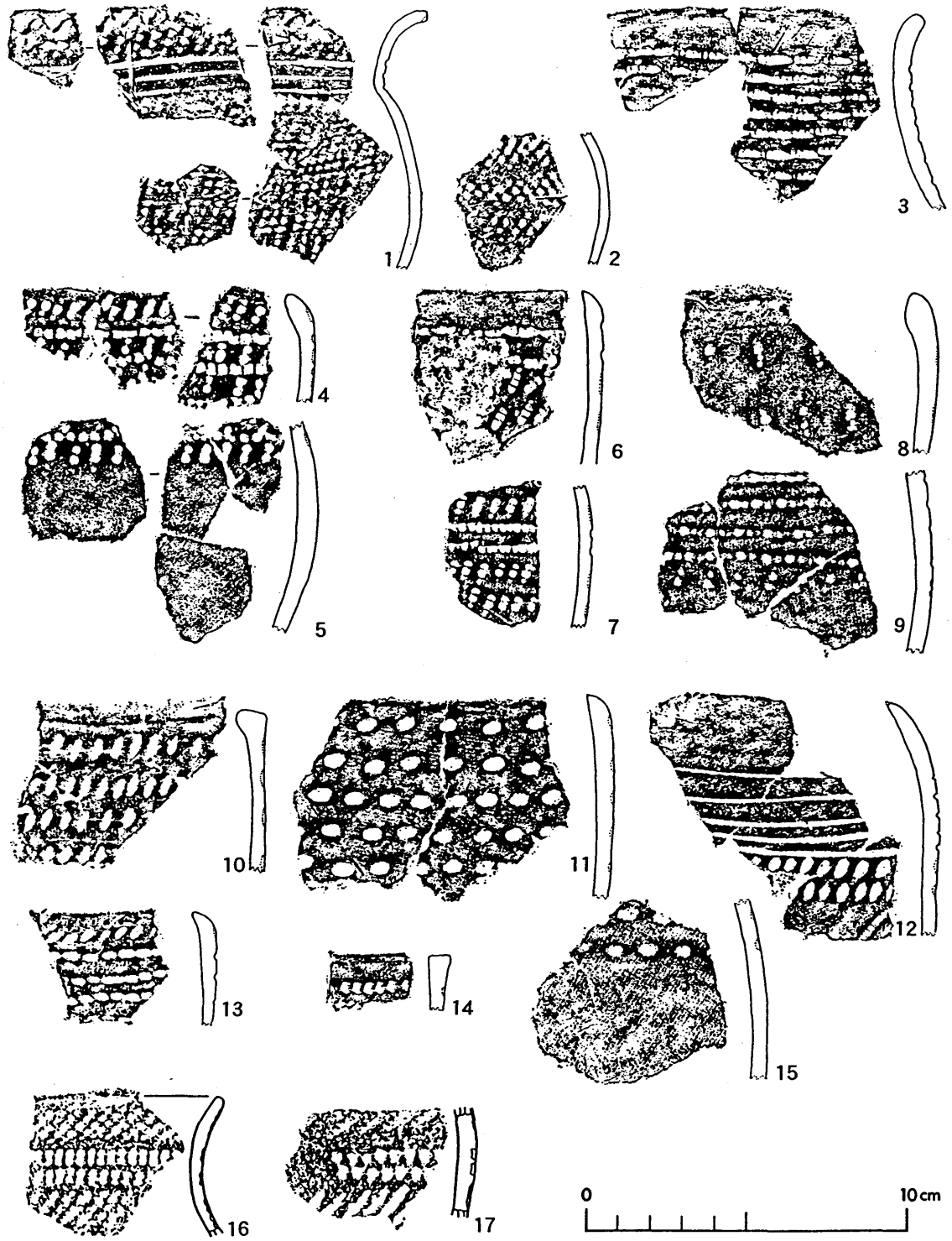
c) サハリン北部の様相

さて、この時期におけるもう一つの大きな問題は、サハリン中部以北、及び櫛目文の土器の様相である。わずかに 1 点ではあるが、香深井 B 遺跡から櫛目文のある土器が出土している点から見て、Ⅰ期にも櫛目文が存在したことは確実である。現状では想像に近いが、Ⅰ期のサハリン中部には、櫛目文を主体とする形で、タイプ B に近い文様を持つ丸底の土器が分布していたと仮定しておこう。この推論の根拠は 2 点ある。1 点は、サハリン中部に櫛目文、南部に縄線文が多いというデータ b・サハリン中部に櫛目文の土器がほぼ単純で出土するというデータ c である。次の時期のウスチ・アインスコエ竪穴例では櫛目文と縄目文の比率は拮抗しているようであり、櫛目文の方が特に多いということはない。にもかかわらずデータ b・c が成立するのは、サハリン中部に縄線文が拡大するのはⅡ期の比較的短い期間のみであって、他の時期では櫛目文が卓越していたからではないだろうか。もう 1 点は底部形態の問題である。Ⅱ期に丸底が卓越する前提として、Ⅰ期の櫛目文土器が丸底で、その影響がⅡ期に鈴谷式タイプ A2 にも及んだという過程が想定しうる。

なお、櫛目文の土器に関連して興味深いのが、サハリン北部東海岸のハンツーザ出土土器群（山浦 1985）（第 47 図 1～15）の問題である。以前にも述べたが（熊木 2000a）、このハンツーザ資料のうち、櫛目文を持つ土器群（第 47 図 1～9）はアムール河口部の「初期鉄器時代河口部類型」（臼杵ほか 1999）（第 47 図 16・17）とほぼ同じ土器群である一方、鈴谷式の櫛目文土器とは相違点も多い（前田 2002）。しかし山浦氏も述べるように、文様要素や施文のモチーフの点でハンツーザ資料は鈴谷式タイプ B との共通点もあり、両者の間には何らかの関係があると推定しうる。その関係が通時的なもの（時期差）か共時的なもの（併行する隣接型式）か、あるいはその両方に跨るものかは全く不明であるが、ハンツーザの施文が鈴谷式タイプ B よりもより複雑で密集している、という点に着目すると、タイプ B よりやや古いことが想定しうる。この仮定も未だ想像の域を出ないが、鈴谷式タイプ B の成立過程を解明するヒントとなろう。

2) Ⅱ期

Ⅱ期での大きな変化は、鈴谷式タイプ A2 の縄線文土器がサハリン中部まで拡大し、ほぼ全ての底部形態が丸底化することである。サハリン中部と南部・北海道北端部との交渉が密接になったと解釈できよう。南北交渉活発化の影響は、前述のようにウスチ・アインスコエ竪穴例では櫛目文と縄目文の比率が拮抗する形であらわれ、道北端部側では底部形態が丸底化する形であらわれている。しかしこの時期でも北海道に櫛目文が存在しない点は、櫛目文＝北部中心／縄線文＝



第47図　サハリン北部ハンツーザ・アムール河口部ウゴールナヤ出土土器

1～9：ハンツーザ（櫛目文）　10～15 ハンツーザ（刺突文）　16・17：ウゴールナヤ

南部中心という地域差がこの時期まで温存されていることを示している。タイプ B／タイプ A2 という細別型式が並立し、両者が明瞭に分離できる点はその現れといえる。

3）Ⅲ期から終末まで

Ⅲ期になるとサハリンでは文様構成が単純化し、鈴谷式タイプ C1 が成立する。北海道では、北端部の遺跡群ではタイプ C1 が出土せず継続性が絶たれるが、道東オホーツク海沿岸でわずかではあるが新しくタイプ C1 が確認されるようになる。Ⅲ期のこのような変化は、北の櫛目文／南の縄線文という並立構造が崩れ、両者が融合して地域差が消滅する動きとしてとらえることができよう。また北海道で出土が激減する点からすると、この変化を縄線文伝統の衰退とみることも可能であろう。なお鈴谷式タイプ C1 は確認例こそ少ないがサハリン中部でも出土しており、Ⅲ期での変化が鈴谷式の分布域全体で生じたことがわかる。

一方、タイプ C1 に後続するとみられる鈴谷式タイプ C2 は、タイプ C1 より狭い範囲でしか確認されていない。管見で確認できた資料は、まとまった例としては鈴谷貝塚（大場 1967）とスタロドゥプスコエⅡ遺跡 1 号住居址（Ｋｏｚｙｒｅｖａ 1967）の例のみで、北海道やサハリン中部では確認できていない。資料数が限られる現状では分布域の縮小として扱ってよいか否か確言できないが、この問題は後述のように重要である。

次にオホーツク土器である十和田式の成立に関する問題について触れておこう。鈴谷式タイプ C2 の器形・文様と、後続する十和田式のそれとの間に型式学的な関連－特に「短刻線」の文様と「砲弾型」の器形に見る共通性－を認める意見がある（菊池 1971、天野 1977、山浦 1985）。筆者もこの見解に賛同したいが、この点に関連性を認めたとしても鈴谷式タイプ C2 と古手の十和田式（天野 1998、熊木 2000b、天野・小野 2002）の関係をとぎれのない型式変遷とみるのは難しい。両者がスムーズにつながるのか否か、つながらないとしたら第 3 の型式の影響があるのか否かなど、鈴谷式と十和田式の関係に関しては、現状でも不明な部分が多い。

なお、十和田式土器の成立問題に関しては、分布の問題も重要である。十和田式の分布はサハリン南西端～北海道北端を中心とする狭いもので（天野・小野 2002）、先立つ鈴谷式や、後続するオホーツク刻文系土器と比較すると分布域の狭さが際だっている。このように分布域が縮小する背景や、かつて鈴谷式が分布していた地域（サハリン南東部やサハリン中部以北など）に十和田式や他の未確認の土器型式が分布するのか否か、という問題は、十和田式、ひいてはオホーツク文化の成立過程を考える上で避けては通れない案件であろう。鈴谷式タイプ C2 の時期に分布が縮小するように見えることとあわせ、今後の課題としたい(注 10)。

5.　各氏の編年案および「旧編年」との対比

ここでは近年の各氏の編年や、筆者自身の「旧編年」との異同についてコメントしておこう。

大井晴男氏はオホーツク文化の成立過程に関して、「いわゆる鈴谷式土器によって示されるグループ」と「いわゆる十和田式土器によって示されるグループ」との間に「スタラドゥプスコエⅡ遺跡を残したグループ」を介在させる、との案を示した（大井 1981：546-547)。大井氏の議論は人間集団の異同を問題にしており、本論で扱う土器編年とは対象・方法論が異なっているため単純比較はできない。しかし筆者の編年は大井氏と考え方が近い部分があり、氏の議論からは有益なヒントを得ている。ただし氏は北海道の「いわゆる鈴谷式土器によって示されるグループ」と「スタラドゥプスコエⅡ遺跡を残したグループ」とを時間的にほぼ併行させているようであり、鈴谷式タイプ A と C を時期差とし、両者間に連続する型式変遷を想定する筆者とはその点で意見を異にする。

また筆者の編年は、小野裕子・天野哲也の両氏の「編年」と結論（遺跡単位の新旧関係）が一致する部分が多い（小野・天野 2002)。しかし、筆者の土器の見方や型式編年の方法は両氏とは異なる。特に両氏が示した「縄目文土器」が古く「櫛歯文土器」が新しい、との編年観は、「複雑から単純へ」という筆者のそれとの開きが大きい。結果としてウスチ・アインスコエ竪穴資料の位置づけや、鈴谷式タイプ C2 と十和田式の関係に関する部分などで齟齬が生じている。ただし、鈴谷式の変遷を「『縄目文』のグループ」と「『櫛歯文』のグループ」が接触するプロセスとみる、という両氏の問題設定そのものには一部同意する。筆者も「旧編年」の時点からこの枠組みで土器型式の編年をとらえてきた。

前田潮氏の編年（前田 2002：187-192）からは、一貫した型式変遷の流れを読みとることが困難なように思われる。また道北端部の資料の位置づけに関しては事実認定の段階から筆者との隔たりが大きい。ただし筆者は、タイプ A とタイプ B の施文のモチーフ・配置法が近いという点について、前田氏の編年からきわめて重要な示唆を得ている。

種市幸生氏と筆者の編年では、オンコロマナイ例と香深井 B 例の序列が逆転している（種市 1997：95)。氏の編年の論拠は、オンコロマナイ遺跡内で丸底→平底という変遷が想定できる、という点にあるようである（種市 1980：206)。筆者の考えは本文及び(注 6)で言及したので繰り返さない。

筆者自身の「旧編年」と本論の違いであるが、もっとも大きな進歩は鈴谷式タイプ C1 を提唱した点にある(注 11)。「旧編年」の時点で筆者はタイプ C1 という細別型式の存在をほとんど意識しておらず、結果としてアジョールスクⅠ遺跡第 2 層の土器群をオンコロマナイに併行させる

という誤りを犯してしまった。タイプ C1 という細別型式の設定と、それによって示された「複雑から単純へ」との変遷観こそが本章の要点である。

6.　小結

従来、縄線文の鈴谷式はサハリン南部～北海道北端部を中心に、櫛目文の鈴谷式はサハリン中部～南部を中心に分布すると考えられてきた。そのこと自体は今日でも正しいと考えられるが、縄線文＝南部／櫛目文＝北部、という二分法的な理解が支配的になってしまったためか、縄線文・櫛目文をさらに細別するという発想は近年まで生まれてこなかった。しかし、縄線文＝南部／櫛目文＝北部という単純なとらえ方では、ウスチ・アインスコエ竪穴資料や北海道東部の櫛目文例をうまく説明できなくなってきている。一方、最近の各氏の編年ではこの問題に配慮はされているが、土器そのものの系統的な変遷観の提示が不十分であると筆者には思われるし、各地域・遺跡での土器出土状況を説明しきれていない部分がある。同じ問題点は残念ながら「旧編年」の一部にも存在していた。

本章では「複雑から単純へ」という変遷観を新たに提示し、遺跡での出土状況を基にそれを検証することによって、以上の問題の解決を試みた。その結果、櫛目文／縄線文というかたちで北／南に分かれていた 2 つの型式が段階を追って融合してゆく、というプロセスが明らかになってきた。続縄文土器の北方進出に端を発する縄線文と、サハリン以北・以西の伝統に連なる櫛目文が融合してゆくという動きは、鈴谷式に後続するオホーツク文化の系譜や成立過程と関連する流れとして注目される。

しかしオホーツク文化の成立・展開は、もう少し広い範囲での動向を視野に入れて考えなければならない。本文にも触れたように、鈴谷式～十和田式～刻文系土器に至る時期の状況がある程度具体的に判明しているのは、十和田式の分布するサハリン南西端～北海道北端部においてのみである。これ以外の地域、特にロシア極東地域との接点であるサハリン北部やアムール河口部、鈴谷式の段階では遺跡が存在するサハリン南東部などでは、十和田式の併行期にいかなる動きがあったのか不明のままである（臼杵・熊木 2003）。オホーツク文化の成立過程を考える上で、鈴谷式から十和田式への変化プロセスを追うことが最も重要であることは疑いないし、本論もその点について一定の成果を収めたと考えている。しかしオホーツク文化の成立・展開がロシア極東地域の動向と無関係ではあり得ない以上、今後は周辺地域との交渉を含めた広い範囲のなかでオホーツク文化の成立過程を捉え、解明していく必要があろう。

注

(1) 鈴谷式の底部形態には様々なバリエーションがある。本稿では煩雑さを避けるため、いわゆる「乳房形」の尖底と文字通りの丸底の器形を一括し、丸底として扱うことにする。

(2) これら北海道の出土土器群について、一部を既存の型式（遠淵式・メクマ式）に含める見解もあるが（菊池 1981）、筆者は岡田宏明氏などと同様（岡田 1967）、すべて鈴谷式に含める立場をとっている（熊木 1995）。なおサハリンとの地域差を重視して新たな型式を設定する山浦清氏の立場は理解できるが（山浦 1985）、ここは同一型式の地域差ととらえておく方が型式の実態に近く、全体状況を把握しやすいと考えられる。

(3) 香深井B遺跡では2例（大場・大井編 1981：第532図19・第574図）、役場遺跡でも2例（内山編 1995：第10図50・第13図109（本文第2図8））丸底ないしそれに近い例があるが、4例中3例はミニチュアないし小型の土器、あるいは特殊な器形である。オンコロマナイ遺跡には平底とされる土器が2例がある（泉・曽野編 1967：Fig.1-5・Fig.2-6）が、底面が小さく不安定な形態をしており、上記2遺跡の平底例とは形態・製作技法ともに異なる。筆者は丸底の先端が土器製作時につぶれた結果の「平底」であると考えている。なお、前田潮氏は役場遺跡とオンコロマナイ遺跡の平底例（内山編 1995：第13図108（本文第2図7）・泉・曽野編 1967：Fig.2-6）について「はじめ丸底に成形し、その後、底部の外側から粘土を巻きつけて平底に仕上げる」と述べているが（前田 2002：190）、筆者の観察ではそのような技法は確認できなかった。

(4) これに近い指摘は、大井晴男氏によって当時すでになされていた（大井 1981：544-545）。

(5) 筆者は現在では、大別の根拠として、製作技法上の差以上にデータfの事実が重要であると考えている。

(6) 実は当時すでに、香深井Bとオンコロマナイが時期差であるとの指摘はなされており（大井 1981）、さらに香深井B→オンコロマナイという編年が山浦氏によって提示されていた（山浦 1985）。そこにあえて筆者が「旧編年」を提出した意図は、他の続縄文土器との型式学的対比や、土器以外の編年に頼らなくとも、役場遺跡資料の追加により鈴谷式土器自体の層位と型式学的検討から編年が可能になるという、方法上の転換を示すことにあった。この意図と成果はその後に発表された各氏の編年（種市 1997：95、前田 2002、小野・天野 2002）では重要視されていない。「旧編年」以後の各氏の編年と筆者の間には、編年そのものの違いもさることながら、方法論上も隔たりがある点に注意されたい。

(7) ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点例の文様については、報告書では「縦に押捺した縄目文」（米村ほか 1972：62）とある。しかし筆者の観察では施文原体は先端が4叉、もしくは5叉となる櫛目文で、縦に施文した後、器面調整等によって表面が一部磨り消されているように見受けられた。なおこの土器の実測と掲載に関しては斜里町教育委員会の松田功氏の協力を得ている。この場をお借りしてお礼を申し上げる。

(8) この推論はデータcと矛盾していると思われるかもしれない。この点については本文中に後述する。

(9) ここで「旧編年」で述べた後北 C_2・D式との編年対比を訂正しておく。「旧編年」では、オンコロマナ

イ出土土器に施されていた同心円のモチーフ（岡田 1967：Plate25）を根拠に、本論で言う鈴谷式タイプ A2 と大沼編年の「一般的な後北 C_2・D 式土器」を併行させた。しかしこれはやや軽率であった。なぜならば同心円のモチーフ自体は、道東北部の編年で言えば宇津内ⅡaⅡ式（熊木 1997）から後北 C_2・D 式Ⅱ期（熊木 2001）にわたって継続的に認められるのに対し、オンコロマナイ例の文様はある時期にピンポイントで比定できるほど特徴的なものではないからである。

一方「旧編年」でも引用したが、常呂川河口遺跡 57 号竪穴では、床面よりやや浮いた位置から鈴谷式タイプ C1（第 44 図 11）と北大Ⅰ式が、床面から筆者編年の後北 C_2・D 道東 4a 式が出土している（武田編 2002）。「旧編年」では出土状況から、この鈴谷式は後北 C_2・D 式と同時期か、それ以後に位置づけられると考えたが、これもやや早計であった。というのも、この出土例から 3 者中の 2 者のみを抜き出し、併行と位置づけるならば層位に対する恣意的な解釈となるからである。一方、報告者の武田修氏は、この 3 者の土器が「極めて近い時間関係」にあったことを想定している（同上：78）。武田氏の見解にも補足が必要であろう。なぜならは、筆者の編年からすると後北 C_2・D 道東 4a 式と北大Ⅰ式が同時期であるとは考え難く（熊木 2001）、この例を 3 者の併行としてとらえるならば型式編年や他の遺跡の出土状況と齟齬が生じてしまうからである。現在筆者は、武田氏のいう「極めて近い時間的関係」は「廃棄の同時性」ととらえるべきで、廃棄時に複数時期にわたる資料が混入したと考えている。しかし、それを直接証明するデータがないことも事実である。よってこの常呂川河口遺跡例の扱いについては今後の研究に委ねたいと思う。

上記以外の遺跡のデータからは、タイプ A の鈴谷式が「後北式のいずれかに伴うという以外に、確定的なことはいえない」（熊木 1996：16）のが現状である。よって本論では「旧編年」の編年対比を撤回し、「鈴谷式タイプ A は、後北 C_2・D 式前後と併行する可能性がある」との立場まで後退することにする。

(10) 最近、木山克彦氏らがアムール下流域の「バリシャヤ・ブフタ土器群」、およびそれと関連が強い、サハリン中部以北東海岸を中心に分布する「ザーパトナヤ 10 タイプ」の土器群について考察している（木山ほか 2003）（以下、両土器群をまとめて「ザーパトナヤ土器群」と略）。氏らは「ザーパトナヤ土器群」と続縄文土器やオホーツク土器との関係について、「ザーパトナヤ土器群」の初期のものをサハリンのプリェドリェフリャンカ遺跡例（声問川大曲Ⅲ群 B 類相当＝宇津内ⅡaⅠ式古段階併行）に併行とし、もっとも新しい「ザーパトナヤ土器群」は十和田式の古手付近まで降る、と位置づけた。しかしこの編年対比では、「ザーパトナヤ土器群」は続縄文期のほぼ全期間存続したことになってしまう。その可能性は皆無とは言えないが、かなり不自然な想定であろう。また、続縄文前半期の土器群と「ザーパトナヤ土器群」との間に型式学的な関連がある、という氏らの主張についても、例外的な交渉があった可能性は否定しない。しかし大局的な見地からすると、相互的な型式交渉の痕跡はほとんど見あたらない、すなわち両者が全く関連していなくても各々の系統解釈は成り立つ、というのが実状ではないだろ

うか。

一方筆者はかつて、この「ザーパトナヤ土器群」を十和田式の古手併行として想定したことがある（熊木 2000a）。その根拠は、1）十和田式の古手に IO 突瘤文が多いが、それは「ザーパトナヤ土器群」で一般的な文様要素であること、2）新手の鈴谷式は丸底となるが、それも「ザーパトナヤ土器群」と共通する器形であること、3）十和田式の分布はサハリン南西部に偏り、「ザーパトナヤ土器群」とは排他的な分布を示すこと、の 3 点であった。もっとも筆者の想定も、現時点ではそれを裏付けるだけの型式学的論証を欠いており、未だ論理上の仮説に止まっている。

木山氏らの努力によって「ザーパトナヤ土器群」の具体像は次第に明らかになってきており、「アニワ文化」～鈴谷式～十和田式に至る道程や、併行期のサハリン北部との関係についても光が見えてきたとは言える。しかし「ザーパトナヤ土器群」と続縄文土器・十和田式との関係については未だ決定的な評価が下せるまでには至っていない、というのが筆者の認識である。今後もこの問題に注視していきたい。

(11) 「旧編年」の時点で筆者は、鈴谷式タイプ C2 を細別型式として設定しうる可能性については意識していたが、他の鈴谷式との関連について説明不能であったため明言を避けていた。「タイプ C1」という細別の意識が欠けていたため、合理的な説明ができなかったのである。

第6章　続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位

1.　はじめに

本章では第Ⅰ部の総括編として、続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位の変遷について地域・時期別にまとめ、続縄文土器の型式変遷を構造的な視点から再評価することにする。

2.　各土器型式群の文様割りつけ原理と文様単位

1）宇津内式土器（続縄文前半期網走地域）

宇津内式土器の型式変遷は、文様の縦の割りつけ原理の変化に着目すると理解が容易となる。変遷過程をまとてみよう。

a）縄文晩期後葉から宇津内式ⅡaⅠ式古段階にかけて縦の割りつけは衰退し、縦の割りつけのない0単位が主体となる。

b）宇津内ⅡaⅠ式新段階になると縦の割りつけが息を吹き返し、宇津内ⅡbⅠ式にかけて側面－正面の違いを強調した縦の割りつけ（2+2単位）が発達する。

c）宇津内ⅡbⅠ式では縦の割りつけがさらに細かくなり、8等分の位置に新たな割りつけが出現する（SF+4単位）が、これは後北B式と一部共通した割りつけといえる。続く宇津内ⅡbⅡ式になると後北C_1式の強い影響により文様帯の横方向の分割が導入されるが、側面－正面観を強調する割りつけはかろうじて存続し、網走地域では後北C_1式の割りつけ原理と宇津内式の割りつけ原理が併存する状態となる。

2）下田ノ沢式土器（続縄文前半期釧路地域）

下田ノ沢式土器（続縄文前半期釧路地域）の型式変遷も前半部分は宇津内式と同じ構造を有しており、文様の縦の割りつけ原理の変化で理解が可能であるが、後半部分になると地域差が生じてくる。変遷過程は以下のとおりである。

a）縄文晩期後葉から下田ノ沢Ⅰ式（宇津内Ⅱa式併行）までは、文様の縦の割りつけ原理は網

走地域と同期した推移となる。

b) 下田ノ沢Ⅱ1 式期以後になると地域差が生じる。具体的には、釧路地域では 2+2 単位の割りつけは継続するものの、8 等分の位置の割りつけ（SF+4 単位）は導入されない(注 1)。この 8 分割の割りつけ法は後北 B 式とも一部共通するものであるから、後北式系統は網走地域と相対的に近く、釧路地域とは相対的に遠い関係にあることがここから言える。

3) 道央部における続縄文前半期の土器型式群

後北式土器群の文様割りつけ原理・文様単位は、恵山式系統の文様帯の上に、宇津内式系統の縦の文様割りつけの影響が重なって成立する、という順序・構造で考えると理解しやすい。具体的には以下のとおりである。

a) 続縄文の初頭～江別太Ⅲ6 層段階においては、縄文晩期後葉から続く在地系統の土器が土器組成の主体となる。これら在地系統の土器は縄文晩期以来の幅の狭い口縁部文様帯を持ち、0 単位または 4 単位の文様割りつけを有する。

b) 江別太Ⅲ6 層段階から道央部への恵山式の侵入が活発化し始め、アヨロ 2b 式相当期では在地系統はほぼ消滅して恵山式単独の組成となる。この時点で道央部には恵山式の文様帯－すなわち口縁部と胴部の 2 帯の文様帯－が移入され、後北式系統内で存在し続ける。

c) 後北 A 式になると胴部文様帯が横に分割されるようになるが、これは恵山式アヨロ 3a 式との関係を考える必要がある。一方で縦の文様単位はすべて 4 単位化する。一部に 2+2 単位に近い割りつけが認められたり、宇津内式系統特有の文様要素（貼付文）や文様意匠が導入される例があることから判断すると、この時期から道央部と道東部の交渉が顕在化してくると考えられる。

d) 後北 B 式になると横方向の割りつけは胴部文様体内で多段化する（単位の分割または重畳）。縦方向の割りつけは 4 等分のほかに 8 等分も主体となるが、これは前述のとおり宇津内ⅡbⅠ式の割りつけとも一部共通する。後北 B 式と宇津内ⅡbⅠ式の間には文様の構造的な類似があると考えるべきであろう。

4) 後北 C_2・D 式土器における文様割りつけ原理と文様単位

後北 C_2・D 式土器から北大式土器にかけて文様の割りつけは衰退し、縦・横とも文様単位が不明瞭になってゆく。ただし後北 C_2・D 式を細別してみると、文様割りつけ原理の変遷過程には地域差があることが判明する。そのような地域差をまとめると以下のようになる。

a) 後北 C_2・D 式初頭（第 4 章のⅠ期）では、文様割りつけの点に着目すると地域差が明瞭である。道央部以南では後北 C_1 式以来の文様割りつけが強く保持されているのに対し、道東部で

は在地の系統がわずかに残った結果、文様割りつけがやや崩れている。また、道東部と南千島地域間にも同様の地域差が存在する可能性がある(注2)。

b) 後北 C_2・D 式中葉（第4章のⅡ期）になると道東部にも道央部の文様割りつけ原理が浸透し、地域差はほぼ消滅する。

c) 後北 C_2・D 式Ⅲ期になると道東部では道央部的な文様割りつけがいち早く衰退し、再び地域差が生じてくる。

5) 鈴谷式における文様割りつけ原理と文様単位

鈴谷式土器は併行する後北 C_2・D 式とは異なり、文様の縦の割りつけを持たない。これは大陸的な様相として解釈できる可能性もあるが、道北端部の続縄文初頭～続縄文前期の土器群の割りつけ（0単位主体）がサハリン南部で引き継がれてきたと見る方が蓋然性が高い。

3.　文様割りつけ原理・文様単位を分析する意義について

以上、続縄文土器型式群の文様割りつけと文様単位について概観した。本論第Ⅰ部ではこれらの変遷を骨組みとして編年を構築してきたが、土器の編年研究に際しては、文様の割りつけ原理を検討するのみでは不十分なことは言うまでもない。本論では他の様々な属性についても適切な方法で取り上げて検討してきたつもりだが、製作技法等の問題も含め、まだまだ不十分な点があることは否めない。その意味で、文様割りつけと文様単位に重きを置いた本論第Ⅰ部の分析は、続縄文土器に付加されている多様な属性の一面を明らかにしたに過ぎないという見方もできよう。

しかしながら、続縄文土器編年研究についていえば、従来の研究では個々の器形や文様の検討が中心であり、土器型式群を系統的・構造的に把握しようをする試みは特に不十分であった。土器型式編年研究においては、「連続性の認識にしても他型式の影響にしても、文様や器形の近似を個々に指摘するだけでは十分とはいえない。その近似が構造的なものなのか、部分的なものなのか、部分的なものだとしたら構造的にみた場合のどの部分の近似なのかを吟味する必要がある」（今村 1983：124）のである。個々の土器ならびに一型式内の土器群について器形と文様を結びつける構造を把握し、土器型式間でそれらの構造を比較検討することによって、器形と文様の変遷や影響関係を正しく理解できるようになる。すなわち、土器型式間に存在する縦の系統関係と横の影響関係を理解する上で、文様の割りつけ原理の検討は重要な役割を果たすといえる。その意味で、本論で採用した視点・方法は、続縄文土器型式間における通時・共時の関係をより明確に、構造的に解明する上で有効なものであり、続縄文土器の編年を点と点の比較ではなく、

縦と横の構造体として理解するために必要な手段であると位置づけることができる。このような分析方法・視点を開拓できた点こそが本論第Ⅰ部における最大の成果である。

注

(1) 南千島で確認されている「下田ノ沢Ⅱ2 式」（第 2 章参照）では、不完全ながら SF+4 単位が認められるようであり、この段階になると南千島地域にも後北式及び網走地域の割りつけの影響が浸透していくようである。ただし類例が少ないため、影響の強度・浸透状況等は不明とせざるを得ない。

(2) 筆者はいくつかの資料（杉浦 1999、鈴木ほか 2003 等）を写真や実測図で瞥見したにすぎないが、それでも南千島の資料にはいくつかの地域的特色が散見されるようである。例えば貼瘤文・貼付文の多用はその最たるものであろう。文様割りつけ原理の地域差については、帯縄文の意匠には顕著な差はないようであるが、貼付文が 2 単位となっている例が認められる点には注目される。おそらく南千島では後北 C_2・D 式の中葉（第 4 章のⅡ期）まで在地の伝統が痕跡的に残存するのであろう。

第II部

オホーツク土器の編年

第７章　香深井Ａ遺跡出土オホーツク土器の再検討
－北海道北部の編年－

1.　本章の目的

北海道北部のオホーツク土器型式編年で最も重要となる資料は、礼文島香深井Ａ遺跡（大場・大井編 1976・1981）の出土土器群であろう。この土器群は、出土量が道北部随一であるとともに、「きわめて明らかな層位的関係をもって堆積」（大井 1982a：（上）23）したとされる複数の包含層にまたがって出土した。土器型式編年上、きわめて好条件のもとで出土した資料といえよう。

この香深井 A 遺跡出土土器群に対しては、すでに大井晴男氏が「型式論的変遷」に関する考察を行っている（大井 1982a）。大井氏はこの論文の中で伊東信雄氏によるサハリンのオホーツク土器編年（伊東 1942）を批判し、さらには伊東編年が立脚していたと考えられる、山内清男氏による土器型式編年の方法（山内 1932・山内 1937・山内 1964 など）についても「方法論をして有効ではありえない」（大井 1982a：（下）33）との評価を下し、後述するような独自の「型式論」を展開した。

この大井氏の説（以下、大井「型式論」と略）に対してはすでに林謙作氏の反論がある（林 1991）。ただし林氏の反論は縄文土器研究の事例を根拠としたもので、オホーツク土器そのものの分析に基づいた直接的・具体的な反論は現在まで提出されていない。ちなみに代案となる編年の提示という形で大井氏と異なる見解がその後いくつか発表されたが（右代 1991、柳澤 2000、柳澤 2001、その他）、そこでは大井「型式論」に対する言及はほとんどなされておらず、議論はかみ合っていない。大井「型式論」は香深井 A 遺跡の調査成果と直結しているのであるから、香深井 A 遺跡資料を用いて独自の編年を論じようとするならば、大井「型式論」に対する批判的検討が必要となるはずである。

以上の現状認識から、本章では香深井 A 遺跡出土土器、ならびに大井「型式論」の再検討を中心に据えて、道北部オホーツク土器編年を再構成する(注 1)。分析・記述に煩瑣な部分があるが、大井「型式論」への反論を具体的に述べる必要があったので、止むを得ず微に入った議論を展開した。読者のご寛恕を願うものである。

2.　大井氏の「型式論」について

最初に大井氏による香深井 A 遺跡出土土器群の分析と、大井「型式論」の要点について再確認しておこう。

大井氏はまず、香深井 A 遺跡で確認された各魚骨層（魚骨層Ⅰ～Ⅵ）について、「相互の間に資料の混淆が起る可能性はほとんどない」（大井 1982a：（上）23-24）ことを強調した。そしてそのような層位的関係を前提とした上で、同遺跡出土オホーツク土器の「器形」と口縁部の「文様要素」につい第 48 図・第 49 図上のような分類を行い、各魚骨層別に集計した（第 49 図下）。この集計結果から導き出された考察と結論は以下のようなものであった。

a）香深井 A 遺跡の「器形」と「文様要素」は、それぞれ漸移的に推移し、同一の層位中には複数の型式学的特徴が共伴する（例えば、第 49 図下の魚骨層Ⅲでは、沈線文系・刻文系・刺突文系の文様要素が共伴している）。

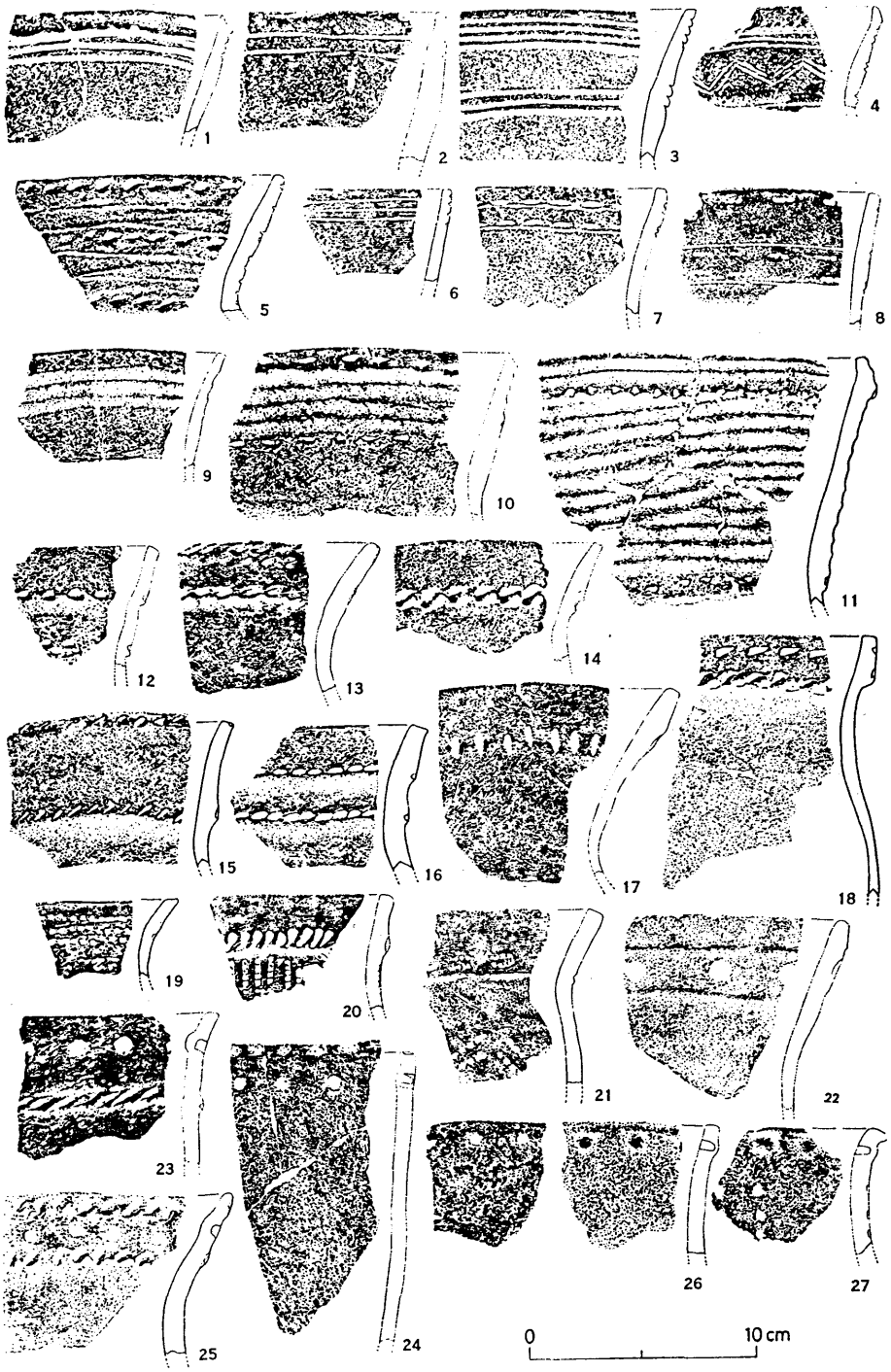
b）よって、伊東信雄氏が行ったように（伊東 1942）、「器形」かつ／または「文様要素」を指標としてオホーツク土器の型式細別を行うならば、複数の型式が香深井 A 遺跡の各魚骨層中で共伴することとなる。伊東氏は土器型式を「互いに重複しないものとして、縦の関係で編年」（大井 1982a：（上）37）していたわけであるが、そのような型式編年は香深井 A 遺跡の調査成果とは矛盾する。よって、伊東氏の方法でオホーツク土器の型式を設定するならば、それらの各型式は「編年的」単位とはならない。

c）香深井 A 遺跡での型式変遷がオホーツク土器一般の変遷と異なっていたと考える理由はないので、以上のような「漸移的な型式論的変化」はオホーツク土器全般の特徴とすることができる。

以上の大井「型式論」に対し、筆者は下記の点について議論の余地があると考える。

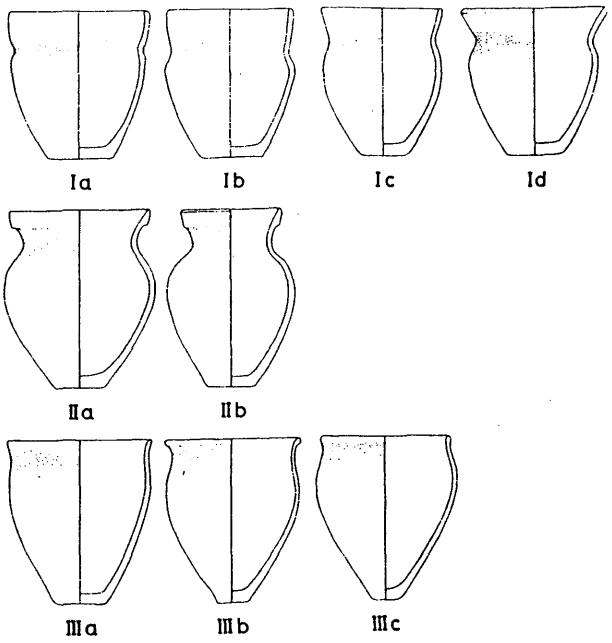
a）層位と型式のクロスチェック

大井「型式論」は、香深井 A 遺跡の層位間で混淆がないことを前提として成立している。しかし、そもそも層位と型式は「相互に他を前提とする意味での循環関係にある」（大塚 2000：56）わけであるから、「層位は型式に優先する」という前提を無条件に採用することはできないはずである。

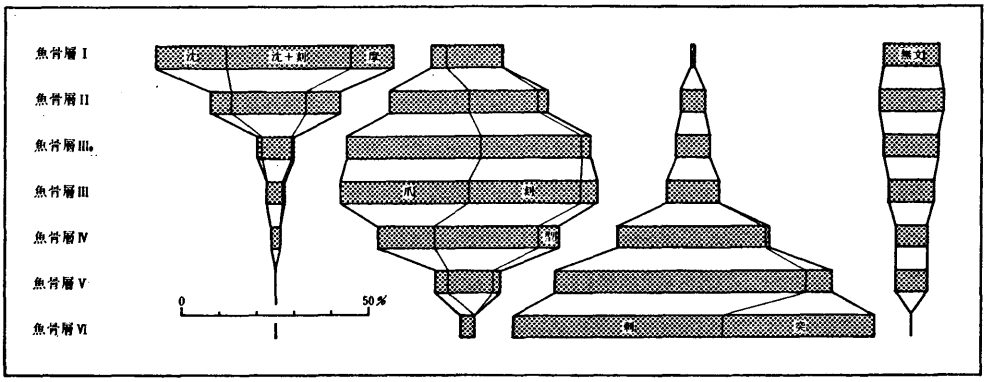


香深井A遺跡出土土器の文様要素
1～4　沈線文　5～8　沈線文＋刻文等　9～11　摩擦式浮文　12～14　爪形文
15～18　刻文　19～22　型押文　23～25　円形刺突文　26・27突瘤文

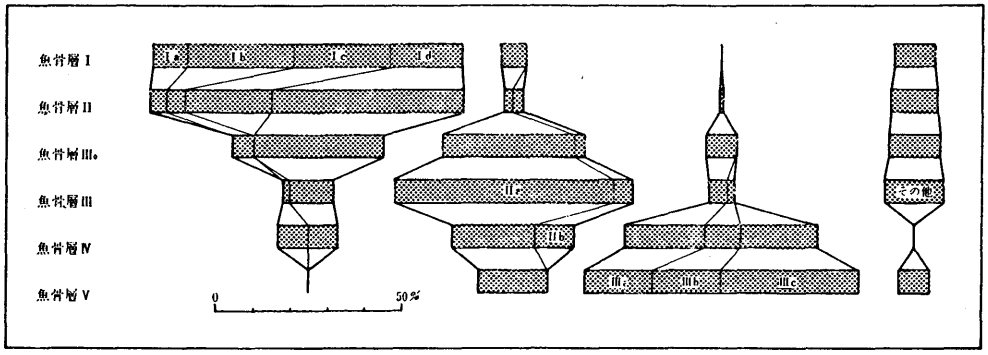
第48図　大井氏による文様要素分類（大井 1982a）



香深井A遺跡出土土器の器形による分類
Ⅰa－d甕形土器　Ⅱa-b壺形土器
Ⅲa－c深鉢形土器（大場・大井, 1975）



香深井A遺跡の各魚骨層土器群における文様要素の変遷（大場・大井, 1981による）



香深井A遺跡の各魚骨層土器群における器形の変遷（大場・大井, 1975・1981による）

第49図　上：大井氏による器形分類（大井 1982a）
下：香深井A遺跡の各魚骨層における属性の変遷（大井 1982a）

もっとも大井氏は、香深井 A 遺跡の「型式論的変遷」が順調であること、すなわち第 49 図下のセリエーショングラフが順調に推移している点も層位に混淆がないことの傍証となる、とも述べている。その論理からすると型式学的見地からも層位の検証が一応は行われており、一方的に層位を優先させているわけではないというべきかもしれない。それでは香深井 A 遺跡で認められるとされる、「複数の細別型式の共伴」(3 型式以上の共伴) は他の遺跡でも確認できるのであろうか。筆者はむしろ、1 型式単純の、あるいは 2 型式のみから構成されている遺跡など、細別型式間の「区切り」で遺跡が断絶する例を示すことによって、大井氏の説に疑問を投げかけてみたい。

b) 型式変遷の実態について

大井氏は土器型式のすがたについて、「一定の型式論的特徴をそなえた一群の土器がそのままの形である期間存続するわけではない」としている (大井 1982a : (上) 37)。しかし実は、大井「型式論」で分析されているのは様々な型式学的特徴を備えた、言うなれば「属性の束」としての「土器そのもの」ではない。そこでは各属性群が「文様要素」と「器形」というわずか二つの指標に還元・単純化され、しかもそれら二つの指標が各々独立した形で分析されているだけである (林 1991)。

確かに、口縁部文様要素を型式細別の指標とした大井氏の判断は大筋では正しい。しかし我々が土器型式を認知・弁別する際には、一つないし二つの指標のみを基準とする場合は少なく、時期差を敏感に反映するいくつかの属性を構造的に把握して型式をイメージし、判断している場合が多いのではないだろうか (林 1990a)。このように「複数の属性の組み合わせ」に着目してオホーツク土器を分析した場合、後述のように刺突文系の土器と刻文系の土器の関係は相対的に排他的であるが、刻文系と沈線文系の土器の関係は相対的に漸移的であるなどという評価が可能となり、型式間の関係は一様ではなくなる。すなわち、型式設定の基準や方法如何では、香深井 A 遺跡における土器型式変遷の実態は、大井氏の言うような「全く一連の漸移的な推移」ではないことになる。このように本論では、大井「型式論」とは逆に型式変遷の実態が「単調ではない」ことを明らかにする。「単調ではない」とは、型式変遷は「一定の型式論的特徴をそなえた一群の土器がそのままの形である期間存続する」という説明に近くなる時期もあるし、また逆に「複数の型式論的特徴が (中略) 重複しながら漸移的に推移してゆく」(大井 1982a : (上) 37) というあり方に近くなる時期もある、という意味である。

話が少々複雑になったので単純化して整理し、何を検証するのかについて見通しを示しておこう。

大井「型式論」では、A、B、C という三つの型式は時間的に併存しつつ、A : B : C の割合が

変化する、というかたちで変遷することになっている(注 2)。それに対し筆者は、この A、B、C 型式の変遷は A→B、次に B→B'、さらに B' →C と言う順で起こることを示す。そして少なくとも A と C については型式学的な関連性が薄く、さらに A と C は層位的にも共伴する可能性が低いことをいくつかの遺跡例から論証する。A、B、C の三者が併存する時期がないのであれば、大井氏の言うような「型式論的変遷」は成立し難いことになる。さらに筆者は A と B の「類似する度合い」と、B と C の「類似する度合い」とが異なることを示し、A から C に至る型式変遷の過程は「全く一連の漸移的な推移」だったのではなく、型式変遷そのもの、さらには型式変化を生じさせた背景が A から C に至る期間内で一様ではなかった可能性を示唆する。以上が本章の趣旨である。

本章の構成であるが、まず先に香深井 A 遺跡出土土器に対して型式学的再検討を行い、大井氏とは異なった型式細別を設定する。次に香深井 A 遺跡以前／以後の諸型式を補完して道北部の土器型式編年全体を再構成する。さらに香深井 A 以外の遺跡での出土状況と香深井 A 遺跡の「層位的関係」とを対比して両者の矛盾を指摘し、香深井 A 遺跡の「層位的関係」には再検討の余地が残されていることを指摘する。以上の順序で道北部の編年を再検討することにしたい。

3.　香深井 A 遺跡出土土器の型式学的再検討

1) 分類対象となる属性と分類項目

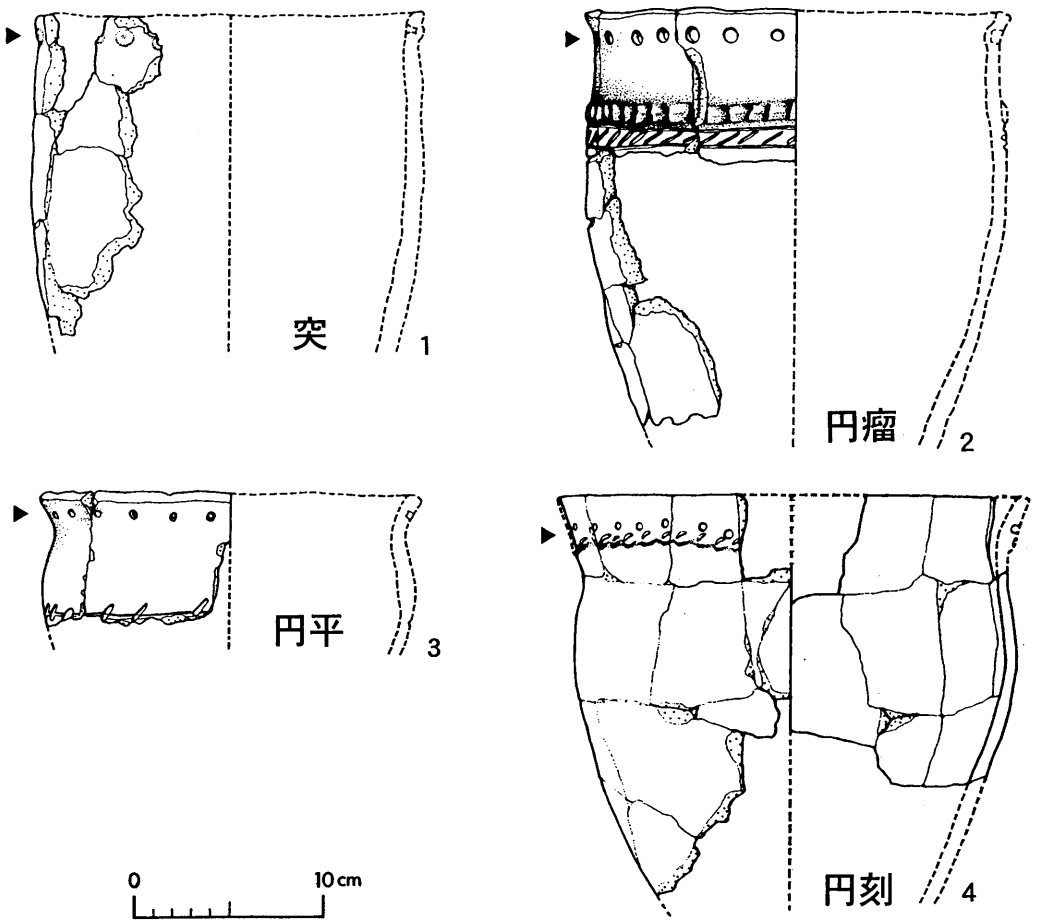
ここでは香深井 A 遺跡出土土器(注 3)の型式学的特徴を新たに分類し直して再検討する。

まずは時間軸に沿って変化する属性を抽出する。そのような属性として挙げられるのは、やはり「器形」と口縁部「文様要素」であり、これらの特徴に含まれる諸属性が型式細別の指標として有効であることは疑いない。問題は、それらの諸属性のなかから時期差を敏感に反映しているものをうまく抽出し得るか否か、そして抽出した属性を時系列に沿った組列へと誤りなく配列できるか否かであろう。

ここではまず「器形」「文様要素」をより詳細な属性に分解し、各属性について大井氏とはやや異なる分類を試みる。なお各属性中の分類項目の配列順は、基本的に旧→新の順序を仮定した並びとする。

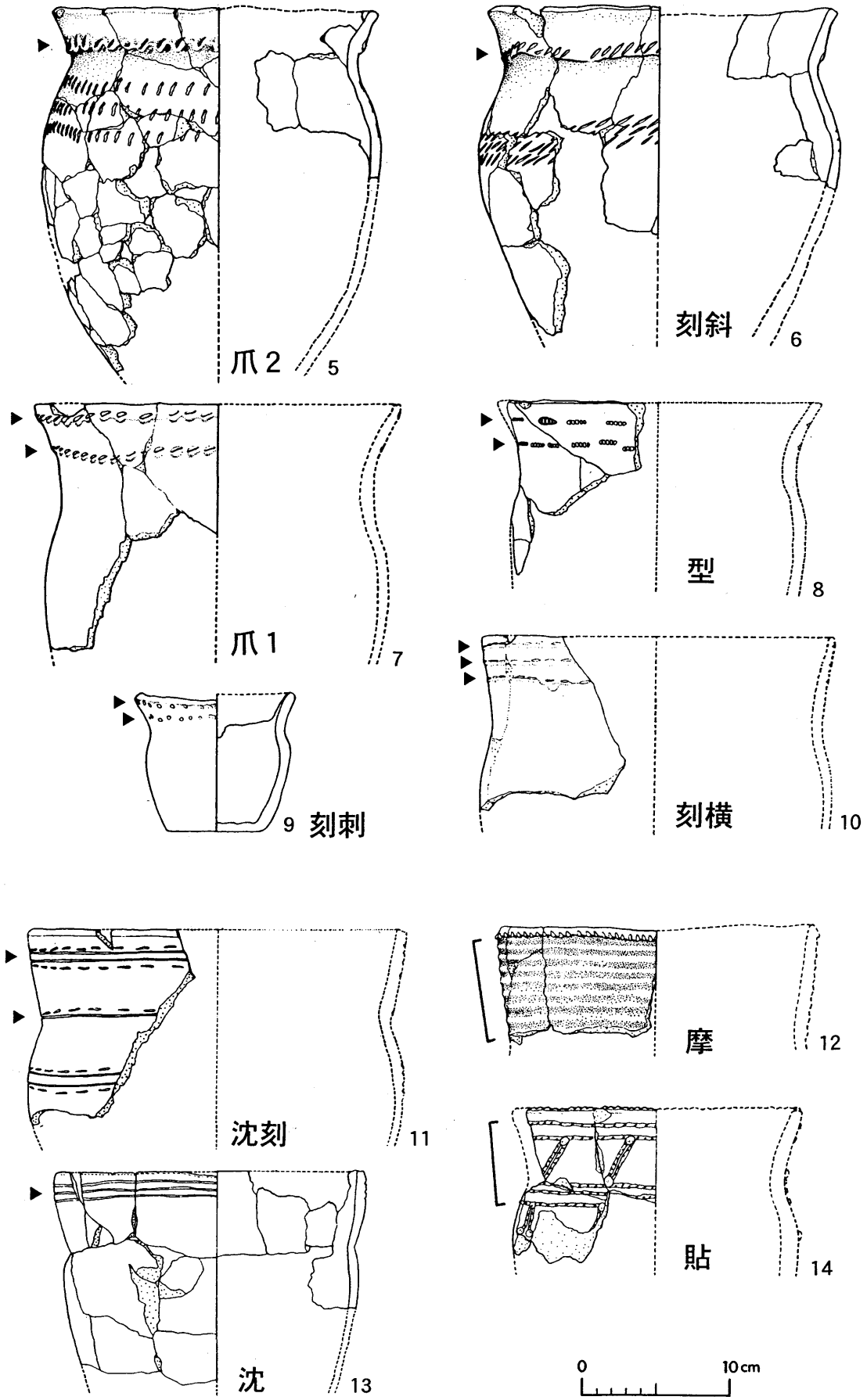
a) 口縁部文様要素

大井氏の分類を基本としてさらに細別を行い、第 50 図～第 52 図のように 15 の項目を設定する。複数の文様要素が併存する場合は、より珍しい方の（少数例の）項目へ分類する。



第 50 図　口縁部文様要素の分類（1）

1～4：香深井 A



第51図　口縁部文様要素の分類（2）

5～14：香深井A

大分類	番号	略号	名称	説明	大井氏分類との対応
刺突文系文様	1	突	突瘤文	器面の内面から断面円形の施文具を刺突し、外面に瘤を作る	「突瘤文」と同じ
	2	円瘤	円形刺突文（内面瘤あり）	断面円形で棒状ないし竹管状の施文具を器面外面から刺突し、内面に瘤を作る	「円形刺突文」の一部
	3	円平	円形刺突文（内面瘤なし）	2と同じ施文具・施文法を用いているが、内面に瘤を作らない	「円形刺突文」の一部
	4	円刻	円形刺突文と刻文系文様の併存	1～3の刺突文系文様と、刻文系文様が併存するもの	「円形刺突文」の一部
刻文系文様	5	爪2	2本の指による爪形文	親指と人差し指など、相対する二本の指の爪を用いて施す。つまんでひねるものと、ほとんどひねらないものがある	「爪形文」の一部
	6	刻斜	縦～斜め方向の刻文	棒状の施文具の先端を器面上で縦～斜め方向に動かして刻みつける	「刻文」の一部
	7	爪1	1本の指による爪形文	一本の指の爪で刻みつける	「爪形文」の一部
	8	型	型押文	先端が櫛歯状に分かれた施文具をスタンプのように押捺する。なお「型」と他の種類の刻文系文様が併存する例はここに分類する	「型押文」の一部
	9	刻刺	刺突文	1～3以外の施文具で刺突する。器面上で施文具を動かさない点で6・10と異なる	「刻文」・「型押文」の一部
	10	刻横	横方向の刻文	棒状の施文具の先端を器面上で水平に動かして刻みつける。なお「刻横」と他の種類の刻文系文様が併存する例はここに分類する	「刻文」の一部
沈線文系文様	11	沈刻	沈線文と刻文系文様の併存	刻文系文様と、13の沈線文が併存するもの	「沈線と爪形文・刻文・型押文が複合施文される場合」と同じ
	12	摩	摩擦式浮文	太い棒状の施文具あるいは指などで器面をなでつけてできる凹面の線を隣接させ、複数の凹凸線を作出する。刻文が併存する例も含む	「摩擦式浮文」と同じ
	13	沈	沈線文	12を除く、様々な太さの沈線文。口唇部外縁に刻みを併存する例を含む	「沈線文」と同じ
その他の文様	14	貼	貼付文	道東部のオホーツク土器に多く見られる、細い粘土紐を貼り付けた文様	「貼付式浮文」※と同じ
	15	無	無文	胴部にいずれかの文様があっても、口縁部が無文のものはここに含める。多くの例は胴部を含めて全くの無文	「無文」

※大井1982では省略されている。大場・大井編1981では記載がある。

第52図　口縁部文様要素分類一覧表

なお大井氏の分析結果によれば、15 の無文は各時期を通じて一定程度見られることが判明しているので、第 52 図の 1 から 14 まで（「突」～「貼」まで）を時間軸に沿った旧→新の配列と仮定する。

b）口縁部施文位置

口縁部のどの位置に施文されているか、という属性である。大井氏分類でもこの属性は意識されているが、文様要素との相関が強いためか、氏の分類では「文様要素」に含めて記述されている。ここでは文様要素から独立させ、第 53 図のように分類項目を設定する。この属性を分類基準に採用する主な意図は刻文系の土器を細別することにある。

「直下」・「屈曲」は刺突文系文様、「下縁」は刻文系文様にそれぞれ特有の施文位置である。「面」は複数の文様列が口縁部の広い面積にわたって施文される例を基本とする。沈線文系文様に特有の施文位置であるが、刻文系文様が施文される例も少なからず存在する。なお、刺突文系文様が「直下」・「屈曲」の位置以外に施文されている例は「面」に含めた。

ここでは 5 の「施文なし」を除いた 1 から 4 まで（「直下」から「面」まで）を旧→新の配列と仮定しておく。

c）口縁部肥厚帯の形

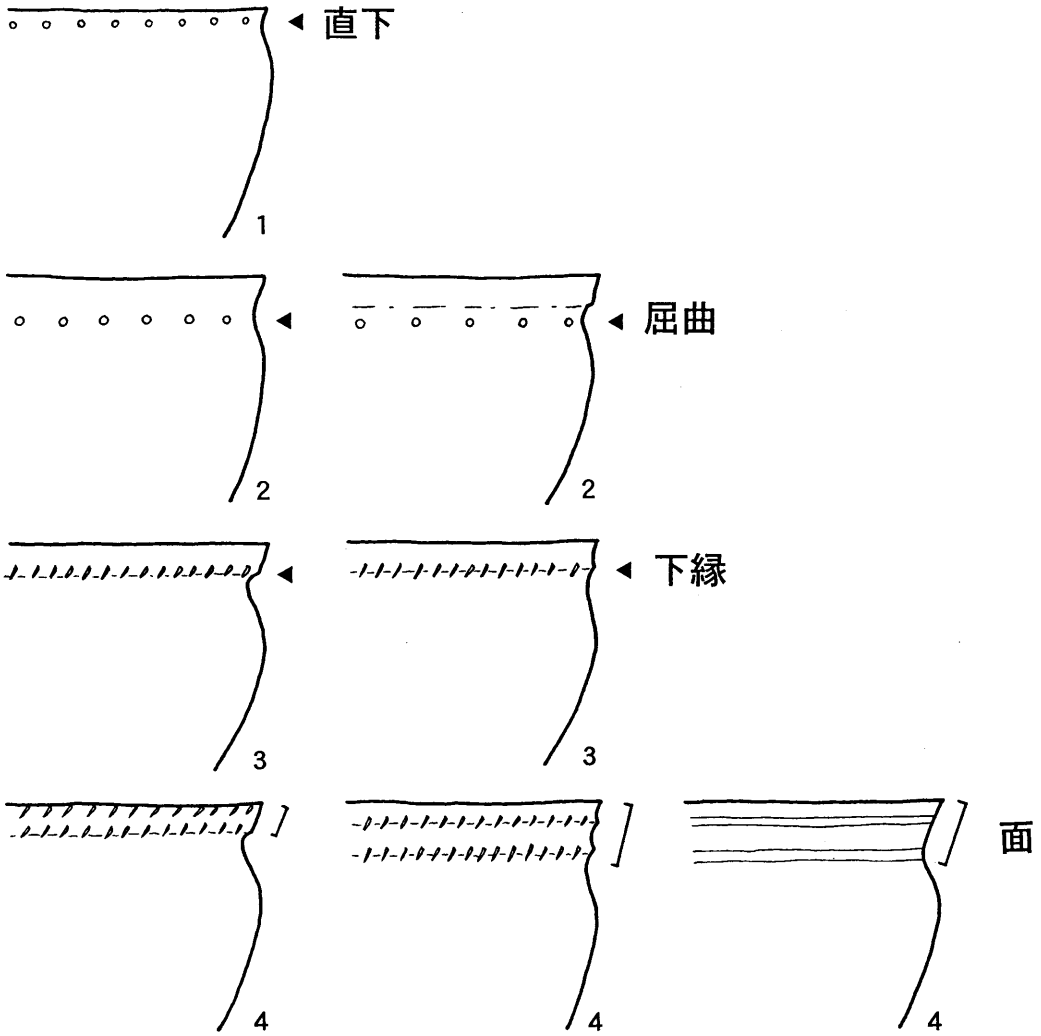
大井氏の「器形」分類では、器形のモデルを設定し、実際の器形がどのモデルに最も近いかを判別するという方法を用いている。しかしこの方法は判別が主観的になりやすく、また、分類の基準に複数の属性（土器のプロポーション、肥厚帯の有無等）が採用されているため判別基準がわかりにくい、という問題がある。よって、ここでは大井氏の「器形」に関する諸属性を、「口縁部肥厚帯の形」と「プロポーション」の二種類に分けて再構成する。

口縁部肥厚帯の形については第 54 図のように分類する。「無 1」と「無 2」は本来「肥厚帯なし」として一括すべきかも知れないが、型式組列を編年上有効なものとするために断面形によって分けた。

ここでは 1 から 4 まで（「無 1」～「無 2」まで）を旧→新の配列と仮定しておく。

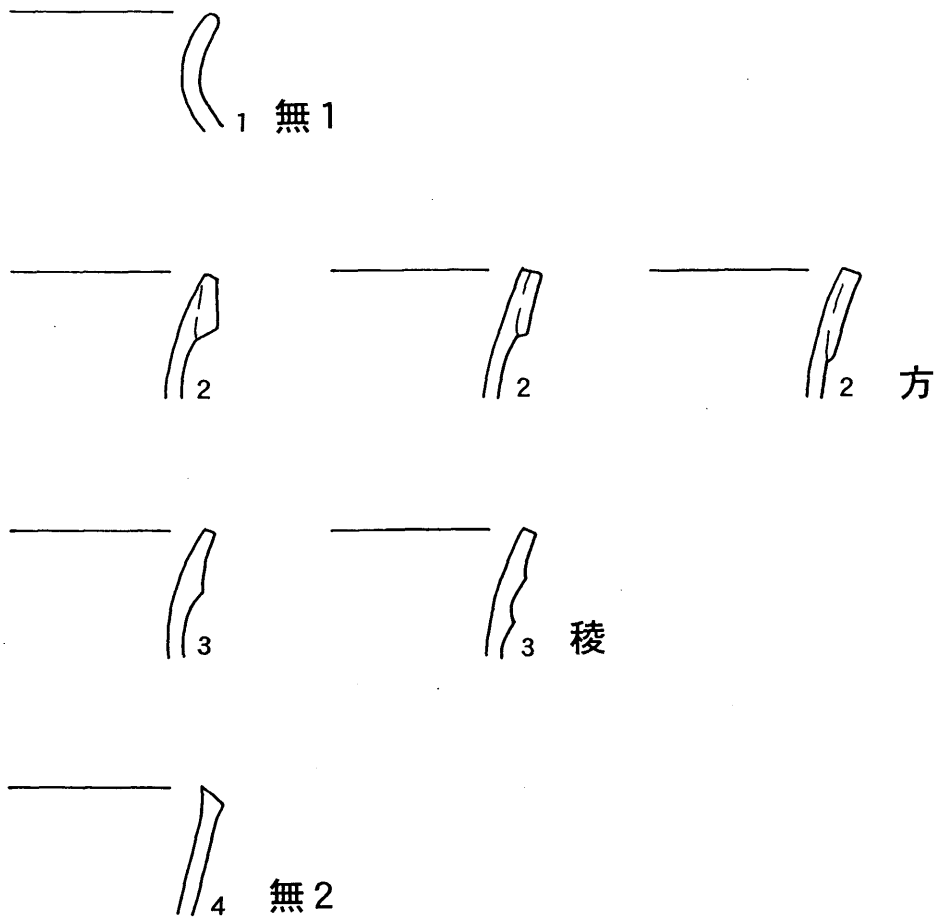
d）土器上半部のプロポーション

プロポーションの分類には、モデルではなく計測値による比率尺度を用いる。完形土器が少なく上半部しか遺存していない例が多いので、土器上半部のプロポーションのみを分析対象とする。



番号	略号	名称	説明
1	直下	口唇の直下	口唇の直下に文様を水平に巡らせる。刺突文系文様に特有の施文位置。複数の文様要素が併存する場合でも、刺突文系文様がこの位置に施文されている場合はここに分類する
2	屈曲	頸部の屈曲部	口唇部よりかなり下の、頸部の屈曲部に文様を水平に巡らせる。刺突文系文様に特有の施文位置。複数の文様要素が併存する場合でも、刺突文系文様がこの位置に施文されている場合はここに分類する
3	下縁	肥厚帯の下縁	断面方形もしくは稜状の肥厚帯の、下縁部にのみ文様を巡らせる。口唇部外縁にも施文される例は4に分類する。刻文系文様に特有の施文位置
4	面	口縁部の面	1～3以外。すなわち、肥厚帯の有無とは無関係に、口縁部の全面もしくは一部に水平方向に文様が施文される。多くの場合、文様要素列は複数になる。沈線文系文様に特有の施文位置であるが、刻文系文様がこの施文位置に施される場合も多い。なお、刺突文系文様が1・2以外の位置に施文される場合はここに分類する
5	無	施文なし	口縁部に施文がないもの

第 53 図　口縁部施文位置の分類



番号	略号	名称	説明
1	無1	肥厚帯なし（1）	肥厚帯を持たないもののうち、口唇部近くで緩やかに外反する例。口唇面は丸みを帯び、面取りはない。刺突文系文様と結びつく
2	方	断面が方形もしくは三角形の肥厚帯	断面が方形、もしくは三角形の肥厚帯を有する例。断面がやや厚手のものから、薄くて幅広のものまで多少の変異がある。肥厚帯の段数は1段が多い。壷型の器形と結びつく例が多い
3	稜	断面が稜状の肥厚帯	口縁部の下縁部分に薄手で断面が稜状の肥厚帯を有する例。紐状の粘土を貼り付けて稜部分を作る例と、ナデ等の調整によって稜部分を作る例の両方がある。肥厚帯の段数は1段のほか、複数の段を持つ例も多い
4	無2	肥厚帯なし（2）	肥厚帯を持たないもののうち、口縁部が直線的に立ち上がる例。大きく緩やかに外反したり、口唇部近くで内灣する例もある。口唇面に面取りが施され、外傾する例が多く見られる。刺突文系以外の文様と結びつく

第54図　口縁部肥厚帯の分類

第 55 図上のように頚部の最も括れた部分の径を a、胴部最大径を b、口縁部から a までの高さを c、口縁部から b までの高さを d とし、頚部の括れ度合い（a/b）と口縁部の高さ比（c/d）を算出する(注 4)。大井氏のモデルに従えば、大井氏のⅢ群＝a/b が大きく c/d が小さい→Ⅱ群＝a/b と c/d がともに小さい→Ⅰ群＝a/b と c/d がともに大きい、という変遷が想定できる。

実際の土器の計測値をプロットしたのが第 55 図下のグラフである。データの分布は散らばっており、グループ別の凝集は形成されていない。このようにプロポーションの変異は漸移的になるので、分類は任意の基準で行うことになる。ここでは時系列に沿った変化を把握するため、プロポーション以外の属性との相関を参考に分類基準を設定する。

プロポーションと他の属性の相関関係を示したのが第 56 図のグラフである。大井氏モデルから予測された器形変遷との相関が強いのは、第 56 図上のグラフ文様要素、第 56 図中のグラフの口縁部施文位置である。この二者のうち各グループ別の凝集がより明確なのは口縁部施文位置との相関であるので、これを分類基準に採用する。

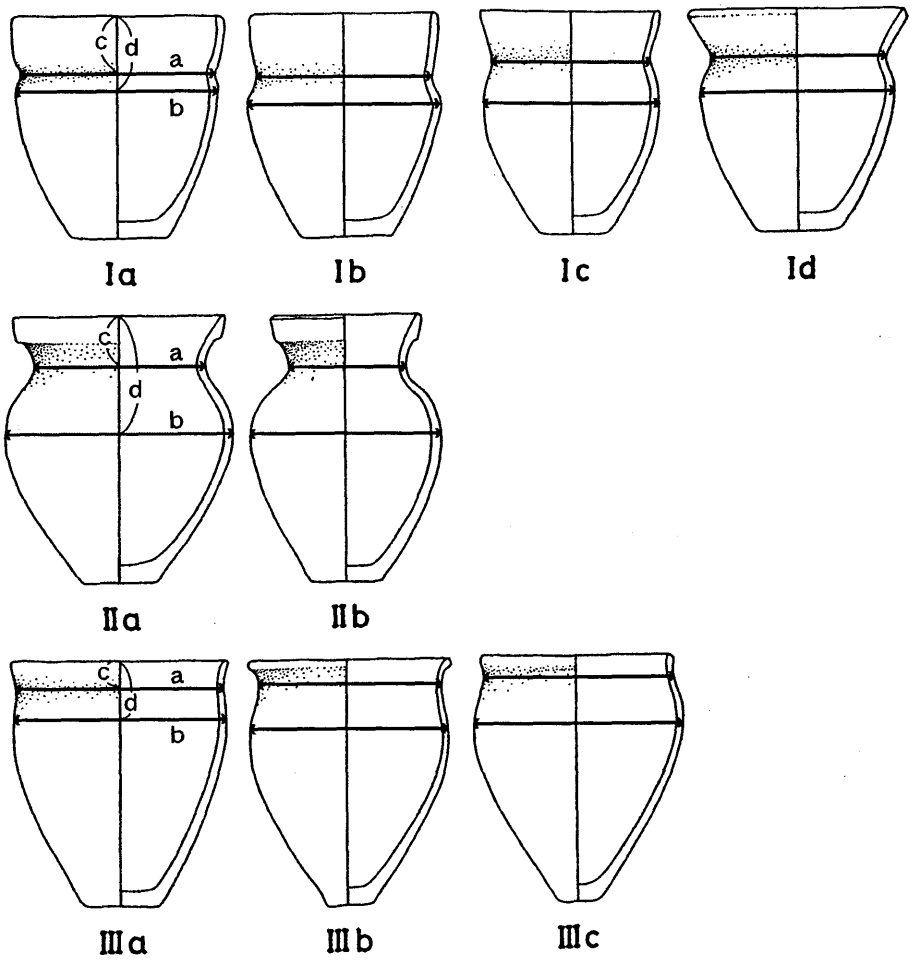
口縁部施文位置の「直下・屈曲」例と「下縁」例、「下縁」例と「面」例の各 2 グループ間に対して線形判別関数を用いた判別分析(注 5)を行うと、第 57 図のようになる。グラフ中の境界線に挟まれた四つの領域を A・B・C・D とすると、領域 C は「下縁」、領域 D は「面」を主体とする領域となる。領域 A では「面」と「直下」・「屈曲」が共存するが、器形全体の類似を示すものではないと考えられる(注 6)。よって領域 A の土器のうち「直下」・「屈曲」のものを A1、それ以外のものを A2 とする。一方領域 B では「直下」・「屈曲」を主体としながら「下縁」も共存する。この共存は漸移的変遷をあらわす可能性がある。

以上、領域 A の土器は施文位置を基準にプロポーション A1 と A2 に分け、領域 B・C・D の土器はそのままプロポーション B・C・D と読み替え、計 5 種類の分類項目を設定する。旧→新の序列は A1・B→C→D・A2 と仮定されよう(注 7)。

2) 属性の組み合わせと細別型式の設定

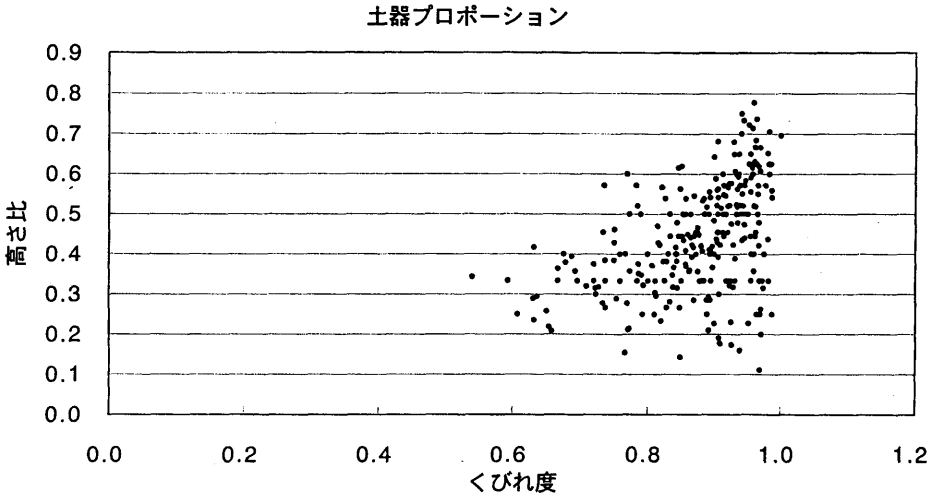
4 種類の属性をクロス集計したのが第 58 図～第 59 図である。古手の属性は別の古手の属性と、新手の属性は別の新手の属性と結びつく傾向にあり、各種類の序列間に不整合はほとんど生じていない。意図的に属性間の相関が強くなるよう設定した分類もあるので、この結果はある部分では当然ではあるが、前節で仮定した属性の新旧関係は検証できたといえる(注 8)。すなわち、いずれの属性も型式細別の指標として有効であることが立証されたといえよう。

次にこれら各属性の組み合わせに基づき細別型式を設定する。まずは頻繁に見られる属性の組み合わせパターンを抽出してみよう。4 種類の属性全ての組み合わせパターンと該当する個体数を示したのが第 60 図である。個体数の分布傾向をまとめてみよう。



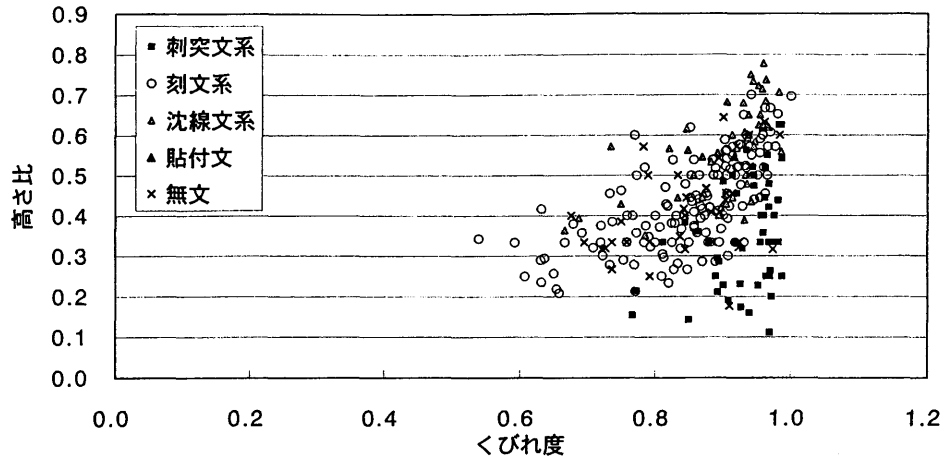
くびれ度＝a／b　　高さ比＝c／d

器形ⅢとⅡの判別はくびれ度で、ⅡとⅠの判別はくびれ度と高さ比で、ⅢとⅠの判別は高さ比で行えると仮定できる。

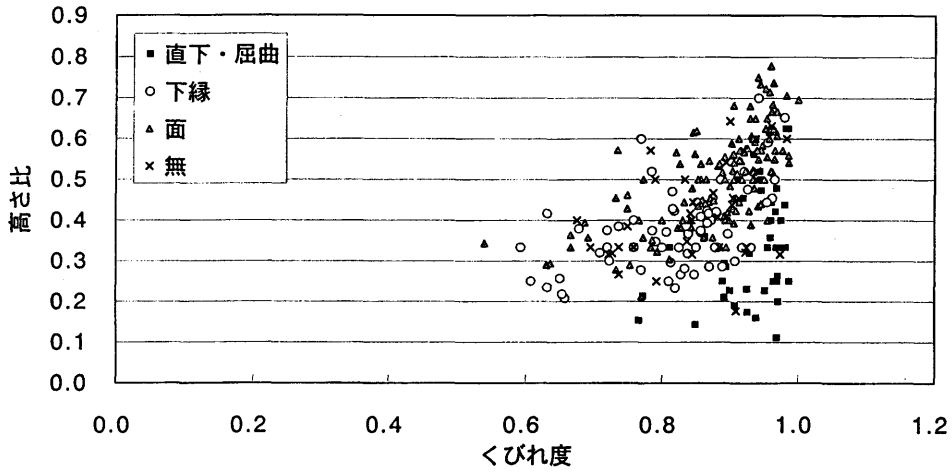


第55図　器形（土器上半部プロポーション）の分類

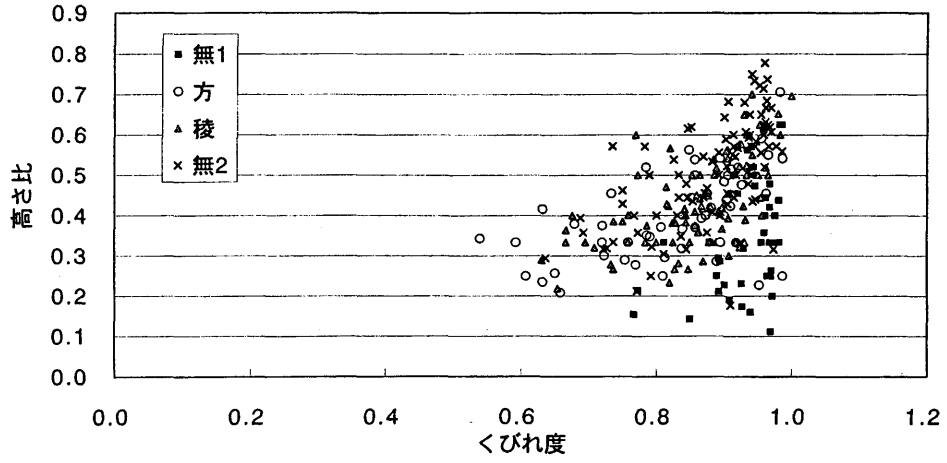
文様要素との関係



口縁部施文位置との関係

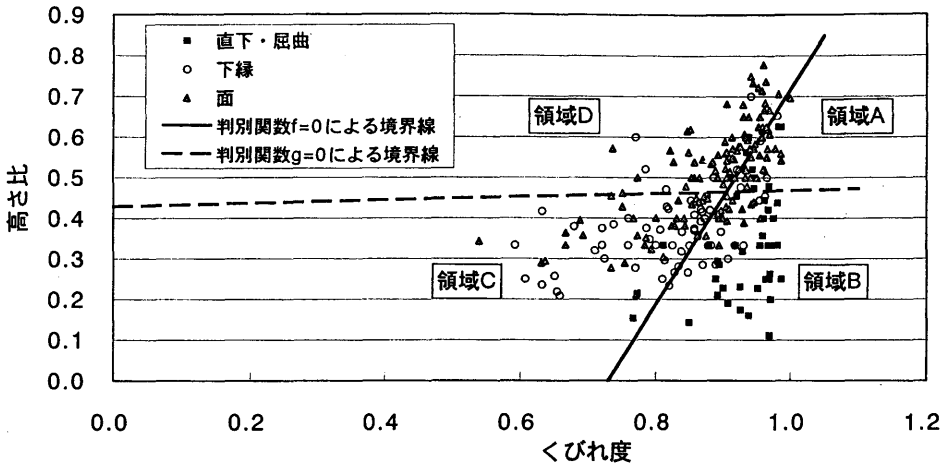


肥厚帯の形との関係



第 56 図　器形と他の属性の相関

線形判別関数による器形分類



くびれ度a/bをx、高さ比c/dをyとしたとき
直下・屈曲グループと下縁グループの正準判別関数f=13.443x-5.083y-9.800
下縁グループと面グループの正準判別関数g=-0.375x+9.192y-3.947
※f・gとも係数は標準化されていないもの

標準化された正準判別関数係数

	f	g
くびれ度a/b	1.079	-0.033
高さ比c/d	-0.605	1.020

※直下・屈曲／下縁の判別ではくびれ度が、下縁／面グループの判別では高さ比が重要な説明変量と言える

正準判別関数による分析結果1

		判別関数による予測		合計
		直下・屈曲	下縁	
元データ	直下・屈曲	37 (82.2%)	8 (17.8%)	45 (100.0%)
	下縁	14 (21.9%)	50 (78.1%)	64 (100.0%)

※元データのうちの79.8%が判別関数により正しく分類された

正準判別関数による分析結果2

		判別関数による予測		合計
		下縁	面	
元データ	下縁	51 (79.7%)	13 (20.3%)	64 (100.0%)
	面	41 (31.5%)	89 (68.5%)	130 (100.0%)

※元データのうちの72.2%が判別関数により正しく分類された

第57図　線形判別関数による器形分類

		口縁部施文位置					計
		直下	屈曲	下縁	面	無	
口縁部文様要素	突	3 (100.0%)					3 (100.0%)
	円瘤	49 (80.3%)	9 (14.8%)		3 (4.9%)		61 (100.0%)
	円平	8 (66.7%)	2 (16.7%)		2 (16.7%)		12 (100.0%)
	円刻	2 (14.3%)	4 (28.6%)		8 (57.1%)		14 (100.0%)
	爪2			27 (75.0%)	9 (25.0%)		36 (100.0%)
	刻斜			36 (57.1%)	27 (42.9%)		63 (100.0%)
	爪1			21 (44.7%)	26 (55.3%)		47 (100.0%)
	型			7 (41.2%)	10 (58.8%)		17 (100.0%)
	刻刺			5 (20.8%)	19 (79.2%)		24 (100.0%)
	刻横			2 (11.1%)	16 (88.9%)		18 (100.0%)
	沈刻				50 (100.0%)		50 (100.0%)
	摩				17 (100.0%)		17 (100.0%)
	沈				15 (100.0%)		15 (100.0%)
	貼				1 (100.0%)		1 (100.0%)
	無					41 (100.0%)	41 (100.0%)
計		62 (14.8%)	15 (3.6%)	98 (23.4%)	203 (48.4%)	41 (9.8%)	419 (100.0%)

		口縁部肥厚帯の形				計
		無1	方	稜	無2	
口縁部文様要素	突	3 (100.0%)				3 (100.0%)
	円瘤	54 (80.3%)	4 (6.6%)	3 (4.9%)		61 (100.0%)
	円平	9 (75.0%)	2 (16.7%)	1 (8.3%)		12 (100.0%)
	円刻	4 (28.6%)	2 (14.3%)	8 (57.1%)		14 (100.0%)
	爪2		14 (38.9%)	20 (55.6%)	2 (5.6%)	36 (100.0%)
	刻斜		20 (31.7%)	37 (58.7%)	6 (9.5%)	63 (100.0%)
	爪1		13 (27.7%)	26 (55.3%)	8 (17.0%)	47 (100.0%)
	型		4 (23.5%)	7 (41.2%)	6 (35.3%)	17 (100.0%)
	刻刺		4 (16.7%)	9 (37.5%)	11 (45.8%)	24 (100.0%)
	刻横		4 (22.2%)	7 (38.9%)	7 (38.9%)	18 (100.0%)
	沈刻		6 (12.2%)	7 (14.0%)	37 (74.0%)	50 (100.0%)
	摩			1 (5.9%)	16 (94.1%)	17 (100.0%)
	沈				15 (100.0%)	15 (100.0%)
	貼				1 (100.0%)	1 (100.0%)
	無			11 (26.8%)	27 (65.9%)	41 (100.0%)
計		70 (16.7%)	76 (18.1%)	137 (32.7%)	136 (32.5%)	419 (100.0%)

		プロポーション					計
		A1	B	C	D	A2	
口縁部文様要素	突		2 (100.0%)				2 (100.0%)
	円瘤	4 (7.7%)	43 (82.7%)	4 (7.7%)	1 (1.9%)		52 (100.0%)
	円平	2 (20.0%)	6 (60.0%)		2 (20.0%)		10 (100.0%)
	円刻	1 (12.5%)	2 (25.0%)	1 (12.5%)	4 (50.0%)		8 (100.0%)
	爪2		4 (19.0%)	10 (47.6%)	2 (9.5%)	5 (23.8%)	21 (100.0%)
	刻斜		10 (27.0%)	20 (54.1%)	5 (13.5%)	2 (5.4%)	37 (100.0%)
	爪1		9 (24.3%)	11 (29.7%)	5 (13.5%)	12 (32.4%)	37 (100.0%)
	型		2 (20.0%)	2 (20.0%)	1 (10.0%)	5 (50.0%)	10 (100.0%)
	刻刺		5 (26.3%)	5 (26.3%)	5 (26.3%)	4 (21.1%)	19 (100.0%)
	刻横		2 (13.3%)		5 (33.3%)	8 (53.3%)	15 (100.0%)
	沈刻		2 (6.1%)	4 (12.1%)	3 (9.1%)	24 (72.7%)	33 (100.0%)
	摩			1 (14.3%)	2 (28.6%)	4 (57.1%)	7 (100.0%)
	沈		2 (25.0%)	1 (12.5%)	1 (12.5%)	4 (50.0%)	8 (100.0%)
計		7 (2.7%)	89 (34.4%)	59 (22.8%)	36 (13.9%)	68 (26.3%)	259 (100.0%)

		口縁部肥厚帯の形				計
		無1	方	稜	無2	
口縁部施文位置	直下	60 (96.8%)		2 (3.2%)		62 (100.0%)
	屈曲	10 (66.7%)	3 (20.0%)	2 (13.3%)		15 (100.0%)
	下縁		44 (44.9%)	54 (55.1%)		98 (100.0%)
	面		26 (12.8%)	68 (33.5%)	109 (53.7%)	203 (100.0%)
	無		3 (7.3%)	11 (26.8%)	27 (65.9%)	41 (100.0%)
計		70 (16.7%)	76 (18.1%)	137 (32.7%)	136 (32.5%)	419 (100.0%)

第58図　属性のクロス集計表（1）

資料サンプル数については本文注3～注5を参照。

		プロポーション					計
		A1	B	C	D	A2	
口縁部施文位置	直下	5 (8.8%)	47 (82.5%)	3 (5.3%)	2 (3.5%)		57 (100.0%)
	屈曲	1 (11.1%)	5 (55.6%)	1 (11.1%)	2 (22.2%)		9 (100.0%)
	下縁		11 (17.2%)	40 (62.5%)	10 (15.6%)	3 (4.7%)	64 (100.0%)
	面	1 (0.8%)	26 (20.2%)	15 (11.6%)	22 (17.1%)	65 (50.4%)	129 (100.0%)
計		7 (2.7%)	89 (34.4%)	59 (22.8%)	36 (13.9%)	68 (26.3%)	259 (100.0%)

		プロポーション					計
		A1	B	C	D	A2	
口縁部肥厚帯の形	無1	6 (9.7%)	50 (80.6%)	3 (4.8%)	3 (4.8%)		62 (100.0%)
	方	1 (2.0%)	7 (14.3%)	25 (51.0%)	7 (14.3%)	9 (18.4%)	49 (100.0%)
	稜		19 (24.4%)	25 (32.1%)	14 (17.9%)	20 (25.6%)	78 (100.0%)
	無2		13 (18.6%)	6 (8.6%)	12 (17.1%)	39 (55.7%)	70 (100.0%)
計		7 (2.7%)	89 (34.4%)	59 (22.8%)	36 (13.9%)	68 (26.3%)	259 (100.0%)

第59図　属性のクロス集計表（2）

文様要素	施文位置	肥厚帯の形	プロポーション	個体数	各文様要素内での割合	分類
刺突文系文様	直下	無1	A1	5	6.9%	(刺突文系パターンへ追加)
			B	47	65.3%	刺突文系パターン
			C	2	2.8%	
			D	1	1.4%	
		稜	C	1	1.4%	
			D	1	1.4%	
	屈曲	無1	A1	1	1.4%	
			B	3	4.2%	
			C	1	1.4%	
			D	2	2.8%	
		方	B	2	2.8%	
	面	方	A1	1	1.4%	
			D	2	2.8%	
		稜	B	1	1.4%	
			C	1	1.4%	
			D	1	1.4%	
刺突文系文様計				72	100.0%	
刻文系文様	下縁	方	B	2	1.4%	(刻文系パターンⅠへ追加)
			C	22	15.8%	刻文系パターンⅠ
			D	5	3.6%	
			A2	2	1.4%	
		稜	B	9	6.5%	(刻文系パターンⅠへ追加)
			C	18	12.9%	刻文系パターンⅠ
			D	5	3.6%	
			A2	1	0.7%	
	面	方	B	2	1.4%	
			C	3	2.2%	
			A2	4	2.9%	
		稜	B	8	5.8%	
			C	3	2.2%	
			D	6	4.3%	(刻文系パターンⅡへ追加)
			A2	17	12.2%	刻文系パターンⅡ
		無2	B	11	7.9%	
			C	2	1.4%	
			D	7	5.0%	(刻文系パターンⅡへ追加)
			A2	12	8.6%	刻文系パターンⅡ
刻文系文様計				139	100.0%	
沈線文系文様	面	方	B	1	2.1%	
			A2	3	6.3%	
		稜	B	1	2.1%	
			C	2	4.2%	
			D	1	2.1%	
			A2	2	4.2%	
		無2	B	2	4.2%	
			C	4	8.3%	
			D	5	10.4%	(沈線文系パターンへ追加)
			A2	27	56.3%	沈線文系パターン
沈線文系文様計				48	100.0%	
総計				259		

第 60 図　属性の組み合わせパターン

a）刺突文系文様のグループでは、文様要素「刺突文系」・施文位置「直下」・肥厚帯「無 1」・器形「B」の組み合わせが圧倒的に多い。第 57 図のグラフに見たように「直下」の個体の場合、プロポーション「B」と「A1」は同一カテゴリー（判別関数 f による境界線の右側）であるから、器形「A1」も同一グループとしてよい。その組み合わせ、すなわち「刺突文系」・「直下」・「無 1」・「A1」または「B」を「刺突文系パターン」とする。

b）刻文系の文様を持つグループでは、刺突文系・沈線文系のグループと比べて分布が分散している。しかし上位 4 組の組み合わせは、文様要素「刻文系」・施文位置「下縁」・肥厚帯「方」または「稜」・プロポーション「C」と、文様要素「刻文系」・施文位置「面」・肥厚帯「稜」または「無 2」・プロポーション「A2」の二種類にまとめられる。第 57 図のグラフに見たように、「下縁」の個体におけるプロポーション「B」と「C」、「面」の個体におけるプロポーション「D」と「A2」はそれぞれ同一カテゴリー（判別関数 g による境界線の上／下）であるから、前者の組み合わせは、「刻文系」・「下縁」・「方」または「稜」・「B」または「C」、後者の組み合わせは「刻文系」・「面」・「稜」または「無 2」・「D」または「A2」にまとめ直すことができる。まとめ直した前者を「刻文系パターンⅠ」、後者を「刻文系パターンⅡ」とする。刻文系パターンⅠとⅡでは、前者が古く後者が新しいと想定できる。両者の文様要素の組成差も（第 61 図上）、想定と矛盾しない。ちなみに第 61 図上では刻文系パターンⅠに「刻横」が含まれない点が注目されよう。

c）沈線文系文様のグループでは、文様要素「沈線文系」・施文位置「面」・肥厚帯「無 2」・プロポーション「A2」の組み合わせが多数を占める。2）と同様にここでは器形「D」も同一カテゴリー（(判別関数 g による境界線の上）としてよいので、これは「沈線文系」・「面」・「無 2」・「D」または「A2」にまとめ直すことができる。これを「沈線文系パターン」とする。

抽出した 4 つのパターンからさらに属性を絞り込み、第 61 図下のように刺突文群・刻文Ⅰ群、刻文Ⅱ群、沈線文群の細別型式を設定する（土器図版は第 63 図～第 66 図参照）。絞り込みの目的は各グループ内のバラツキを少なくして型式学的なまとまりを強めることにある。具体的には、刺突文群では「円刻」の個体を除いているが、これは「円刻」が「折衷的な印象を強く与える」点を重視した結果である(注 9)。また、刻文Ⅰ群では「刻横」を除外している。

これら細別型式間の変遷を文章で説明すると以下のようになろう。

刺突文群から刻文Ⅰ群への変化：器形は頚部のくびれの強い壺型に変化し、方形または稜状の口縁部肥厚帯を有するようになる。口縁部文様要素は全て刻文系文様（「刻横」を除く）になる。口縁部文様要素は肥厚帯の下縁部にのみ施文されるようになる。

		口縁部文様要素						計
		爪2	刻斜	爪1	型	刻刺	刻横	
組み合わせパターン	刻文系Ⅰ	12 (24.0%)	20 (40.0%)	13 (26.0%)	2 (4.0%)	3 (6.0%)		50 (100.0%)
	刻文系Ⅱ	3 (7.1%)	4 (9.5%)	14 (33.3%)	3 (7.1%)	7 (16.7%)	11 (26.2%)	42 (100.0%)

細別型式	文様要素	施文位置	肥厚帯の形	プロポーション
刺突文群	「円刻」を除く刺突文系文様	直下	無1	A1・B（B主体）
刻文Ⅰ群	「刻横」を除く刻文系文様	下縁	方・稜	B・C（C主体）
刻文Ⅱ群	全ての刻文系文様	面	稜・無2	D・A2
沈線文群	全ての沈線文系文様	面	無2	D・A2

第61図　上：刻文系パターンⅠ・パターンⅡにおける口縁部文様要素の組成差
下：細別形式の定義

刻文Ⅰ群からⅡ群への変化：器形は頸部のくびれが弱く口縁部の長い甕形へと変化する。肥厚帯は方形のものがなくなり、肥厚帯を持たない個体も出現する。口縁部文様要素には「刻横」が加わり、口縁部の全面に施文されるようになる。

刻文Ⅱ群から沈線文群への変化：全ての土器から肥厚帯が消滅し、口縁部文様要素が全て沈線文系文様になる。

3）各細別型式間の関係と変遷のプロセス

各細別型式間の関係をもう少し詳しく見ておこう。属性の組み合わせによって各細別型式を定義したが、第 61 図下で確認できるとおり、隣接する型式の間で共通する属性がある。その数は刺突文群と刻文Ⅰ群では 1 種（「B」）、刻文Ⅰ群と刻文Ⅱ群では 2 種（「刻横」以外の文様要素と「稜」）、刻文Ⅱ群と沈線文群では 3 種（「面」・「無 2」・「D・A2」）である。単純な見方をすれば型式間で共通する属性数が多いほど、それら型式間の「類似度」は高いと言えよう。

次は一個体中に異なる段階の属性が共存する土器、すなわち「中間的」な様相の土器の問題である。先に設定した細別型式の定義（属性組み合わせ）を分析対象となった土器全てに対し適用した場合どうなるかを示したのが第 62 図左である。分析資料数 259 個体(注 10)のうち、68.0%に相当する 176 個体が細別型式の定義と一致した属性組み合わせパターンとなっている。残りの 32.0%は属性の組み合わせが細別型式の定義から外れているが、その内訳を示したのが第 62 図右である。4 種の属性中 3 種までが本来の組み合わせで 1 種のみ前段階もしくは次段階の属性となる例（第 62 図の-または+の例）が多い。隣接する細別型式の属性を 2 種ずつ共有する、「どっちつかず」の個体もある。これらは隣接する型式間の「中間的」な様相を示すものとしてよいであろう。特にこの「中間的」な例が多いのは刻文Ⅰ群とⅡ群の間である。一方、2 段階以上離れた時期の属性が一個体中に共存する例（第 62 図の「属性錯綜」）は稀である（全体の 10%以下(注 11)）。

以上の分析結果から、各型式間の関係をまとめておこう。

a）刺突文群と刻文Ⅰ群の間では、分類の指標上共通する属性が少ないだけではなく、「中間的」な個体数も少ない。すなわち両者の間では属性が排他的に分布している。よって両者の「類似度」は低く、変遷は非連続的である。

b）刻文Ⅰ群とⅡ群の間では、分類指標上共通する属性がやや多く、「中間的」な個体数も特に多い。すなわち両者の「類似度」はやや高く、変遷は漸移的である。

文様要素	施文位置	肥厚帯の形	プロポーション	個体数	分類
刺突文系文様（「円刻」除く）	直下	無1	A1	4	刺
			B	47	刺
			C	2	刺+
		稜	C	1	刺刻Ⅰ
			D	1	属性錯綜*
	屈曲	無1	A1	1	刺+
			B	3	刺+
			C	1	刺刻Ⅰ
			D	1	属性錯綜*
		方	B	1	刺刻Ⅰ
	面	方	A1	1	属性錯綜
			D	1	属性錯綜
「円刻」	直下	無1	A1	1	刺+
			D	1	属性錯綜*
	屈曲	無1	D	1	属性錯綜*
			B	1	刻Ⅰ-
	面	方	D	1	属性錯綜※1
		稜	B	1	属性錯綜※1
			C	1	属性錯綜※1
			D	1	属性錯綜※1
刺突文系文様計				72	
刻文系文様（「刻横」除く）	下縁	方	B	2	刻Ⅰ
			C	22	刻Ⅰ
			D	4	刻Ⅰ+
			A2	2	刻Ⅰ+
		稜	B	9	刻Ⅰ
			C	18	刻Ⅰ
			D	5	刻Ⅰ+
			A2	1	刻Ⅰ+
	面	方	B	2	刻Ⅰ+
			C	3	刻Ⅰ+
			A2	3	刻Ⅰ刻Ⅱ
		稜	B	8	刻Ⅱ-
			C	3	刻Ⅱ-
			D	3	刻Ⅱ
			A2	14	刻Ⅱ
		無2	B	9	刻Ⅱ-
			C	2	刻Ⅱ-
			D	6	刻Ⅱ
			A2	8	刻Ⅱ
「刻横」	下縁	方	D	1	刻Ⅰ刻Ⅱ
	面	方	A2	1	刻Ⅱ-
		稜	D	3	刻Ⅱ
			A2	3	刻Ⅱ
		無2	B	2	刻Ⅱ-
			D	1	刻Ⅱ
			A2	4	刻Ⅱ
刻文系文様計				139	
沈線文系文様	面	方	B	1	属性錯綜
			A2	3	属性錯綜
		稜	B	1	属性錯綜*
			C	2	属性錯綜*
			D	1	沈-
			A2	2	沈-
		無2	B	2	属性錯綜*
			C	4	属性錯綜*
			D	5	沈
			A2	27	沈
沈線文系文様計				48	
総計				259	

分類	個体数	割合
刺	51	19.7%
刺+	7	2.7%
刺刻Ⅰ	3	1.2%
刻Ⅰ-	1	0.4%
刻Ⅰ	51	19.7%
刻Ⅰ+	17	6.6%
刻Ⅰ刻Ⅱ	4	1.5%
刻Ⅱ-	25	9.7%
刻Ⅱ	42	16.2%
沈-	3	1.2%
沈	32	12.4%
属性錯綜	23	8.9%
（うちプロポーションのみ）	(13)	(5.0%)
計	259	100.0%

刺・刻Ⅰ・刻Ⅱ・沈は、それぞれ刺突文群・刻文Ⅰ群・刻文Ⅱ群・沈線文群

-...4種の属性のうち、3種までは本来の組み合わせと同じだが、1種のみ前段階の属性を含む、という意

+...4種の属性のうち、3種までは本来の組み合わせと同じだが、1種のみ次段階の属性を含む、という意

刺刻Ⅰと刻Ⅰ刻Ⅱ...前者は刺突文群の属性と刻文Ⅰ群の属性を各々2種ずつ含む。後者は刻文Ⅰ群とⅡ群の属性を各々2種ずつ含む。

属性錯綜...2段階以上段階の異なる属性が共存する。
*はプロポーションのみ「錯綜」の例

「円刻」「屈曲」は本来、刺突文群と刻文Ⅰ群の「中間的」属性であるが、ここでの分類では刻文Ⅰ群の属性として扱った。ただし※1の例は刻文Ⅱ群以降の属性と結びついているため、属性錯綜として扱っている。

第62図　属性の組み合わせパターンと細別型式の関係

c）刻文Ⅱ群と沈線文群との間では分類指標上共通する属性が多いので、「類似度」は高く結果的に変遷も漸移的といえる。ただし、文様要素の差は見た目の違いが大きいので、「類似度」の高さはそれほど意識されない(注 12)。

d）上記 b）c）のように、隣接する型式間では「類似度」・「漸移性」が高い傾向がある一方、刺突文群の属性と刻文Ⅱ群の属性が結びつくなど、2 段階以上離れた時期の属性が共存する例は稀である。このようなあり方は、刺突文群→刻文Ⅰ群→刻文Ⅱ群→沈線文群という変遷が単線的かつ不可逆的であることを示唆している(注 13)。

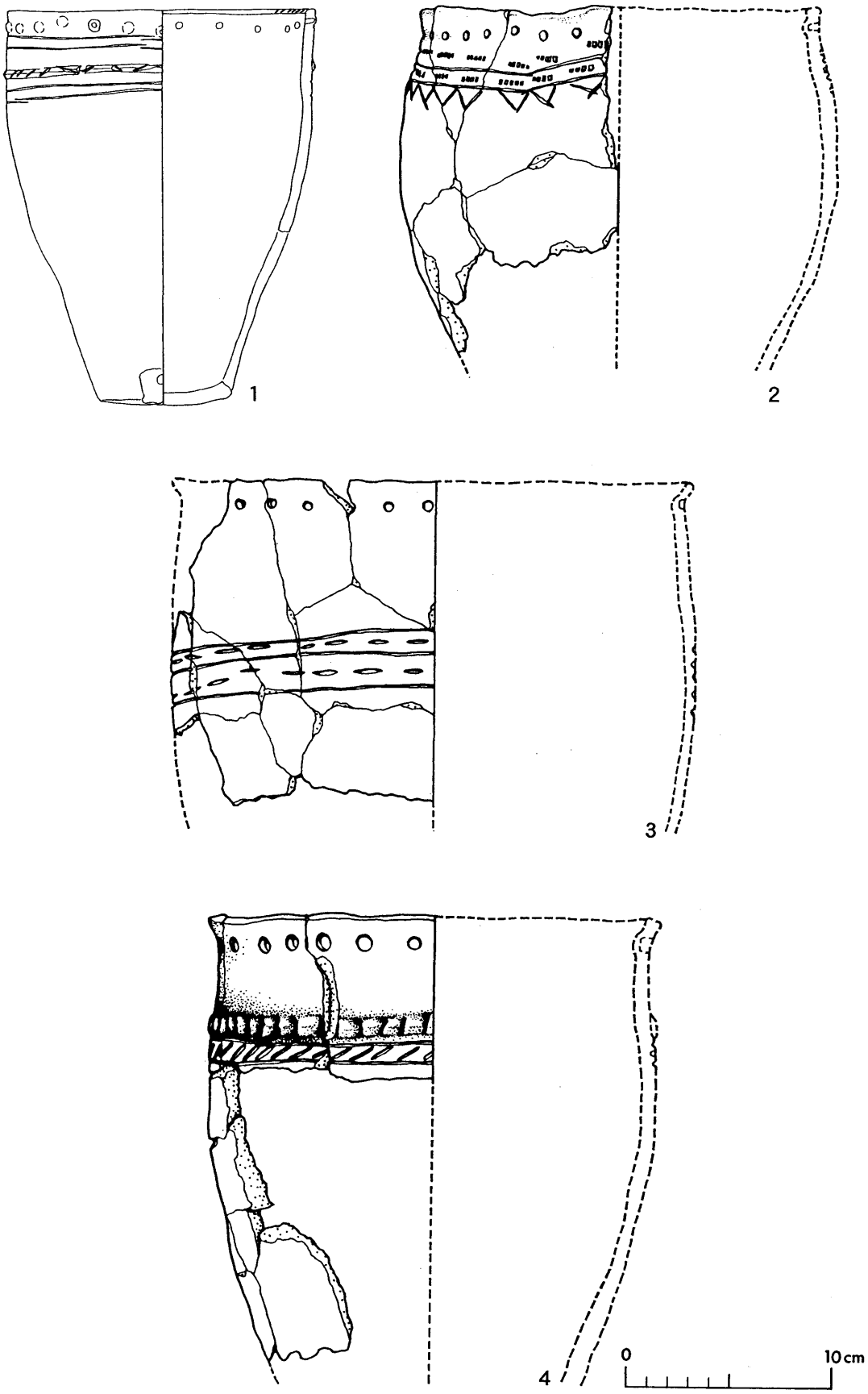
ここで重要な点は二点ある。一点は各細別型式間の相対的な「類似度」・「漸移性」が同じではない点である。これは、型式変遷のプロセスや速度が一律ではないこと、さらには型式変化をもたらした要因や背景が一様ではない可能性があることを示唆している。もう一点は型式変遷の進行過程が単線的かつ不可逆的であると推測される点である。これらは二点とも大井氏の提起した「型式論的変遷」－二つ以上の細別型式が共伴しつつ、その組成が漸移的に変化するような変遷過程－に抵触することになろう。これらの問題については、層位的検証を行った後、本章の最後に検討することにする。

4.　道北部の細別型式

香深井 A 遺跡の出土土器を分析し、刺突文群、刻文Ⅰ群、刻文Ⅱ群、沈線文群の 4 つの細別型式を設定した。しかし、道北部のオホーツク土器にはこれらの型式以前／以後に位置づけられる諸型式も確認されている。それらについて確認しておこう。

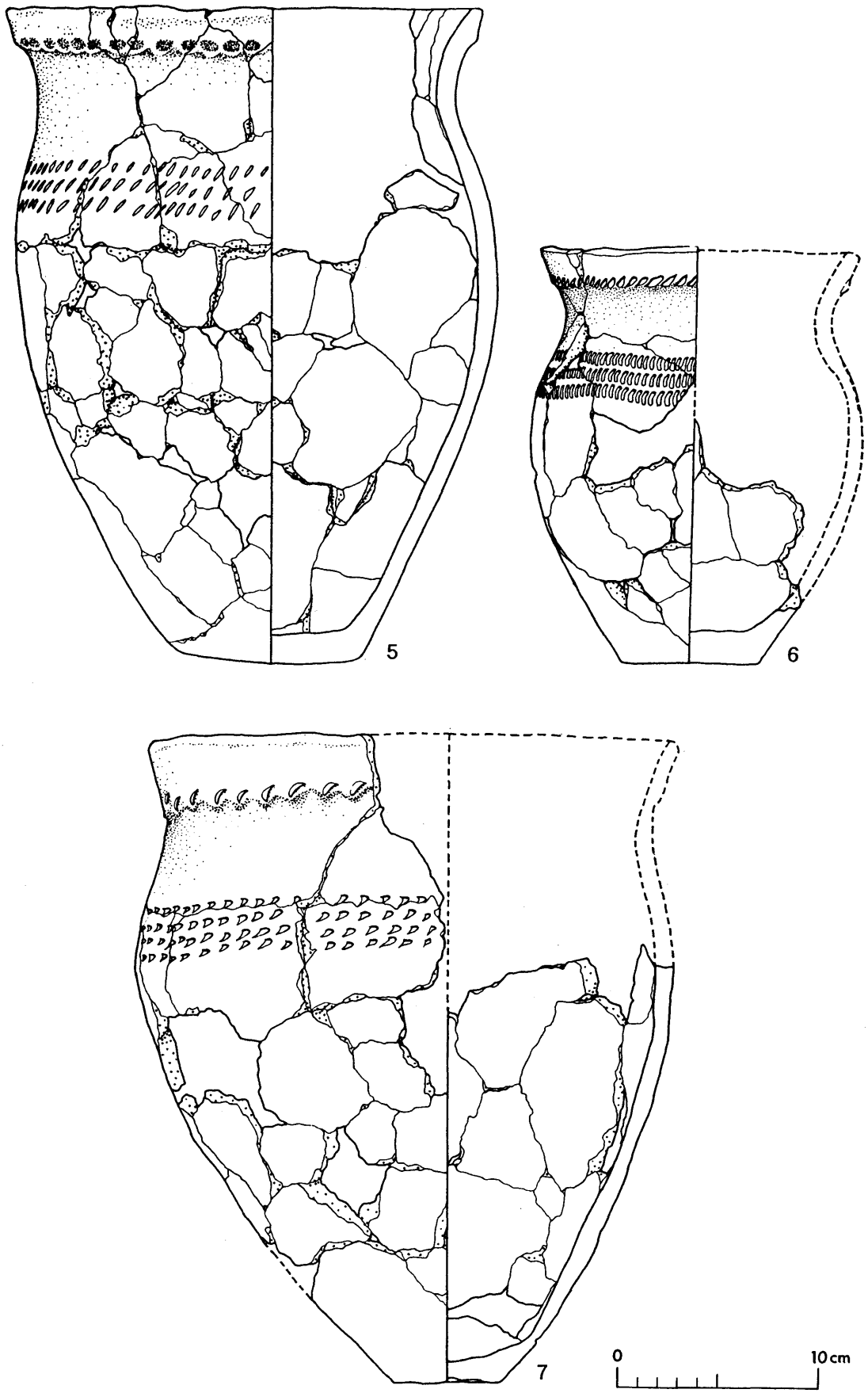
1）刺突文群の細別

まずは古い段階の刺突文群土器である。すでに述べたように、刺突文群の文様要素には土器外面からの刺突文（以下 OI 刺突文と略）と内面からの突瘤文（以下 IO 突瘤文と略）がある。IO 突瘤文については香深井 A 遺跡での資料数が少なかったためここまで問題にしなかったが、香深井 A 遺跡の報告中でもすでに IO 突瘤文がより古い傾向にある（古い層ほど IO 突瘤文の割合が多い）ことは指摘されていた（天野 1981）。近年この指摘を裏付けるように、礼文島香深井 5 遺跡 95 年度発掘区（荒川ほか 1997）からまとまった数量の IO 突瘤文の土器が出土している。



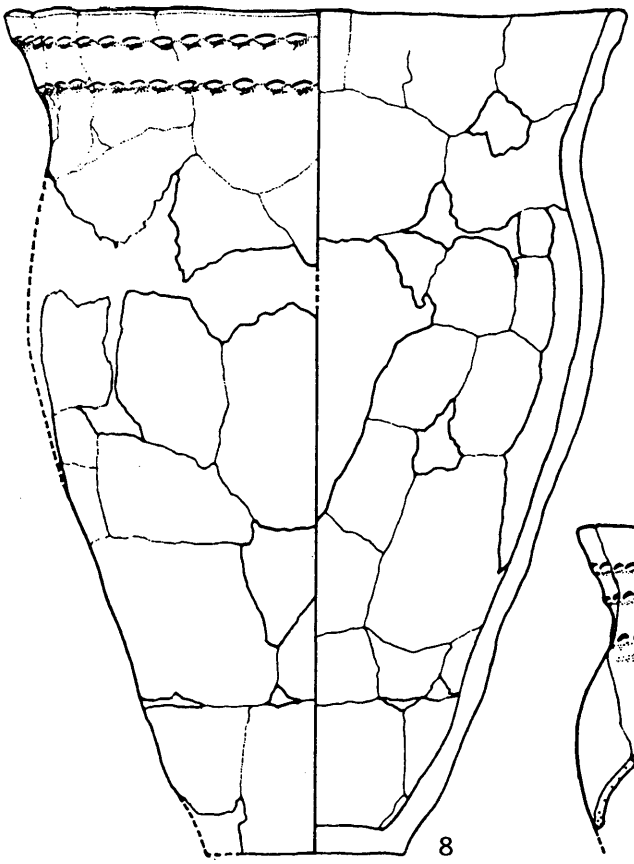
第63図　刺突文群（十和田式）土器（1：前半段階・2～4：後半段階）

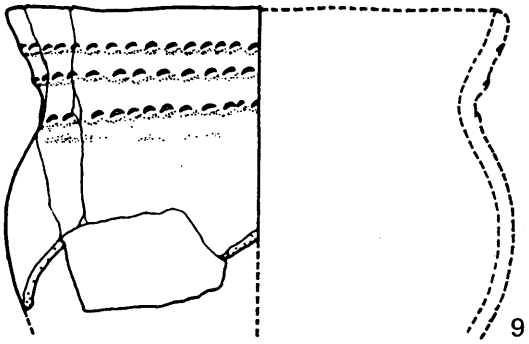
1：香深井5　2～4：香深井A

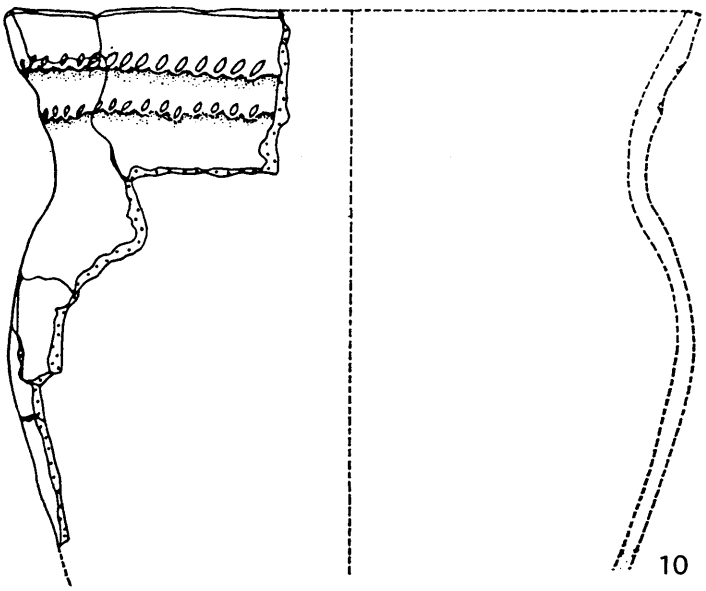


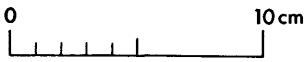
第64図　刻文Ⅰ群土器

5～7：香深井A



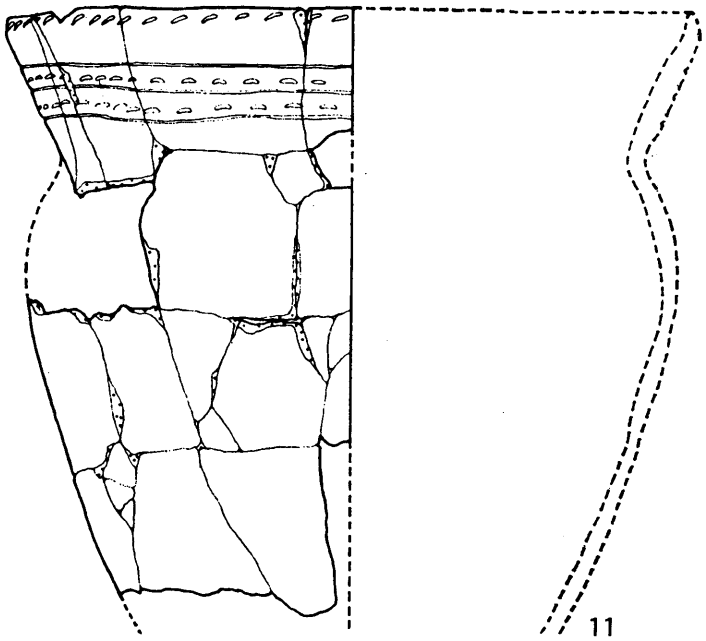


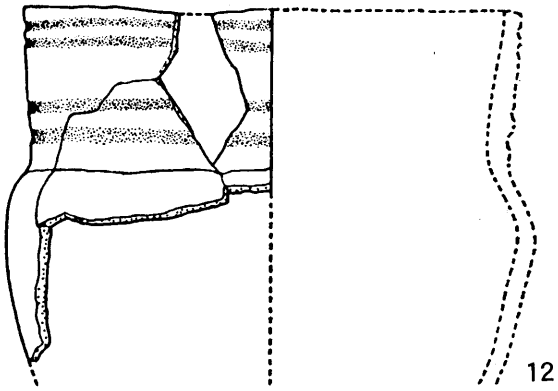


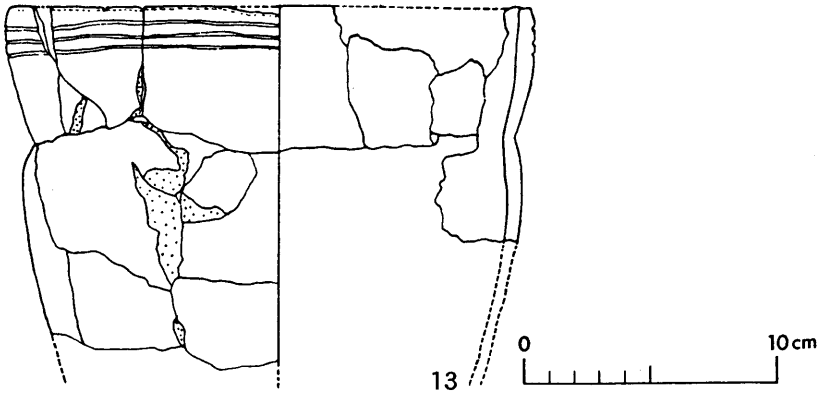


第 65 図　刻文Ⅱ群土器

8～10：香深井 A

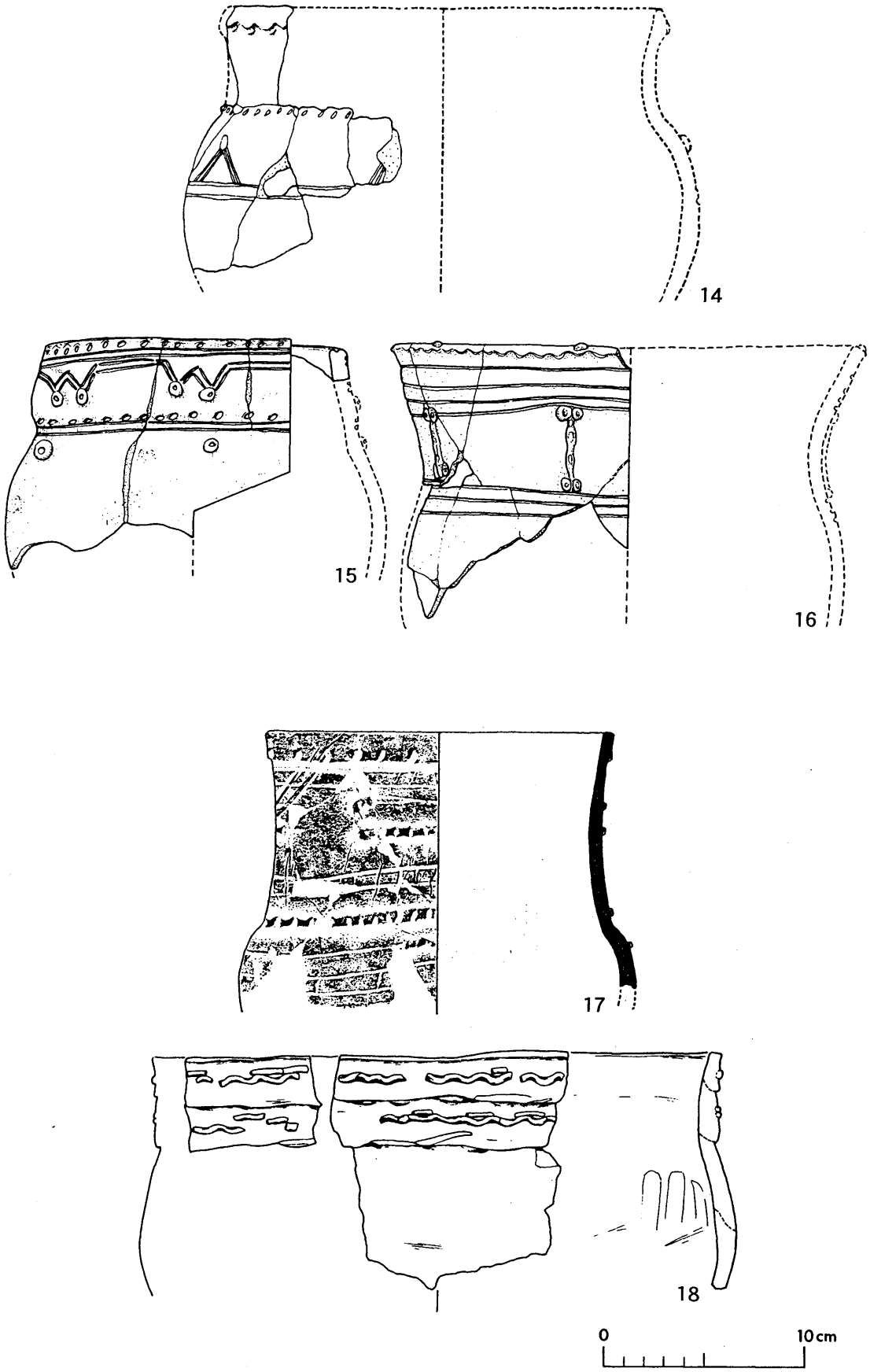






第 66 図　沈線文群土器前半段階

11～13：香深井 A



第67図　上：沈線文群土器後半段階（14～16）

下：道東部貼付文系土器と併行する土器群（17・18）

14：香深井A　15・16：目梨泊　17：元地　18：亦稚貝塚

ただしこの地点では IO 突瘤文のみ単独で出土したのではなく、ほぼ 1：1 の割合で OI 刺突文の土器も出土している（天野 1998、天野・小野 2002)。ただし OI 刺突文の土器も含めた香深井 5 遺跡の土器全体を香深井 A 遺跡例と比較すると、器形・胴部文様に関しても以下の差異が認められる。

a）香深井 5 遺跡例（第 63 図-1）の器形は深鉢形であり、頚部が胴部よりくびれる土器はほとんどない。香深井 A 遺跡例でも深鉢形の器形は多いが、頚部が胴部よりくびれる例も散見される。
b）香深井 5 遺跡例では口縁部文様帯と胴部文様帯が一帯になっており、文様帯幅も狭い例が多い。一方、香深井 A 遺跡例では口縁部／胴部の文様帯が分離している例（第 63 図-3・4）が多い。
c）胴部文様意匠をみると、香深井 5 遺跡例では沈線文の単独施文が特徴的であり、沈線文と刻文が組み合わされた意匠はきわめて少ない。逆に香深井 A 遺跡例では沈線文の単独施文は稀で、沈線文と刻文が組み合わされる意匠が多い(注 14)。

両遺跡例の間では特に OI 刺突文の土器について型式学的特徴が重なる部分も多い。しかしここでは IO 突瘤文の存在と上の a）～c）の差異を勘案し、香深井 5 遺跡例を刺突文群の前半段階、香深井 A 遺跡例(注 15)を刺突文群の後半段階として位置づける。

なお注目すべきは、上の a）～c）の香深井 5 遺跡の特徴がいずれも本論第 I 部第 5 章で検討した鈴谷式と共通する点である。無論この点だけをもって鈴谷式と IO 突瘤文の土器との直接的な型式連続を断じるわけにはいかないが、特に b）の文様帯の問題などは、両型式の関係を考える上で重要であることは確かである。いずれにしろ上記の a）～c）は、香深井 5 遺跡例の古さを示す特徴ということができよう。

2）沈線文群以後

道北部における沈線文系土器には、香深井 A 遺跡の典型的な沈線文群とはやや異なる土器群がある。沈線文による鋸歯文・斜線のモチーフをもつもの（佐藤編 1994、柳澤 2001)、貼付文系文様要素を併存するものなどがそれである。このような要素は香深井 A 遺跡では魚骨層 I で出現し、「黒褐色砂質土層」においてより顕著になるように見えるので、相対的に新しい要素と考えられる。

これらの土器は、道北端部においては礼文島元地遺跡の魚骨層 I（大井 1972)、礼文島浜中 2 遺跡（前田・山浦編 1992)、礼文島ナイロ遺跡（大川 1998）などで確認されているが、いずれも断片的な出土・報告で、型式としてのまとまり・全体像ははっきりしない(注 16)。よって地域差

の問題はあるが、より道東部に近い枝幸町目梨泊遺跡（佐藤編 1994）でまとまって出土した例からこれらの土器群（第67図-14～16）について分析してみる。

目梨泊遺跡などから出土したこれら土器群の特徴をまとめると以下のようになる。

a）沈線文系文様が施された土器のうち、4割弱の個体が貼付文系文様を併存する。

b）それらの貼付文系文様の多くは小さな円形の粘土瘤を貼り付けたボタン状貼付文であり、藤本編年 d 群土器（藤本 1966）に特徴的な刻み目のある直線的な「貼細系文様」（第 8 章参照）は比較的少数である。

c）同じ遺跡からは、藤本編年 d 群土器もまとまって出土する。

a）に述べた貼付文系文様を併存する土器は地域差として捉えうる可能性もあるが、香深井 A 遺跡などの状況から時期差と考えておきたい。b）と c）は道東部の状況から推測すると、藤本編年 d 群土器との時期差を示すものとして捉えることが可能であろう(注 17)。

このように目梨泊遺跡や香深井 A 遺跡での状況から推測すると、道東部の貼付文系文様の影響が道北部に波及する時期は、沈線文群の初めからではなく後半以後である可能性が高い。この点は編年対比上きわめて重要であり、道北部と道東部の編年対比を正確に行うためには、沈線文群に前半・後半の細別を設定しておくことが望ましい。ただし別型式とするだけの根拠（層位や遺跡ごとのはっきりとしたまとまり）は不十分であるので、ここでは香深井 A 遺跡の典型的な沈線文群を沈線文群土器の前半段階、目梨泊例など新しい要素を持つ例を沈線文群の後半段階として仮設する。

これ以後の道北端部（礼文島・利尻島・宗谷地域）では、道北部独自の系統は影を潜めて道東部の系統（藤本編年 d 群・e 群土器）に呑み込まれるようになり、いわゆる「元地式」（熊木 2000c）が出現するまで道北部独自の系統は影を潜めることになる。土器の出土量自体もやや減少するようであり、活動が低調になった可能性が考えられる。ちなみに道北端部におけるこの時期の資料（藤本編年 d 群・e 群に相当する土器）は、前述の礼文島元地遺跡・ナイロ遺跡・浜中 2 遺跡、利尻島亦稚貝塚、稚内市オンコロマナイ貝塚等、各地でやや少数ながら散見されている（第 67 図-17・18）。この時期における土器型式の変遷・退潮については、道北部オホーツク文化集団の衰退や、道東部との関係緊密化と関連するものとして注目しておきたい。

3）　細別型式のまとめ

道北部の細別型式をまとめると以下のようになる（巻末付図 1 下の編年表参照）。

・刺突文群（前半段階・後半段階）

・刻文 I 群

・刻文Ⅱ群

・沈線文群（前半段階・後半段階）

・（道東部藤本編年 d 群・e 群に併行する土器群）

道東部貼付文系土器群併行の次にいわゆる「元地式」土器が続くが、筆者は「元地式」をオホーツク土器には含めていないので、本論では検討対象外としておく。

5.　各型式の層位的検討

1）各遺跡での層位的出土状況

次に各細別型式の層位的出土状況について検討する。

第 68 図は本章で設定した細別型式が、香深井 A 遺跡の各魚骨層からどのように出土しているかを示した表である。香深井 A 遺跡の層位に全面的に依拠するならば、筆者分類で細別型式を設定したとしても、大井氏の提起した「二つ以上の細別型式の共伴」が正しいとならざるを得ない。しかし本章冒頭で述べたように、2 段階以上離れた細別型式の「共伴」（例えば第 68 図の魚骨層Ⅱで認められるような刺突文群と沈線文群の「共伴」）は、本当に他の遺跡でも認められるのであろうか。あるいは逆に、各細別型式が単独で、もしくは隣接する型式を伴わずに出土する例はないのであろうか。以下では後者の疑問点について、サハリンや道東部を含めた各遺跡の出土状況から検証する(注 18)。

出土パターン 1：刺突文群のみ出土する遺跡・遺構・出土地点

a）サハリン十和田遺跡（伊東 1942・伊東 1982）

この遺跡から出土した、十和田式の標式資料となった土器群は、量的には「僅少」（伊東 1982）であるが、「鈴谷式や江の浦 B 式を混じへることはない」（伊東 1942）とされている。これらの土器群は、報告された図版で見る限り、本論でいう刺突文群の前半段階・後半段階の両方に相当するようである。資料の規模や全体像が不明な点に問題は残るが（大井 1982a：（上）注 47）、刺突文群の単独出土例として扱っておきたい。

層位	土器分類												計
	沈	属性錯綜（沈）	刻Ⅱ	刻Ⅱ-	刻Ⅰ刻Ⅱ	刻Ⅰ+	刻Ⅰ	刻Ⅰ-	属性錯綜（刺）	刺刻Ⅰ	刺+	刺	
魚骨層Ⅰ	13	3	3	1	1	1							22
魚骨層Ⅱ	16	4	19	6	3	3					1	2	54
魚骨層Ⅲ0			3	4		3	4		4				18
魚骨層Ⅲ		3	3	4		1	4	1	2		1	1	20
魚骨層Ⅳ			1	3		3	23		1	1	4	18	54
魚骨層Ⅴ										1		5	6
計	29	10	29	18	4	11	31	1	7	2	6	26	174

第68図　香深井A遺跡各魚骨層における細別型式の出土数内訳

b) 礼文島香深井5遺跡95年度発掘区（荒川ほか1997）

前述の、刺突文群前半段階の標式資料である。報告書分類のⅡ群 A 類土器が刺突文群に相当するが、これが全出土点数（口縁部で916点）の約95%を占めるという。残りの5%の中には刻文Ⅰ群・Ⅱ群土器も含まれるようだが、刺突文群が出土した第Ⅳ層からの出土は刻文Ⅰ群（？）が1点のみである。刺突文群前半段階の、ほぼ単純な出土地点とみてよいであろう。

c) 枝幸町ウバトマナイチャシ竪穴住居址（右代ほか1998）

報告が概報のため土器図版がなく詳細は不明であるが、出土土器 1,137 点のうち、多くが「オホーツク式土器前期はじめのもの」(注 19)で、それ以外のオホーツク土器は出土していないと報告されている。土器の具体的内容については、「刺突文系の土器群でサハリンの十和田式に対応」し、「外側からの円形刺突文」が施文されており、「内側からの円形刺突文は、1 点も見られなかった」とあるので、筆者分類の刺突文群後半段階に相当するとみられる。刺突文群後半段階の単純遺跡としてよいであろう。

d) 枝幸町川尻北チャシ2号竪穴（大場ほか1972）

本例も概報のみのため詳細は不明であるが、報文によれば、「竪穴床面及び埋土のオホーツク文化期の資料は、（中略）全体として、一つのグループと考えてよい」とされ、具体的には、「樺太におけるいわゆる十和田式土器につながるもの」と述べられている。提示された図版（完形・口縁部で計 38 点）から判断する限り、刺突文群前半段階が若干含まれるようであるが、多くの土器は刺突文群後半段階に位置づけられるように思われる。いずれにしろ刺突文群の単純遺跡と見てよいであろう。

出土パターン2：刺突文群を伴わず、刻文Ⅰ群段階以降の土器が出土する遺跡・遺構・出土地点

a) ホロベツ砂丘遺跡（佐藤編1985）

第 1 号住居址に伴う刻文Ⅰ群土器のほか、発掘区からは刻文Ⅰ群、刻文Ⅱ群、沈線文群のほか貼付文系土器群も出土している（掲載点数は完形・口縁部で計 55 点)。しかし刺突文群は全く報告されていない。

b) 網走市モヨロ貝塚（米村 1950、大場 1956、駒井編 1964、市立函館博物館編 1983、網走市郷土博物館編1986、その他）

詳細は第8章に後述するが、筆者が調査した限りにおいて出土土器は全て刻文Ⅰ群以降であり、

刺突文群の土器は確認されていない。

c）羅臼町相泊遺跡（澤ほか 1971、涌坂編 1996）

新手の貼付文系土器を伴う住居址 1 軒と、刻文Ⅰ群・Ⅱ群期に相当する墓が各 1 基ずつ検出されている。出土した土器（澤ほか 1971 では「文様のある土器」は計 201 点、涌坂編 1996 では掲載点数が 32 点）は刻文Ⅰ群相当の土器が多数を占めており、刻文Ⅱ群併行土器が続く。新手と見られる貼付文系土器も出土している。しかし住居址・発掘区のどちらからも刺突文群は全く確認されていない。

d）羅臼町舟見町高台遺跡（本田ほか 1980）

1976 年度の調査では、炉址状遺構および発掘区から刻文Ⅰ群及びⅡ群期に相当する土器が出土している（報告書掲載点数は完形・口縁部で 54 点）。他に出土したオホーツク文化関連の土器は住居址に伴うトビニタイ土器のみであり、刺突文群は確認されていない(注 20)。

e）根室市トーサムポロ遺跡 L-1 地区北側（北構・須見 1953・北構ほか 1984）

竪穴住居址群と小貝塚群からなる遺跡で、小貝塚群（北構・須見 1953）と、刻文Ⅰ群もしくはⅡ群期に相当する土器を伴う住居址 1 軒（北構ほか 1984）が調査されている。小貝塚群出土の土器（計 213 点）は道北部とはやや異なっており地域差を有するようであるが、ほぼ全例が刻文Ⅰ群・Ⅱ群に相当・併行するとみられる。竪穴住居址出土の土器は図示されておらず点数も不明だが、覆土・床面とも「舟形刻文・太い貼付文を有する土器であり、所謂ソーメン文土器は一点も出土しなかった」と報じられている（北構ほか 1984：227)。この土器群は刻文Ⅰ群もしくはⅡ群に相当・併行するものであろう。いずれにしろ刺突文群は全く報告されていない。

出土パターン 3：刻文Ⅰ群を伴わず、刻文Ⅱ群以降のみ出土する遺跡・遺構・出土地点

a）香深井 6 遺跡魚骨ブロック 5・6（前田・藤沢編 2001）

魚骨ブロック 5 は短径約 5m（長径は調査区外に延び不明）・厚さ 60cm 弱、魚骨ブロック 6 は短径約 3m（長径は調査区外に延び不明）・厚さ 40cm 弱で、間層を挟み同一地点に重なって堆積しており、前者が新しく後者が古い。魚骨ブロック 6 で（完形・口縁部掲載点数 14 点）は刻文Ⅱ群と沈線文群前半段階が相半ばする一方、魚骨ブロック 5（完形・口縁部掲載点数 56 点・ただし混入とみられる鈴谷式 1 点を除く）では沈線文群前半段階が大半を占め、刻文Ⅱ群が少量（掲載数では 5 点）出土している。刺突文群土器(注 21)、および沈線文群後半段階以後の土器はどち

らのブロックからも全く報告されていない。

出土パターン４：刻文Ⅱ群の後、遺跡の連続性が絶たれる遺跡・遺構・出土地点

a）羅臼町相泊遺跡

前節参照。

b）羅臼町舟見町高台遺跡

前節および注 15 参照。

c）標津町三本木遺跡（北構 1992、工藤 1992）

竪穴の窪み間にトレンチを入れた調査（北構 1992）（掲載点数は口縁部破片で 10 点）と、遺跡範囲確認のためのテストピット試掘（工藤 1992）（オホーツク土器の全出土点数 332 点）の報告がなされている。前者の調査で刺突文群が 1 点得られているほか、両調査とも刻文Ⅰ群を中心に刻文Ⅱ群併行の土器も出土している。しかし両調査ともそれ以外の型式は出土していない。

d）根室市トーサムポロ遺跡 L-1 地区北側

前節参照。

以上の検討結果から、各型式間の時間的関係を推定してみよう。

出土パターン 1 と 2 は、刺突文群と刻文Ⅰ群との間にある「非共伴・断絶」の事例－すなわち両型式の時期差－を示している。特に、出土パターン 1＝刺突文群の単独出土例が確認されている点、パターン 1・2 ともに確認例がやや多い点は、刺突文群と刻文Ⅰ群が基本的には共伴しない(注 22)ことを明確に示している。

一方、出土パターン 2 と 3 は刻文Ⅰ群とⅡ群との間に存在する同様の時期差を示している。また出土パターン 4 も、間接的にではあるが、刻文Ⅱ群とそれ以降の土器群（道北部では沈線文群前半、道東部では沈線文群前半併行の土器群）との間にある同様の時期差を示唆している。このように刻文Ⅰ群・刻文Ⅱ群・沈線文群の関係も基本的に時期差であることは確実であるが、各型式が単独で出土する例が確認されていない(注 23)点には注意すべきであろう。すなわち、各細別型式が単独で一時期を形成している、とする確実な証拠はないのが現状である。むしろ、隣接する型式を伴って出土するのが常態である、という可能性が高いとすらいえる。

しかしながら、大井「型式論」で述べられたような、2 段階以上離れた細別型式の「共伴」例

は、香深井 A 遺跡以外では確認されていない。同一遺跡内で「混在」する例はあるが、短期間に形成されたとみられる層位内での共伴や、廃棄の同時性が明確である遺構内や遺物集中地点での共伴は、今のところ認められないと筆者は判断している。

以上の検討から各型式間の時間的関係をまとめると、次のようになろう。

刺突文群と刻文Ⅰ群との関係：前者から後者への変化は相対的に短い時間で完了し、両型式は基本的には共伴しない。

刻文Ⅰ群・刻文Ⅱ群・沈線文群の関係：これら三つの型式間の関係も時期差であるが、変化は相対的にゆっくりと、漸移的に進行する。ただし型式変遷は刻文Ⅰ群→刻文Ⅱ群、次に刻文Ⅱ群→沈線文群という順で起こり、共伴するのは隣接する 2 型式のみとなる。すなわち変遷過程は単線的かつ不可逆的であり、刻文Ⅰ群と沈線文群は共伴しない。

層位的検討から導き出された以上の関係は、先に検討した型式学的変遷の過程ときわめてよく符合している。筆者が提起した土器型式変遷の過程は、層位と型式、両面からのクロスチェックにより立証されたことになろう。

2）香深井Ａ遺跡の「層位的関係」との齟齬について

以上、道北部の土器型式変遷の過程を考察してきたが、本論での結論は、香深井 A 遺跡の層位、並びにそれを根拠に提起された大井氏の「型式論的変遷」－二つ以上の細別型式が共伴しつつ、その組成が漸移的に変化するような変遷過程－とは多くの点で異なるものであった。

実は大井氏は、筆者が先に検討したような“隣接する型式を伴わずに、比較的単純な形で土器が出土する例”があることを認めている（大井 1982a：（上）43-44）。しかし氏はこのような（氏の説から見れば特異な）出土状況は、「若い世代による移住」の結果生じたとし、それは氏の説と「決して不整合な関係にあるわけではない」と説明している。しかし、ある世代を境として非連続的に型式が交替する、という状況があったとすれば、型式の「切り替え」は短期間で終了するはずであり、大井氏が想定するような、長期にわたる・複線的な細別型式の「共伴」は生じないことになる（小野 1998b：（上）註 30）。この点に関しては大井氏の説明には矛盾があろう。

しかしながら、香深井 A 遺跡の「層位的関係」には致命的な欠陥がある、と簡単には決めつけられないこともまた事実であろう。特に大井氏が指摘した、「上位の層準の資料が下位の層準に混入することは、（中略）本来ありえなかった」点（大井 1982a：（上）24）は、各層の堆積状況から見て首肯できる。また氏が述べるように、文様要素・器形のセリエーショングラフ（第 49 図）が順調に推移する点も、各層位に大規模な混入がなかった、という大井氏の主張に有利であ

るかもしれない。

では逆に、香深井 A 遺跡における、小規模な層位間の混入、特に「下位の層準の資料が上位の層準に混入」した可能性を示唆する材料はどの程度あるのだろうか。ここでは以下の点に着目しておきたい。

a) 大井氏がデータとして採用した資料の大多数が、破片資料である点

大井氏が第 49 図のデータとして採用した個体数は、上のグラフでは完形を含む口縁部破片数 5757 点、下のグラフでは器形を復元しうる個体数 361 点である。これは、大井氏が分析対象とした個体のうちの 93%が「器形の復元できない破片資料」であることを示す。大井氏は破片資料を含めたこれらの土器群を「廃棄の同時性」を持つ一群としてとらえているが、果たして妥当であろうか。もし、「竪穴住居址とその生活廃棄物投棄の場としての魚骨層」(大場・大井編 1981 : 501) が対応し、一定の場所に土器がまとまって廃棄され、他の時期・地点からの混入や撹乱がないのであれば、器形復元できる個体の割合がもう少し多くなければならないのではないだろうか。器形復元できない破片資料が多いということは、裏を返せば発掘区外に同一個体の別破片が分散されていると言うことである。だとすれば廃棄後に移動されているか、そもそも廃棄時にまとまって捨てられていないか、いずれかあるいは両者の可能性が疑われる。以上の論理で考えた場合、各層位における「廃棄の同時性」にはなお疑問が残るといえよう。

b) 口縁部から復元された個体数と、底部から復元された個体数に大きな差がある点

各魚骨層の資料中の、口縁部から復元された個体数と、底部からの個体数を魚骨層Ⅰ～Ⅴまでの各層で比較したすると、大井氏自ら認めるように常に前者が大きく後者が小さい (大場・大井編 1976 : 746 別表 1) (注 24)。オホーツク土器は口径が底径よりも遙かに大きいので、土器が壊れて破片になった場合、破片の数自体はいうまでもなく口縁部の方が多くなる。しかし香深井 A 遺跡報告では口縁部個体に対し同一個体の同定がなされている。その同定に大きな問題はないと仮定した上で、さらに完形に近い個体が同一地点に廃棄されていたとするならば、口縁部と底部の個体数に大きな開きは生じないはずである。逆に言えば底部破片が発掘区外に廃棄されているか、発掘区外から別個体の口縁部破片が混入しているからこそ、「個体復元数のアンバランス」が生じると考えられる。よって「個体復元数のアンバランス」がある香深井 A 遺跡の北大調査区内では、「(他の地点との) 土器破片の混淆」が生じていた可能性が否定しきれない。もしこのような「混淆」があったとすれば、他の地点からの混入資料は同時期である保証はないので、やはり「廃棄の同時性」には疑問が残ることになる。

c)「層位を越えて接合する例がある」点

大井氏自らこのような例があることを述べている（大井 1982a：(上) 注8・注12)。

d)「古い魚骨層を掘りあげて作られた竪穴住居・墓壙等の揚土がどこに・どのように処理されたか」(大井前掲：(上) 24) 不明な点

a) ～c) の点を考慮すれば、これらの「揚土」がより新しい時期の魚骨層に混入している可能性は、大井氏の想定よりも多く見積もらねばならないと考えられる。

しかしこれらの問題をあげつらったところで、結局は「下層から上層への資料の混入がどの程度の頻度で起こっていたかを定量的に考えることは困難」(大井 1982a：(上) 注 12) である。水掛け論に終始せず議論を生産的にするには、今後、他の遺跡での成果を積み重ね、香深井 A 遺跡の「層位的関係」との対比作業を継続してゆく必要があろう。

ただここでは、大井「型式論」の根拠は、少なくともオホーツク土器に関しては、香深井 A 遺跡の「層位的関係」のみである点を強調しておきたい。前節までに検討したように、香深井 A 以外の遺跡では大井氏の説とは矛盾するような出土状況が確認されている例があるし、香深井 A 遺跡の「層位的関係」自体にも再検討の余地が残ることは以上に明らかであろう。

では逆に筆者の型式編年が正しいとした場合、香深井 A 遺跡の各魚骨層の内容はどのように説明したらよいであろうか。多くの問題はあろうが、ここでは破片・無文資料を除いた器形復元可能な資料（第68図）に対してのみ、筆者なりの解釈を試みておきたい。

a) 魚骨層Ⅴ...刺突文群後半段階。

b) 魚骨層Ⅳ...この層の堆積中に、刺突文群と刻文Ⅰ群の交替が生じる。刻文Ⅱ群は刻文Ⅰ群の成立段階からすでに萌芽的に生じている可能性があるが、全体に占める割合は低い。

c) 魚骨層Ⅲ・Ⅲ0...刻文Ⅰ群からⅡ群へと漸移的に変化する過程。刺突文系の文様は文様要素としては一部残存する（「属性錯綜（刺)」）が、型式としての刺突文群は残存しない。おそらく、この層に認められる「刺」や「刺+」は「混入」であろう。一方、沈線文系の文様は（サハリン以北の）江の浦A式からの影響として例外的に刻文Ⅰ群・Ⅱ群に併用される（「属性錯綜（沈)」）が、この時期にはまだ型式としての沈線文群は成立しない。

d) 魚骨層Ⅱ・Ⅰ...刻文Ⅱ群から沈線文群へと漸移的に変化する過程。刻文Ⅰ群は消滅する。これらの層の刺突文群もおそらく「混入」であろう。

6　小括

1）道北部編年のまとめ

要点を箇条書きにまとめる。

a）道北部で出土したオホーツク土器群のなかで質量ともに随一といえるのは香深井 A 遺跡出土土器群である。本章ではその香深井 A 遺跡資料を対象に、文様・器形に関する 4 種の属性（口縁部文様要素・口縁部施文位置・口縁部肥厚帯の形・土器上半部のプロポーション）に関する分析を行った。その結果、これら 4 種の属性の組み合わせにはいくつかのパターンが認められた。それら組み合わせパターンのうちの出現頻度の高い上位 4 パターンを基準として、刺突文群・刻文Ⅰ群・刻文Ⅱ群・沈線文群の細別型式を設定した。

b）香深井 A 遺跡以前／以後の資料を含めて道北部のオホーツク土器型式全体を再検討すると、以下の細別型式が設定できる。

刺突文群（前半段階・後半段階）

刻文Ⅰ群

刻文Ⅱ群

沈線文群（前半段階・後半段階）

（道東部藤本編年 d 群・e 群に併行する土器群）

ただしこのうちの沈線文群の後半段階以降については、出土例が少なく細別型式としてのまとまりがはっきりしていない。

c）隣接する細別型式間で型式学的特徴を比較すると、刺突文群と刻文Ⅰ群との差が相対的に大きい一方、刻文Ⅰ群と刻文Ⅱ群、刻文Ⅱ群と沈線文群とでは互いの類似度が高い。また、分類上「どっちつかず」となるような中間的な特徴を持つ土器は、隣接する型式間には認められる。しかし 2 段階以上離れた型式間で属性を折衷する例はきわめて少ない。

d）各細別型式の出土状況を見ると、刺突文群のみからなる遺跡、刻文Ⅰ群から始まる遺跡、刻文Ⅱ群から始まる遺跡、刻文Ⅱ群までで一旦断絶する遺跡がある。また、香深井 A 遺跡以外では、2 段階以上離れた細別型式が同層位・遺構内で確実に共伴した例はなく、香深井 A 遺跡の「共伴」もいくつかの点で再検討の余地がある。以上の出土状況は、各細別型式が時期差であることを示している。ただし単独でまとまった出土が確認されたのは刺突文群のみで、刻文Ⅰ群を出土する遺跡では刻文Ⅱ群が、沈線文群を出土する遺跡では刻文Ⅱ群が共伴ないしは混在して出土している。

e）　c）d）の点からすると、刺突文群→刻文Ⅰ群→刻文Ⅱ群→沈線文群という変遷は、単線的かつ不可逆的な進行とみることができる。また、刺突文群から刻文Ⅰ群への変化は非連続的

に、一気に交替が進んだようなかたちで進行したと考えられる一方、刻文Ⅰ群以降の変化は漸移的に、ゆっくり進行したと推測できる。

f）本章での以上の検討結果は、大井氏が同じ資料を用いて提起した「型式論的変遷」－二つ以上の細別型式が共伴しつつ、その組成が漸移的に変化するような変遷過程－に抵触する。

2）再び大井氏説について

本章の冒頭で大井氏の「型式論的変遷」説に対する疑問点を二点あげた。その二点に対する検証過程で明らかになった大井氏説の問題点について、再度まとめておこう。

一つは、「層位は型式に優先する」ことを型式設定の前提とした点である。結果として香深井A遺跡の「層位的関係」がそのまま「型式論的変遷」の実態として認識されることとなった。これは、確実な層位データが限られていた当時を考えればやむを得ない部分もあるが、大井氏自ら意識していたように、当時すでに香深井A遺跡と抵触するようなデータが他の遺跡からは得られていた。ここでは最近の調査成果も加えて、香深井A遺跡の「層位的関係」と矛盾するような出土状況が存在することをあらためて示し、また、香深井A遺跡の「層位的関係」自体にも再検討の余地が残ることを指摘した。

もう一つの問題点は、型式の具体的かつ詳細な内容に踏み込まずに、土器型式を静的か・動的かの単純な二分法で定義・理解しようとした点である。大井氏は土器型式のあり方として、静的な、すなわち「一定の型式論的特徴を持つ一群の土器が、ある一定の期間その特徴を変えずに存続する」というすがたを否定し、複数の型式論的特徴がそれぞれ漸移的に、常に変化し続ける、という動的なすがたを想定した（大井 1982a：（上）36-37）。これに対し筆者は、土器型式の変遷の仕方には静的な場合も動的な場合もあるのであって、先験的にどちらか一方に決めてしまうことはできないと考える。実際、本章での分析では刺突文群から刻文Ⅰ群への変化では「静的」に近いあり方が、刻文Ⅰ群以後では「動的」に近いあり方が確認されている。

大井氏が型式分類の指標とした属性群－「文様要素」と「器形」－は、確かに時間軸に沿って順調に変化する属性を含んでおり、氏がこれらの属性群に着目したこと自体はまさに卓見であった。しかし我々（おそらくは土器製作者自身を含む）が細別型式を認識・弁別する際には、個々の土器の特徴をもう少し細かいレヴェルまで分解して観察し、各種属性の組み合わせによって個体どうしを比較しているのが現実ではないだろうか。本章で分析対象とした属性もわずか4種類であり十分とはいえない部分もあるが、その4種の属性を組み合わせて型式を設定することで、大井氏の「型式論的変遷」では捉えきれていない型式変遷の実態を具体的にトレースすることができた。すでに林氏の批判にもあるように（林 1991）、土器の諸属性を1、2種類の指標へと単純化し、それらの指標をもって土器型式の変遷過程を余すところなく説明できたとする大井氏の

説には、遺憾ながらやや性急な部分があったといわざるを得ない。

以上、道北部のオホーツク土器編年を再検討した。ここで明らかになった土器型式の実態の背景には、どのような土器やヒトの動きがあるのであろうか。それを解明するためには、他の地域、特にサハリン以北や道東部と道北部との関係を検討する必要がある。次章以降では、地域間の対比を念頭に置きつつ、道北部以外の地域の編年について検討する。

なお、「刺突文群」という型式名称であるが、大井氏の用語との整合性をもたせるためここまでこの名称を用いてきた。しかしこの「刺突文群」は伊東信雄氏が設定したサハリンの十和田式（伊東 1942）と全く同一の型式である一方、大井氏による伊東編年への批判は有効ではないとの結論に達したので、大井氏の型式名称にこだわる必要はなくなった。よって以後の章では「刺突文群」を十和田式と呼称することにしたい。

注

(1) 実は筆者は以前、発掘報告書にてオホーツク土器の分類・編年をする際に、大井氏による方法をそのまま採用してしまったことがある（熊木 1995、熊木 2000b）。当時から筆者は大井氏の方法に多少なりとも疑問を抱いていたのだが、当時はその疑問を解消できるだけの能力がなかったので、遺跡間の比較のためには方法論的な統一を図った方がよいと考えて大井氏の方法をそのまま採用してしまったのである。筆者が報告書で集計したデータ自体は現在でも有効なものであるが、編年に関する考察については一部に誤りを犯してしまっている。これは筆者の未熟さによるものであり、上記文献の内容の一部、特に香深井A遺跡との編年対比部分については撤回することにしたい。

(2) 誤解のないように言っておけば、筆者は、「A：B：Cの割合が変化するというかたちでの型式学的変遷」が存在すること自体を否定するつもりはない。例えば複数の器種が認められる型式の器種組成や、隣接地域の型式群がセットとなるような組成で構成される一括土器群などの場合、このような変遷過程が認められるケースがあるであろう。ここで問題としたいのは、1 器種 1 系統の型式組列を細別する際にはどのような方法・区分が適当か、ということである。

(3) 分析は、表土層や撹乱・排土出土土器も含めた全出土土器中、口縁部～胴部までが遺存し、報告書に復元実測図が掲載されている個体 419 点を対象とした。ただしミニチュア土器及びきわめて例外的な器形・文様を持つ土器数点は除いている。また破片資料については、器形の判定が難しく、また資料の実見が困難であったため分析を省略している。

(4) 分析対象とした 419 点の資料のうち、a/b、c/d の両方が測定できたのは 275 点である。なお刺突文系文様を持つ土器の中には、b より a が大きい深鉢形の土器がある。このタイプの土器は b の測定個所が決められず b と d の数値が測定不能となるので、遺存率が大きいにも関わらずこの数には含めていない。

(5) 判別分析には、エス・ピー・エス・エス株式会社の統計ソフト、SPSS 10.0J for Windows を用いた。判別分析の対象としたのは、注（5）の 275 点から無文の 35 点と貼付文の 1 点を除いた 239 点である。なお注（5）で触れた b より a が大きい深鉢形土器は、プロポーションの分類としては図 2-15 のグラフでいう領域 B に含まれるとしてよいので、これらの土器 20 点は全て器形 B に追加する。よって最終的に器形分類を行ったのは 259 点となる。

(6) 完形土器の例が少ないので証明は難しいが、「直下・屈曲」と「面」は、ここに取り上げた以外の属性（器形全体の縦横比、底径／口径比、胴部屈曲部の段の有無等）で十分に判別可能と思われる。

(7) プロポーションの分類は口縁部施文位置との相関が強くなるように設定されたわけであるが、グラフや判別分析の結果が示すように両者が一対一で対応するわけではない。一対一で対応するならば分類項目を別々に設定する意味がないことはいうまでもない。

(8) ここで注目すべきは口縁部文様要素の刻文系文様内における各項目である。大井氏分類では「型押文」「刻文」が相対的にやや古く、「爪形文」がやや新しい、という集計結果がでているが、筆者のより詳細な分類では異なる序列となっている。筆者の序列に明らかなように、刻文系文様内における新旧の指標となるのは、文様要素の意匠の「方向」であろう。すなわち、斜め方向の意匠（「爪 2」、「刻斜」）が古く、水平方向の意匠（「型」・「刻横」）が新しいといえると考えられる。ちなみに「爪 1」は斜めと水平の両方があるが、この違いは漸移的で分類は難しいため区別しなかった。しかし、水平方向のものが新しい傾向にあるとの印象を、筆者は土器観察中に強く抱いている。

(9) ただし「刺突文系パターン」52 個体のうち、「円刻」の土器はわずかに 1 個体である。

(10) 注 6 参照。

(11) 「属性錯綜」とした土器を実際に見た印象で判断すると、「錯綜」というより隣接段階の「中間的」様相と解釈できる例が多い。これは、プロポーション属性のみが「錯綜」となっている個体が多いのが原因であろう。プロポーションの変異は特に微少で漸移的であるから、これらの個体を直ちに「錯綜」と評価できるかは難しいといえる。逆に、属性が「錯綜」していると見た目で判断できる土器は、刺突文群と刻文Ⅱ群との「錯綜」例があるもののごく少数であり、刺突文群と沈線文群との「錯綜」例は全く確認できない。また刻文Ⅰ群と沈線文群の「錯綜」例は、離れた段階の共存ではなく、サハリンの型式の影響と考えた方がよい。本論第 9 章で後述するように、サハリン以北では刻文Ⅰ群段階の土器に沈線文が併存する例が普通に見られる。

　要するに、分類上「属性錯綜」とした土器の実態を評価してみると、実際には離れた段階の属性が共存すると認定できる個体は少ない、ということである。

(12) 改めていうまでもないかも知れないが、刻文Ⅱ群と沈線文群との間は第 61 図下にあげた属性の差（口縁部文様要素、肥厚帯の消滅）以外にも、例えば器形上の細かい差（胴部屈曲部の段、口唇部の形）なども存在する。このような差を考慮したばあい、両群の間の「類似度」はさらに低下することとなる。

実際、刻文Ⅱ群と沈線文群の関係は、それほど近いものとしては意識されていないというのが多くの観察者の実感ではないだろうか。もっとも、我々の価値判断が「文様要素の重視」という学史的パラダイムのもとに形成されている点には配慮する必要がある。

(13) 刺突文群と沈線文群の間には共通するように見える属性もある（口縁部肥厚帯を持たない、器形が甕形）が、これらが両者の併存や影響関係を示すものではないことは自明であろう。

(14) 天野・小野の両氏は、刺突文群土器の変遷について、古い段階の胴部文様要素には刻文と隆帯文が多く、新しい段階になると沈線文と無文が増加する傾向にあるとまとめている（天野・小野 2002)。隆帯文が減少する傾向は両氏の指摘通りであろう。しかし本文に述べたように、替わって増加するのは沈線文というより、正確には沈線＋刻文の意匠であろう。一方、無文の増加と刻文の減少についてはそれほど顕著な傾向ではないと筆者は評価するが、本論第Ⅰ部第 5 章の鈴谷式編年で着目した「縦方向に揃えられた刻文」＝短刻線文が、十和田式では IO 突瘤文土器の方に比較的多く認められる点には注目しておきたい。

(15) ただし香深井 A 遺跡の魚骨層Ⅵおよびその下層から出土した土器は、刺突文群の前半段階である可能性が高い。

(16) 小野裕子氏は、元地遺跡の魚骨層Ⅰ～Ⅰ”と香深井 A 遺跡の「狭義の黒褐色砂質土層」の文様要素出現率を比較し、前者が相対的に新しいことを指摘している（小野 1998a)。土器図版が示されていないので、元地遺跡例の具体的な内容については不明な部分が多く、型式学的な見地からの検証は難しい。

(17) 無論、本文中の b）c）のみをもってこれらの沈線文系土器群が藤本編年 d 群より古いことが証明できるわけではなく、両者が併行する可能性も考慮する必要がある。しかし常呂町以東の遺跡で見る限り、藤本編年 d 群そのもののまとまりには沈線文系の文様要素は全く認められない。目梨泊遺跡でも同様に藤本 d 群の時期には沈線文系の要素はほぼ消滅しているとみられる。

(18) 層位的出土状況の検討対象には道北部以外、特に道東部の遺跡も含めている。第 8 章に述べるように刻文Ⅱ群の段階から道北部と道東部では地域差が目立ち始めるが、刻文Ⅱ群と、併行する道東部の型式（第 8 章で言う「刻文期後半段階」）との対比は容易であるので、両型式は全く正確な併行関係として把握できる。よって道東部の出土状況から道北部の時期と型式を推定しても大きな問題は生じないであろう。

(19) この「オホーツク土器前期はじめ」とは右代啓視氏による編年（右代 1991）のⅠ-a 期、すなわち刺突文群土器に相当するとみられる。

(20) 近隣と思われる「辻中氏宅」「村椿氏宅」の資料（大沼・本田 1970）を含めた場合には刺突文群が追加される。その場合、本遺跡は「刻文Ⅱ群の後、継続性が絶たれる遺跡」にのみ分類されることになろう。

(21) 魚骨ブロック 5 からは「円形刺突文」を有する土器が 2 点出土している。報告者の佐藤昌俊氏・藤沢

隆史氏は、これらの土器を「Ⅲ群 C 類」（筆者分類の刻文Ⅱ群・沈線文群に相当）に含めて分類されており、筆者も両氏に賛同する。その根拠は両氏の見解と同様に、これらの土器の器形が沈線文群と選ぶところがない点、さらに「円形刺突文」自体の特徴も刺突文群本来の特徴とは大きく異なっている点にある。これらの土器は「属性錯綜」ではなく、沈線文群の特異な例としてとらえるべきであろう。

(22) ただし刺突文群と刻文Ⅰ群は、時間的にも型式的にも全く非連続なわけではない。本文で「円刻」としたような、刺突文系文様と刻文系文様が同一個体中に共伴する例は、そのことを明瞭に示している。ただしこのような土器は香深井 A 遺跡例を中心に、わずかな例が各地で散見されているに過ぎない。ここでは、刺突文群と刻文Ⅰ群の間に、多少の「漸移的」な部分があることを認めた上で、出土パターン 1・2 の遺跡が道北部でも確認されていることの方を重視し、両型式の間を基本的に非連続な時期差としてとらえておきたい。

(23) オンコロマナイ遺跡 H-1・H-2 竪穴上層出土土器群（泉・曽野編 1967）は、沈線文群単独の出土例となる可能性もあるが、報告された個体数が少なく確言できない。なお浜中 2 遺跡 1990 年度調査 B 区では、近世アイヌの遺物、「元地式」、沈線文系土器、刻文系土器、刺突文群がそれぞれ層位的なまとまりをもって出土したとされている（前田・山浦編 1992）。調査者によれば層位毎に排他的に型式が包含される状況はかなり明瞭で、型式の層位的変化をみた場合には「漸移的な量的変化を示すことがなかったことを特徴として指摘できる」（前田・山浦前掲：43）というほどであったという。報告者による引用部分の記述はおそらく大井「型式論」に対する反証を意識したものであろう。ただし各層から出土した遺物の全容についての詳細データがなく、各層の具体的な型式内容について不明な部分が多いため、本例は本文ではデータとして採用しないでおく。

(24) 両者の差は、最大で 3.12 倍（魚骨層Ⅱ）、最小で 2.57 倍（魚骨層Ⅴ）である。

第8章　モヨロ貝塚のオホーツク土器
－北海道東部の編年－

1.　本章の目的

網走市モヨロ貝塚は、遺跡の内容からみても、また学史的な重要性からいっても、北海道のオホーツク文化を代表する遺跡といえよう。この遺跡の特色は、大型の竪穴住居群、貝塚、多数の墳墓群がセットとなっている点、長期間にわたる継続的な居住が認められる点、さらに大陸産・本州産の稀少遺物が多く出土した点などにあり、いずれも北海道随一である。さらに古くから学会に認知され、戦後の発掘調査の嚆矢となったという学史的な面でも著名かつ重要な遺跡であり、これまでに幾度となく発掘調査が行われ、数々の成果と大量の遺物が得られている。調査成果については、全てが公表されているわけではないが、主要な調査・出土資料については米村 1935、児玉 1948、名取 1948、米村 1950、大場 1955、大場 1956、大場 1957、河野 1958、大場 1961、大場 1962a、駒井編 1964、清野 1969、米村 1969、市立函館博物館編 1983、宇田川編 1984、網走市郷土博物館編 1986、和田ほか 2001、和田ほか 2003 などの報告や資料目録等が刊行されている。

しかしながらこれらの発掘調査は大半が昭和 26 年度以前に行われたものであるため(注 1)、当時の調査報告を現在の研究水準で再検討しようとする場合、情報がどうしても不足してしまう。それは遺跡・遺構に関するデータのみならず、遺物の分布・出土状況、さらには遺物そのものに関しても同様である。特にこれまで公刊された報告・資料目録では遺物の記載が写真のみという場合も多く、詳細な実測図等が公表されていないものが多い。

北海道のオホーツク土器編年を考察する上で、モヨロ貝塚の資料を避けて通るわけには行かないであろう。なぜかといえば、モヨロ貝塚以外に、北海道東部で刻文期の土器がまとまって出土している遺跡は数少ないからである。その中でも刻文期から貼付文期にかけて途切れなく各型式が出土した遺跡はさらに希有であるし、さらに完形土器で 200 個体を優に超える大量の出土が認められた遺跡はモヨロ貝塚をおいて他にない。オホーツク土器は刻文期において広域に展開し、その後次第に地域色が強まってゆくという変遷過程を辿るのであるが、この地域化の過程をトレースする上でモヨロ貝塚の資料はまさに絶好の条件を揃えている。逆に言えばこの資料から目を背けるならば、道東部の系統を明らかにできないばかりか、広域編年対比の検討も頓挫せざるを

得なくなる。モヨロ貝塚の資料はかくも重要であるのだが、詳細については不明な部分が多いのが現状なのである。

本章の目的は、モヨロ貝塚資料の分析を通じて、北海道東部における貼付文期以前の土器編年を検討することにある。ただし資料の現状は上記の通りであるから、分析に先立ち、まずは基礎データを公開・共有する必要がある。よって本章ではまず調査対象とした資料を紹介し、新たに作成した土器図版を掲載する。次にそれらのデータを分析してモヨロ貝塚資料の型式分類を行い、他の道東部の資料と対比しながら、このモヨロ貝塚資料を核とした道東部編年を提示する。

道東部で貼付文期の土器が成立するまでの型式変遷過程はやや複雑である。しかしそれは、道東部には地域固有の系統があってそこに道北部の影響が波及してくる、という図式で考えると理解が容易になる。本章では道東部の系統を明らかにした上で道北部との編年対比を行い、両地域間の型式交渉や地域型式圏のあり方を明らかにする。道北部／道東部の系統を整理し、やや複雑に見える道東部の型式変遷過程を解きほぐすことが、本章での重要な検討課題である。

なお以前より指摘されてきたことであるが（天野 1978a など）、道東部では刻文期に先立つ十和田式土器（前章でいう刺突文群の土器）はきわめて稀にしか確認されておらず、その傾向は最近でも変わっていない。モヨロ貝塚でもこの時期の土器は全く確認されていないので(注 2)、本章では十和田式併行期は分析対象から外すことにする。

2.　資料について

今回新たに資料の閲覧と実測図の作成・公開を許可していただいたのは、函館市北方民族資料館・市立函館博物館が所蔵する児玉コレクションと、北海道立北方民族博物館が所蔵する米村喜男衛氏らの調査資料を主体としたコレクションの、それぞれ一部である。各コレクションに含まれるモヨロ貝塚出土オホーツク土器の概要と、今回調査対象とした範囲については以下の通りである。

1）児玉コレクション

本コレクションは「先史・考古資料」と「アイヌ民族資料」からなる膨大なコレクションであり、その内容は市立函館博物館発行の目録 2 冊に纏められている（市立函館博物館編 1983、同 1987)。このうちモヨロ貝塚の資料は目録第Ⅰ巻の「Ⅱ-6.網走市最寄」(市立函館博物館編 1983：33-99）の項に記載されており、土器以外の遺物を含む全資料点数は 2458 点である。そのうちオホーツク土器として記載されているのは全て「完形」ないし「復元完形」ないし「一部欠」の土

器であり、点数は「袖珍土器」も含めて175個体である。

なお本コレクションのオホーツク土器は、大場利夫氏が「モヨロ貝塚出土のオホーツク土器」論文（大場 1956）中で紹介した土器群とほぼ一致するとみられる(注 3)。ただし大場氏が紹介した完形並びに復元可能な土器の点数は 184 個体であり(注 4)、函館博物館の目録とは点数に多少の不一致がある。この不一致の理由は、大場論文の土器群に児玉コレクション以外のものが含まれていたことなどによるようである(注 5)。なお大場氏によれば、これらの土器群は昭和 16 年～17 年の軍事施設建設工事に伴う緊急調査時に採集されたものが主体であるという。人骨とともに出土したという記載（大場前掲：2）や、調査地点に竪穴らしき地表面の凹みがあった点（駒井編 1964）からすると、本土器群には墓の副葬土器のほか、竪穴に伴う土器もあった可能性があるが、詳しい出土状況は不明である。

本コレクションの型式内容について概観しておこう。大場論文中の「土器実測表」によれば、完形・復元土器 184 点の内訳は、大場氏のいう「第一型式」、すなわち刻文系文様かつ／または指圧式浮文・隆起式浮文等の太い貼付文を持つ「型式」でいわゆる刻文系土器と沈線文系土器に相当すると思われる土器が 117 点、「第二型式」、すなわち細い貼付文をもつ「型式」でいわゆる藤本編年 d 群・e 群に相当する土器が 58 点、「第一・第二型式の融合型式」の土器が 9 点となっている。古手の型式が比較的多数を占めるといえよう。

今回は本コレクション中より 41 個体の完形・復元土器について観察・データ収集を行い、うち 22 点については実測図を作成した。観察対象は全て大場氏分類の「第一型式」に相当するもので、貼付文期より古く位置づけられる土器である。「第一型式」全体の 3 割強、コレクション全体では2割ほどの土器を観察したことになる。なお観察した土器の遺存状態は、ほとんど割れ・欠損のない完形土器か、底部のみ欠損しているが胴部以上には割れ・欠損のほとんどない復元土器かのいずれかであった。このような遺存状態から判断すると、今回観察した土器の多くは墓の副葬土器であった可能性が高いとみられる。

2) 米村喜男衛氏らによるコレクション

本コレクションは網走市立郷土博物館と北海道立北方民族博物館の両館が所蔵するモヨロ貝塚出土考古資料である。内容は網走市立郷土博物館発行の目録にまとめられており（網走市立郷土博物館編 1986)、土器以外の遺物を含む全資料点数は 12633 点である。そのうちオホーツク土器は 2065 点であり、その中で完形並びに「一部欠」とされた復元土器の個体数は 94 個体となっている。

本コレクションの由来や出土位置等に関する情報は一切不明である。ただしいくつかの土器については、米村喜男衛氏が著した『モヨロ貝塚資料集』（米村 1950）の図版に掲載された土器と

対照が可能である。同書掲載の遺物が本コレクションの核とみて間違いないであろう。ちなみに同書掲載の土器は全て「第一地点」の出土とされている。また今回は本コレクション全体の型式内容については調査ができていないが、目録掲載の図版を見る限り刻文系から貼付文系までまんべんなく各型式が含まれているようであり、極端な偏りは認められないようである。

今回は本コレクションのうち、北方民族博物館の所蔵する資料の一部について観察・データ収集を行った。調査点数は完形・復元土器26個体であり、うち14点については実測図を作成した。全て貼付文期より古い土器である。またこれとは別に、いわゆる藤本編年 d 群・e 群相当の土器2 個体についても参考のために実測図を作成した。本コレクション中の完形・復元土器のうち 3 割弱を観察したことになる。なお観察した土器の遺存状態であるが、1 点（第76図-3）を除き、やはりほとんど割れ・欠損のない完形土器か、底部のみ欠損し胴部以上では割れ・欠損がほとんどない復元土器かのいずれかであった。児玉コレクションの場合と同様、本コレクションの調査対象土器も多くは墓の副葬土器であった可能性が高い。

モヨロ貝塚資料を所蔵している博物館・大学等の数は多く、筆者もその全てを把握しているわけではないが、上記 2 つのコレクションが最も規模の大きなものであることは間違いない。すなわちこれらのコレクションの全点を調査すれば現存するモヨロ貝塚資料の大半を把握できるのであるが、今回は筆者の能力的限界もあり一部のデータ収集のみとなってしまった。しかし前述のように道東部ではこの時期の資料が限られているので、今回紹介する資料は不十分ながらも道東部編年を具体的に検討する上で重要な役割を果たすはずである。

なお、今回は両コレクションのほかに実測図が公刊されている以下の資料についても、貼付文期以前の完形土器を対象にデータを収集した。

・モヨロ貝塚調査団発掘資料のうちの、東京大学所蔵資料 2 点（駒井編 1964）

・網走市教育委員会による平成 13 年・14 年度調査資料 4 点（和田ほか 2001・和田ほか 2003）

3.　モヨロ貝塚資料の型式学的検討

1）属性とその分類

まずは前章の道北部編年などを参考にしながら、時間軸に沿って変化する属性を抽出し分類する。分類項目の配列順は基本的に旧→新の時間順を想定した並びであるが、後述のように道北部ほど配列のあり方は単純ではない。

a）口縁部文様要素

道北部の分類を一部改変し、第69図のように11の分類項目を設定する。新しく加えた「刻ハ」や「貼太系文様」（「貼瘤」・「貼太」）は、道東部に特徴的な文様であり、道北部では少ない。一方で道北部に多い沈線文系文様は道東部では少数である。なお、無文については道北部同様、各時期で一定程度みられる属性で、時期差を反映しないと思われる。

b）口縁部施文位置

やはり道北部の分類を一部改変して第 70 図-上のように 3 つの分類項目を設定する。後述のように、口縁部施文位置の変遷はいったん「下縁」→「面」と変化した後、一部が再び「下縁」へと逆戻りするようである。

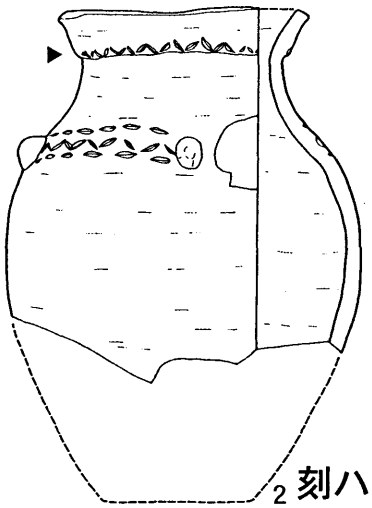
c）口縁部肥厚帯

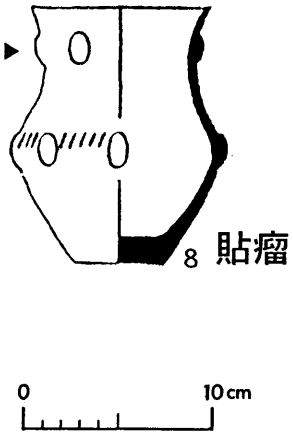
肥厚帯の有無のみを分類した（第 70 図-中）。道北部では肥厚帯の形をさらに細分したが、道東部では形の変異が相対的に小さいため細分は行わなかった。地域差として注目されよう。なお肥厚帯の変遷も、「有」→「無」と変化した後、一部が再び「有」へと逆戻りするようである。

d）器形

器形の分類には、モデルではなく計測値による比率尺度を用いる。まずは器形変化の概略を把握しておこう。モヨロ貝塚資料の器形には、器形全体が縦長で頸部のすぼまる壷形から、器形全体が横長で頸部があまりすぼまらない甕形まで、漸移的な変異が認められる。かつて大場氏はモヨロ貝塚資料に対して器形分類を試みたが（大場 1956）、器形の時期差については明言しなかった。実はモヨロ貝塚資料では壺形の土器が新しい時期まで残るという特異な傾向があるため、資料がモヨロ貝塚例にほぼ限られていた当時では、時間軸に沿った変化傾向を指摘するのは難しかったのである。

しかし他の遺跡で出土例が増加するに従い変化傾向が指摘できるようになってきた。まず刻文期の古手では縦長の壺形が主体となることが、道北部の資料や後述の相泊遺跡（澤ほか 1971、涌坂編 1996）の資料から明らかになった。一方、近年増えてきた貼付文期の住居址出土一括資料では横長の甕形が大多数で、縦長の壷型は稀である。すなわちモヨロ貝塚資料を別にすれば、道東部の器形変遷は縦長壺形→横長甕形となることが明らかになってきたのである。モヨロ貝塚で多数出土している新しい時期（貼付文期）の壺形土器は、全体のなかではむしろ特殊な例であったといえよう(注 6)。





大分類	番号	略号	名称	説明
刻文系文様	1	爪2	2本の指による爪形文	親指と人差し指など、相対する二本の指の爪を用いて施す。つまんでひねるものと、ほとんどひねらないものがある。「爪1」が併存する例はここに分類する
	2	刻ハ	「ハ」の字状の刻文※	棒状の施文具の先端を器面上で「ハ」の字状に動かして刻みつける。「刻斜」が併存する例はここに分類する
	3	刻斜	縦～斜め方向の刻文	棒状の施文具の先端を器面上で縦～斜め方向に動かして刻みつける。
	4	爪1	1本の指による爪形文	一本の指の爪で刻みつける。「刻斜」が併存する例はここに分類する
	5	型	型押文	先端が櫛歯状に分かれた施文具をスタンプのように押捺する。
	6	刻刺	刺突文	棒状の施文具で刺突する。器面上で施文具を動かさない点で6・10と異なる
	7	刻横	横方向の刻文	棒状の施文具の先端を器面上で水平に動かして刻みつける。他の種類の刻文系文様が併存する例はここに分類する
貼太系文様	8	貼瘤	貼瘤文※	やや大きめ（長径2cm程度）の楕円形粘土瘤を器面に貼り付ける
	9	貼太	太い貼付文※	太い（幅約5mm以上）紐状の貼付文を器面に貼り付ける
沈線文系文様	10	沈	沈線文※	様々な太さ・深さの沈線文。刻文を併存する例はここに分類する
その他	11	無	無文	胴部にいずれかの文様があっても、口縁部が無文のものはここに含める

※は道北部の分類項目にはないもの、または道北部とは内容が異なるもの。

第69図　口縁部文様要素の分類

2・8：モヨロ貝塚　　表の2・8・9以外は道北部の分類（第51図・第52図）と同じ。9は胴部文様要素の項（第70図及び第71図3）参照。

番号	略号	名称	説明
1	下縁	肥厚帯の下縁	断面方形もしくは稜状の肥厚帯の、下縁部にのみ文様を巡らせる。口唇部外縁にも施文される例は面に分類する。刻文系文様に特有の施文位置
2	面	口縁部の面	肥厚帯の有無とは無関係に、口縁部上の全面もしくは一部に文様が施文される。多くの場合、文様要素が水平の複数列になる。沈線文系と貼太系文様に特有の施文位置であるが、刻文系文様がこの施文位置に施される場合も多い。口唇部外縁のみに施文がある例もここに分類する
3	無	施文なし	無文の場合ここに分類する

口縁部施文位置の分類一覧表

番号	略号	名称	説明
1	有	肥厚帯あり	肥厚帯を有する例。断面形は方形、三角形、口縁部の下縁のみが稜状を呈するものなどがあり、厚さや幅にも多少の変異がある。肥厚帯の段数は1段が大多数である
2	無	肥厚帯なし	肥厚帯を持たない例

口縁部肥厚帯の分類一覧表

大分類	番号	略号	名称	説明
刻文系文様	1	刻	刻文系文様	刻文・型押文などの刻文系文様のみが施されるもの
貼太系文様	2	貼瘤	貼瘤文	やや大きめ（長径2cm程度）の楕円形粘土瘤を器面に貼り付ける。刻文系文様が併存する場合はここに分類する
	3	貼太	太い貼付文	太い（幅約5mm以上）紐状の貼付文を器面に水平方向に貼り付け、一周させる。貼付文の上下縁が器面になでつけられ、器面との段差がない例が多い。貼付文上には刻文や指によるひねりが加えられる例が多い。貼付文の下部に刻文系文様や「貼瘤」が併存する例はここに分類する
貼細系文様	4	貼短	周回せず短く途切れる貼付文	やや太い紐状の貼付文を、やや短い長さ（多くの場合数cm）で水平方向に貼り付ける。上下に二本重ねる例も多い。貼付文上下縁のなでつけはない。貼付文上には刻みが加えられる例が多い。
	5	貼細	細い貼付文	細い（幅約5mm以下）紐状の貼付文を器面に水平方向に貼り付け、一周させる。貼付文上下縁のなでつけはない。貼付文上には刻みや指によるひねりが加えられる例が多い
沈線文系文様	6	沈	沈線文	様々な太さ・深さの沈線文。刻文を併存する例はここに分類する
その他	7	無	無文	無文のもの

胴部文様要素の分類一覧表

第 70 図　各属性の分類一覧表

以上の変遷観をもとに時期差を反映するような器形区分を試みてみよう。計測は頚部の最も括れた部分の径（a)、胴部最大径（b)、器高（c）を対象に行い、頚部のくびれ度合い（a/b）と器形全体の縦横比（c/b）を算出して器形の比較を行った（第 72 図)。古手の土器のサンプルとしては、モヨロ貝塚資料から後述のモヨロⅠ・Ⅱ群に相当する土器、すなわち次の条件を全て満たしている土器を選んだ。①口縁部に刻文系文様を有し、②胴部文様に「貼細系」（後述）文様を含まず、②口縁部に肥厚帯があるもので、48 個体である(注 7)。新手の土器のサンプルとしては、モヨロ貝塚では一括資料が少ないこともあり、常呂町常呂川河口遺跡 15 号竪穴床面・埋土出土土器群（武田編 1996）を用いた。サンプル数は器形全体が判明したもの 40 個体である。また参考例として、道北部の香深井 A 遺跡資料のうちの刻文Ⅰ群・Ⅱ群・沈線文群の完形土器 31 個体についても同じ分析を行った。

モヨロ貝塚と常呂川河口 15 号の算出値をプロットしたのが第 72 図のグラフである。モヨロと常呂川では、縦横比の値にはっきりと差があることが理解できよう。一方、くびれ度についても多少の差があるが、縦横比ほどではない。第 72 図のグラフ中の境界線は、モヨロ・常呂川の両グループ間に対して線形判別関数を用いた判別分析を行い、判別関数を算出して表示したものである。器形の分類は、この境界線の上部を「縦長」／下部を「横長」として区分することにする。当然この分類は時期差を反映したものとなる。

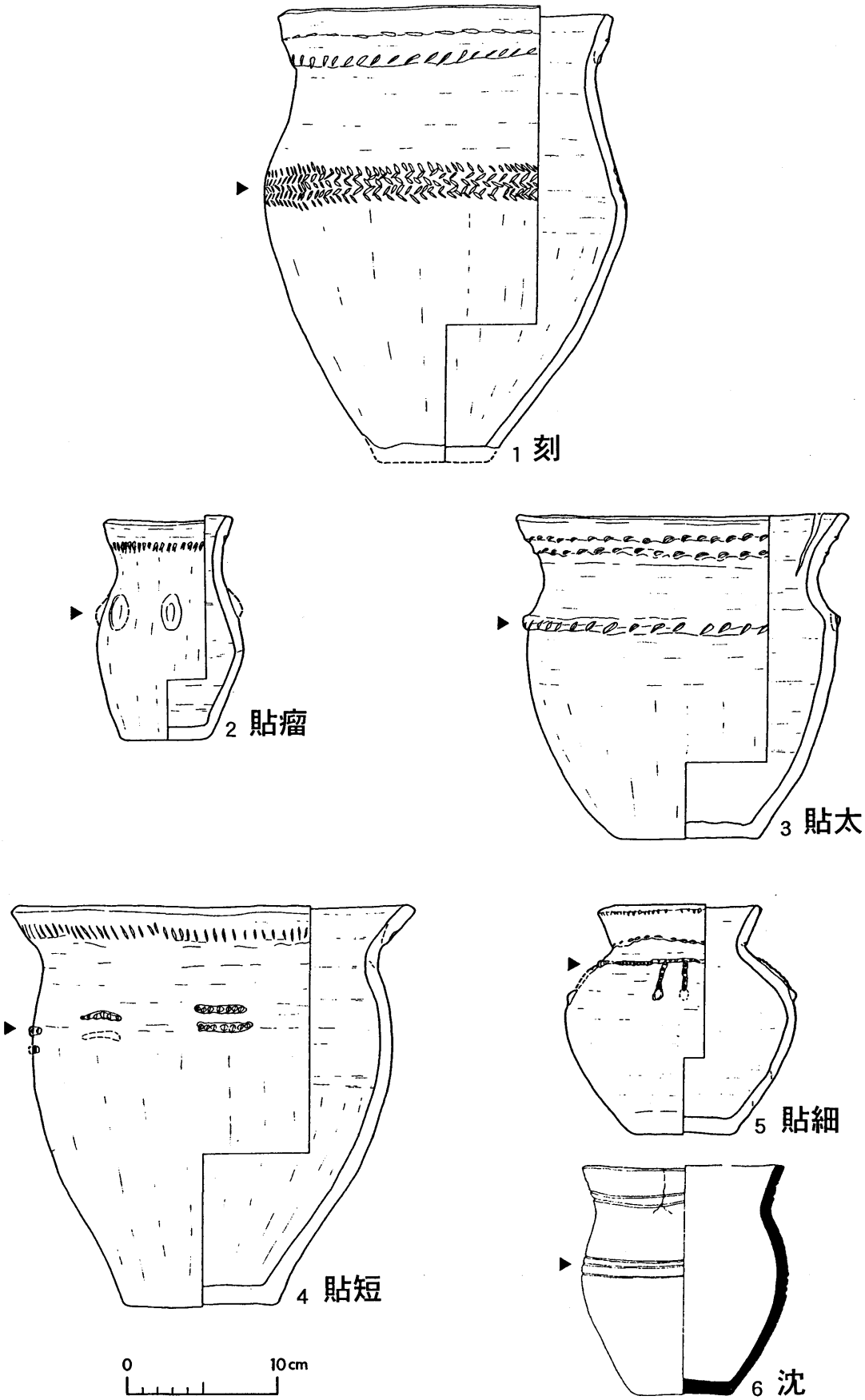
なお、第 72 図のグラフに香深井 A 資料のデータを追加したのが第 73 図である。少ないサンプル数からの分析であるが、刻文Ⅰ群はほぼ全て「縦長」、刻文Ⅱ群は「縦長」・「横長」両方、沈線文群は全例「横長」と、道北部でも道東部同様に「縦長」→「横長」という変遷が認められることが理解できよう。

e) 胴部文様要素

胴部の文様要素について、第 70 図-下～第 71 図のように分類した。無文は各時期で一定程度認められるようであり、時期差を反映していないと思われる。

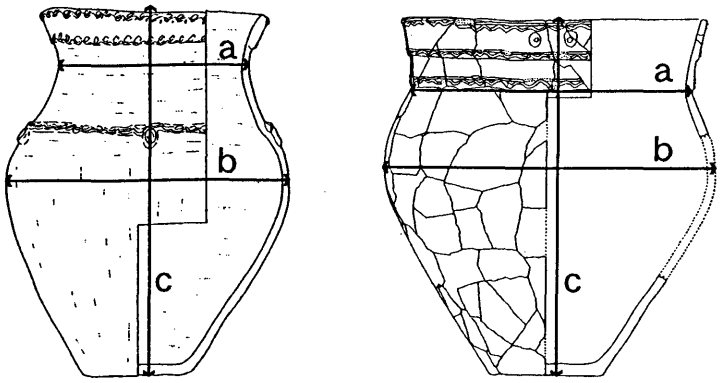
2) 属性の組み合わせ

前述の 5 種類の属性をクロス集計したのが第 74 図-表 1～表 10 である。サンプル数が少ないので定量的な分析には難があるが、おおよその傾向は把握できよう。基本的には古手の属性は別の古手の属性と、新手の属性は別の新手の属性と結合する傾向にあるが、道北部ほど整合的ではなく結合傾向に乱れがある。結論から先にいえばこの「乱れ」の原因は、在地の伝統を維持しようとするベクトルと、道北部の影響で変化しようとするベクトルとがせめぎ合い、新旧の属性が



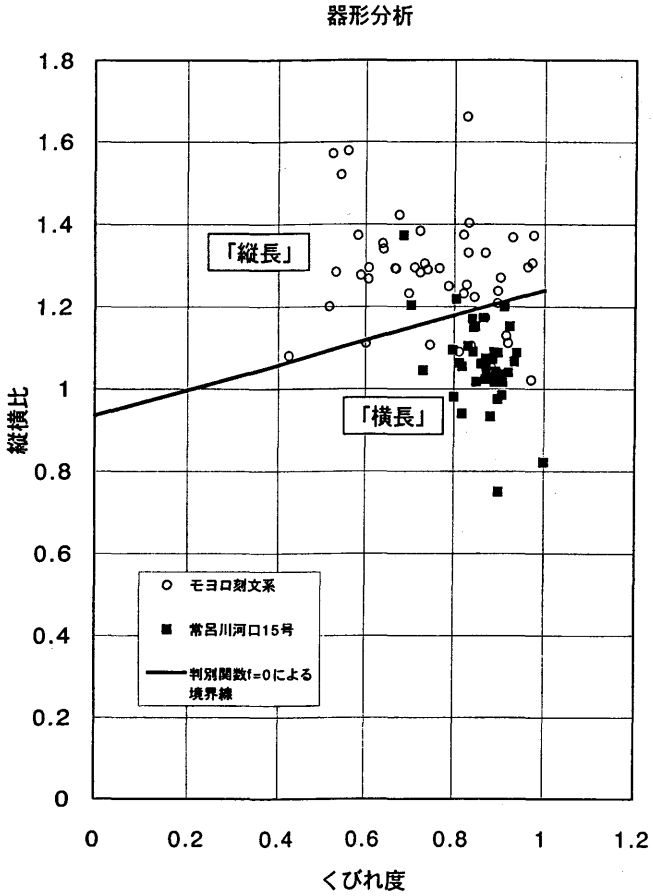
第 71 図　胴部文様要素の分類

1～6：モヨロ貝塚



モヨロ古手　　常呂川河口 15 号

くびれ度＝a／b　　縦横比＝c／b



くびれ度a/bをx、縦横比c/dをyとしたとき
モヨロ古手グループと常呂川河口15号グループの
正準判別関数f=-2.188x+7.197y-6.729

※fの係数は標準化されていないもの

標準化された正準判別関数係数

	f
くびれ度a/b	-0.250
縦横比c/d	0.895

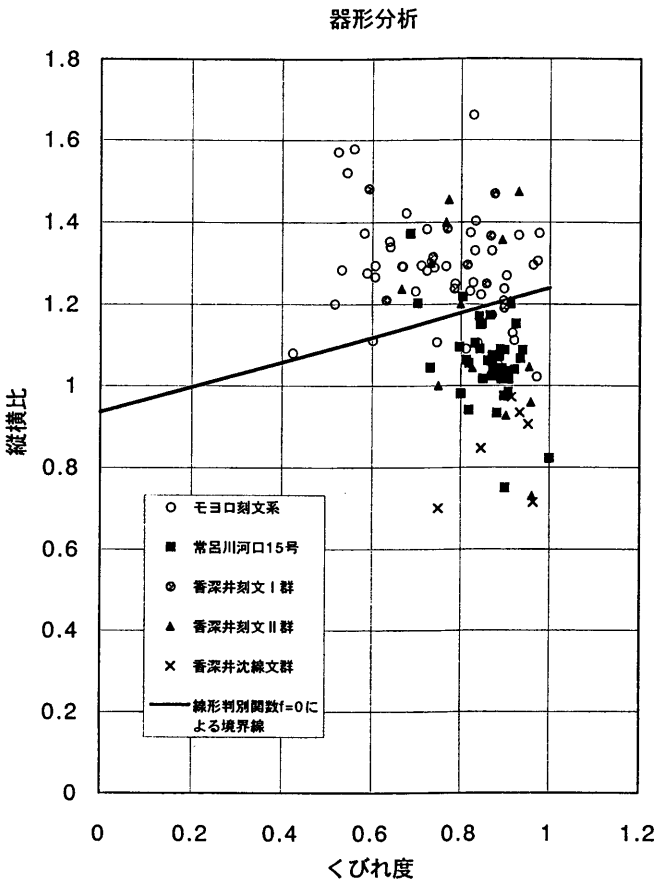
※モヨロ古手と常呂川河口15号グループの
判別では縦横比が重要な説明変量と言える

正準判別関数による分析結果

		判別関数による予測		合計
		モヨロ古手	常呂川河口15号	
元データ	モヨロ古手	39 (81.3%)	9 (18.8%)	48 (100.1%)
	常呂川河口15号	3 (7.5%)	37 (92.5%)	40 (100.0%)

※元データのうちの86.4%が判別関数により正しく分類された

第 72 図　線形判別関数による器形分類



第 73 図　道東部と道北部の器形比較

表1

		口縁部施文位置			計
		下縁	面	無	
口縁部文様要素	爪2	4	3		7
	刻ハ	4	2		6
	刻斜	8	12		20
	爪1		4		4
	型	1	2		3
	刻刺	1	4		5
	刻横	2	7		9
	貼瘤		1		1
	貼太		1		1
	沈		6		6
	無			11	11
計		20	42	11	73

表2

		口縁部肥厚帯		計
		有	無	
口縁部文様要素	爪2	7		7
	刻ハ	5	1	6
	刻斜	13	7	20
	爪1	4		4
	型	3		3
	刻刺	2	3	5
	刻横	8	1	9
	貼瘤		1	1
	貼太		1	1
	沈		6	6
	無	5	6	11
計		47	26	73

表3

		器形			計
		縦長	横長	不明	
口縁部文様要素	爪2	6	1		7
	刻ハ	2	3	1	6
	刻斜	13	7		20
	爪1	1	3		4
	型	2		1	3
	刻刺	2	2	1	5
	刻横	6	3		9
	貼瘤	1			1
	貼太	1			1
	沈	3	3		6
	無	4	7		11
計		41	29	3	73

表4

		胴部文様要素							計
		刻	貼瘤	貼太	貼短	貼細	沈	無	
口縁部文様要素	爪2	1		3		1		2	7
	刻ハ	1	1	2		1		1	6
	刻斜	3	3	4	1		1	8	20
	爪1	1		2		1			4
	型		1	2					3
	刻刺	1	1	2		1			5
	刻横	3	1	1				4	9
	貼瘤		1						1
	貼太						1		1
	沈					1	4	1	6
	無		2	1			1	7	11
計		10	10	17	1	5	7	23	73

表5

		口縁部肥厚帯		計
		有	無	
口縁部施文位置	下縁	20		20
	面	22	20	42
	無	5	6	11
計		47	26	73

表6

		器形			計
		縦長	横長	不明	
口縁部施文位置	下縁	13	5	2	20
	面	24	17	1	42
	無	4	7		11
計		41	29	3	73

表7

		胴部文様要素							計
		刻	貼瘤	貼太	貼短	貼細	沈	無	
口縁部施文位置	下縁	3	4	5		2		6	20
	面	7	4	11	1	3	6	10	42
	無		2	1			1	7	11
計		10	10	17	1	5	7	23	73

表8

		器形			計
		縦長	横長	不明	
口縁部肥厚帯	有	31	14	2	47
	無	10	15	1	26
計		41	29	3	73

表9

		胴部文様要素							計
		刻	貼瘤	貼太	貼短	貼細	沈	無	
口縁部肥厚帯	有	8	6	15		4		14	47
	無	2	4	2	1	1	7	9	26
計		10	10	17	1	5	7	23	73

表10

		胴部文様要素							計
		刻	貼瘤	貼太	貼短	貼細	沈	無	
器形	縦長	8	6	12		1	4	10	41
	横長	2	3	3	1	4	3	13	29
	不明		1	2					3
計		10	10	17	1	5	7	23	73

第74図　属性のクロス集計表

並立したり、「型式変化の逆戻り」が生じたりすることにあると考えられる。その詳細については後述することとし、とりあえずは道東部における各属性の変遷と、道北部との差について確認しておく。

a）口縁部文様要素（第74図-表1～4）

他の属性との結びつきをみると、刻文系文様（「爪2」～「刻横」）と沈線文系文様・無文とでは、後者の方が新手のものと結びつく傾向が強いようである（第70図-表1・2・3）。貼太系文様（「貼瘤」・「貼太」）はサンプル数が少なく詳細不明である。

道北部との違いで注目できるのは「刻横」の時期である。「刻横」は道北部では刻文系の中でも新手に属していたが、モヨロ資料では古手の時期から存在する傾向が伺える。地域差の一つと判断できる。

b）口縁部施文位置・口縁部肥厚帯（第74図-表1・2・5～9）

口縁部施文位置については、沈線文（口縁部・胴部とも）が施文位置「面」とのみ結びつく（第70図-表1・7）こと以外には、はっきりした新旧の傾向が読みとれない。特に変則的なのは以下の2点である。まず、施文位置「面」で「縦長」器形となる例がやや多い（第70図-表6）。これは先述のように、「縦長」器形が新手の時期まで残ったことが原因であろう。次に施文位置「下縁」で貼細系の胴部文様（「貼短」・「貼細」）を持つ例（第70図-表7）がある。この背景には肥厚帯が消滅しかけた後に復活するという「型式変化の逆戻り」がある。

口縁部肥厚帯についても、口縁部施文位置と全く同様の傾向が認められる。すなわち、肥厚帯「有」は施文位置「下縁」と、肥厚帯「無」は施文位置「面」と同様の傾向となる。

c）器形（第74図-表3・6・8・10）

「縦長」が他の古手の属性、「横長」が他の新手の属性と結びつく傾向は一応認められるが、あまり明確ではない。先に述べたモヨロ資料の特殊性（「縦長」器形の残存）が原因であろう。

d）胴部文様要素

刻文系文様・貼太系文様は他の古手の属性と、沈線文系文様は新手の属性と結びつく傾向が強い。貼細系文様の傾向がはっきりしないように見えるのは、前述の「型式変化の逆戻り」現象と深く関連する。無文はどの時期にもまんべんなくみられるようである。

3）分類の手順

属性間の結びつきを分析した結果、基本的に古手の属性は別の古手と、新手の属性は別の新手と結びつく傾向があることは確認できた。前節で仮定した属性の序列が時期差であることはおおよそは認められるといえよう。しかしその一方で、道東部、特にモヨロ資料では道北部ほど属性間の結びつきが単純・単調ではないことも判明した。

このように属性間の結合が単調ではない場合、属性の組み合わせパターンは複雑となるので、道北部編年で試みたような組み合わせパターンに基づく型式設定は困難となる。サンプル数が少ないことも定量的な分析を難しくしているので、ここでは指標となるいくつかの属性を重視して分類するという、定性的な方法を用いることにする。

分類はモヨロⅠ～Ⅴ群と、各群の例外となる「その他」の計 6 種類とする。実際の分類手順を示したチャートが第 75 図である。分類の方法と根拠を手順に沿って解説する。

a) 口縁部文様要素

まず全体を口縁部文様要素に従って分類する。沈線文は新しい文様要素であり、かつ道北部系統の要素でもあるので他とは区別する。その沈線文系土器はモヨロⅤ群とし、胴部文様でさらに細別する（「貼細系」文様を含まないものを 1 類、含むものを 2 類)。口縁部無文の土器は編年の指標となる属性が乏しいので「その他」に分類して個別に検討する。「貼太系」文様（「貼瘤」・「貼太」）は例外的であるのでこれも「その他」に分類する。

b) 胴部文様

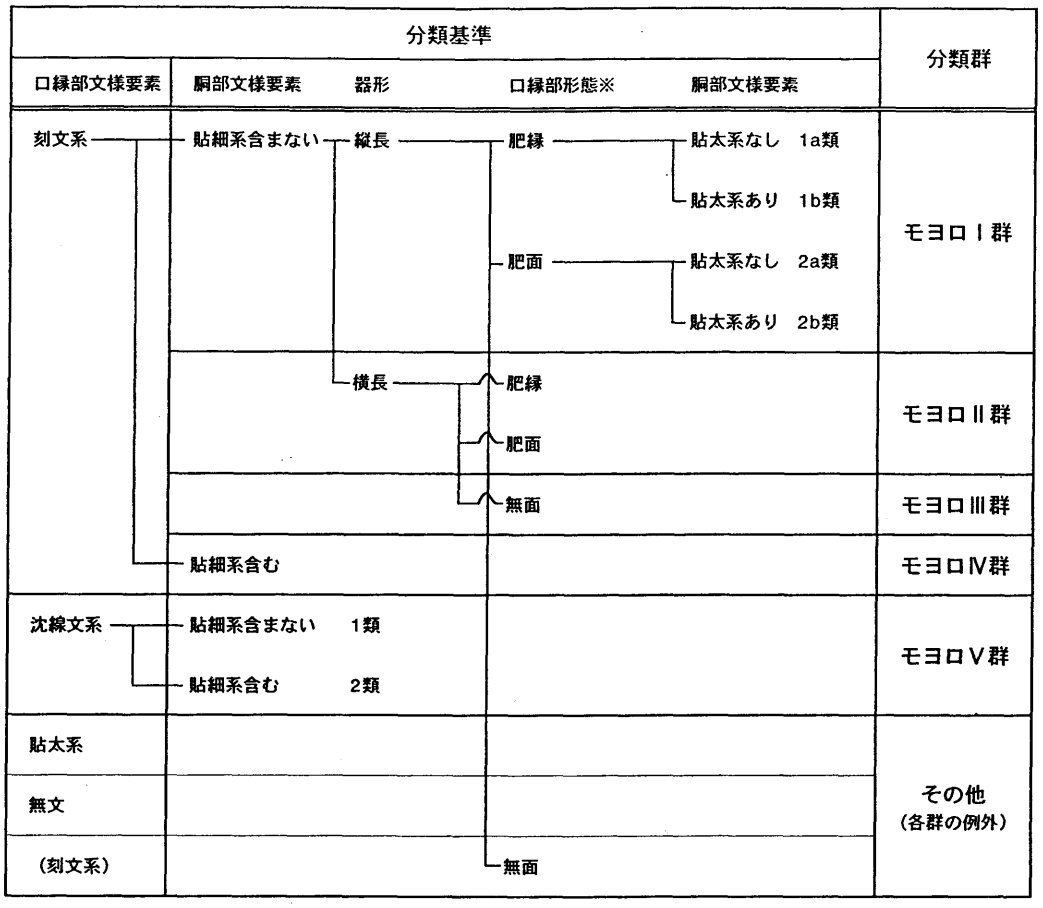
次に刻文系土器を細別する。胴部の「貼細系」文様（「貼短」・「貼細」）は明らかにその後の貼付文系文様に連続するものであり、新しい属性である。よって胴部に「貼細系」文様を持つ例を次に抜き出し、モヨロⅣ群とする。

c) 器形

刻文系土器の器形は「縦長」が相対的に古く、「横長」はやや遅れて出現することが判明しているので、先に両者を区分する。

d) 口縁部形態（肥厚帯の有無と口縁部施文位置をまとめたもの）

3) の区分をさらに肥厚帯の有無で細別する。肥厚帯は「有」が古く「無」が新しい。「縦長」器形では肥厚帯「有」の例をモヨロⅠ群とし、さらに口縁部施文位置で細別しておく（「下縁」が 1 類、「面」が 2 類)。「縦長」で肥厚帯がない土器は例外的であるので「その他」に含めておく。一方「横長」器形では肥厚帯「有」の土器はモヨロⅡ群、「無」の土器はモヨロⅢ群とする。



※「口縁部形態」は、口縁部肥厚帯と施文位置の二つの属性を以下のように一つにまとめたものである。

		口縁部施文位置		
		下縁	面	無
口縁部肥厚帯	有	肥縁	肥面	肥無
	無	―	無面	無無

第 75 図　モヨロ貝塚土器群分類チャート

e）胴部文様

モヨロⅠ群土器について、胴部文様要素で細別を行う。「貼太系」文様（「貼瘤・「貼太」）があるものがa類、ないものがb類である。

4）各分類群の内容

モヨロⅠ群～Ⅴ群までの各分類群の型式学的特徴について、土器図版を参照しながらまとめ、さらに道東部における類例(注8)についても確認しておこう。

a）モヨロⅠ群1a類（第76図～第77図）

口縁部の肥厚帯下縁に刻文系文様を有し、器形は「縦長」で口縁部に肥厚帯を有し、胴部文様が刻文または無文となる土器群。道北部の刻文Ⅰ群とほぼ同じ型式である。

類例は後述の羅臼町相泊遺跡（澤ほか 1971、涌坂編 1996）、羅臼町舟見町高台遺跡（本田ほか 1980）、標津町三本木遺跡（北構 1992、工藤 1992）のほか、斜里町ウトロ市街地（宇田川編 1981：第97図2）、斜里町ウトロ遺跡（大井 1984b：第9図1）、羅臼町松法川北岸遺跡（涌坂編 1984：第13図8）、国後島フルカマップ（五十嵐 1989：第8図89）、国後島ニキシロ（五十嵐 1989：第10図107）の例などがある。

b）モヨロⅠ群1b類（第78図）

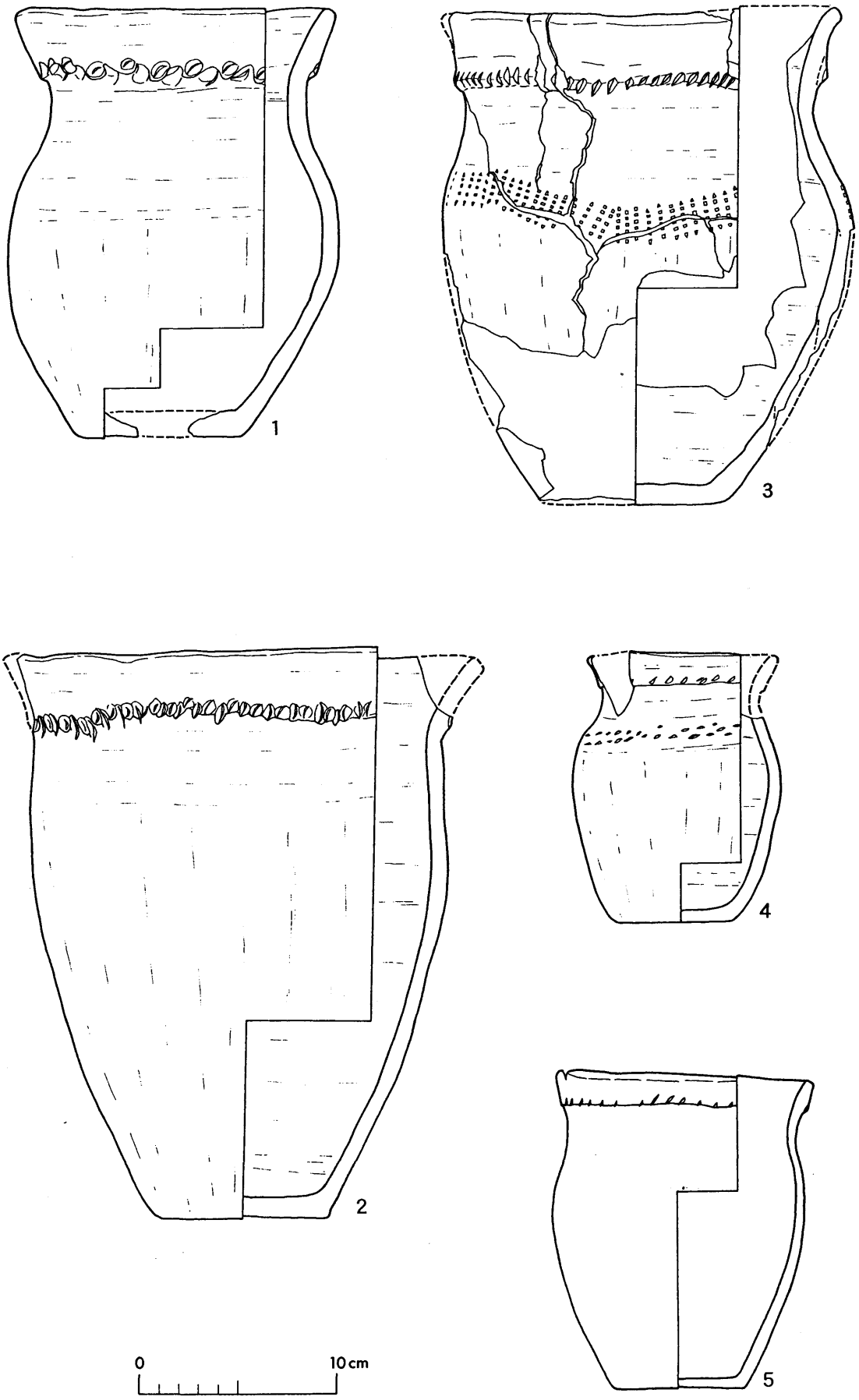
口縁部の文様要素と施文位置、器形はモヨロⅠ群 1a 類と同じであるが、胴部文様が「貼太系」となる土器群。この胴部「貼太系」文様は道北部には稀で、その点などは道北部刻文Ⅰ群とはやや異なる。なお第78図13には肥厚帯がないが、例外的なものとしてここに分類しておく。

類例は斜里町ウトロ神社山遺跡 7 号墓（石田ほか 1994：第 7 図）、羅臼町ハシコイ川左岸（大沼・本田 1970：第2図3）、国後島ニキシロ（五十嵐 1989：第10図108）などがある。

c）モヨロⅠ群2a類（第79図～第80図）

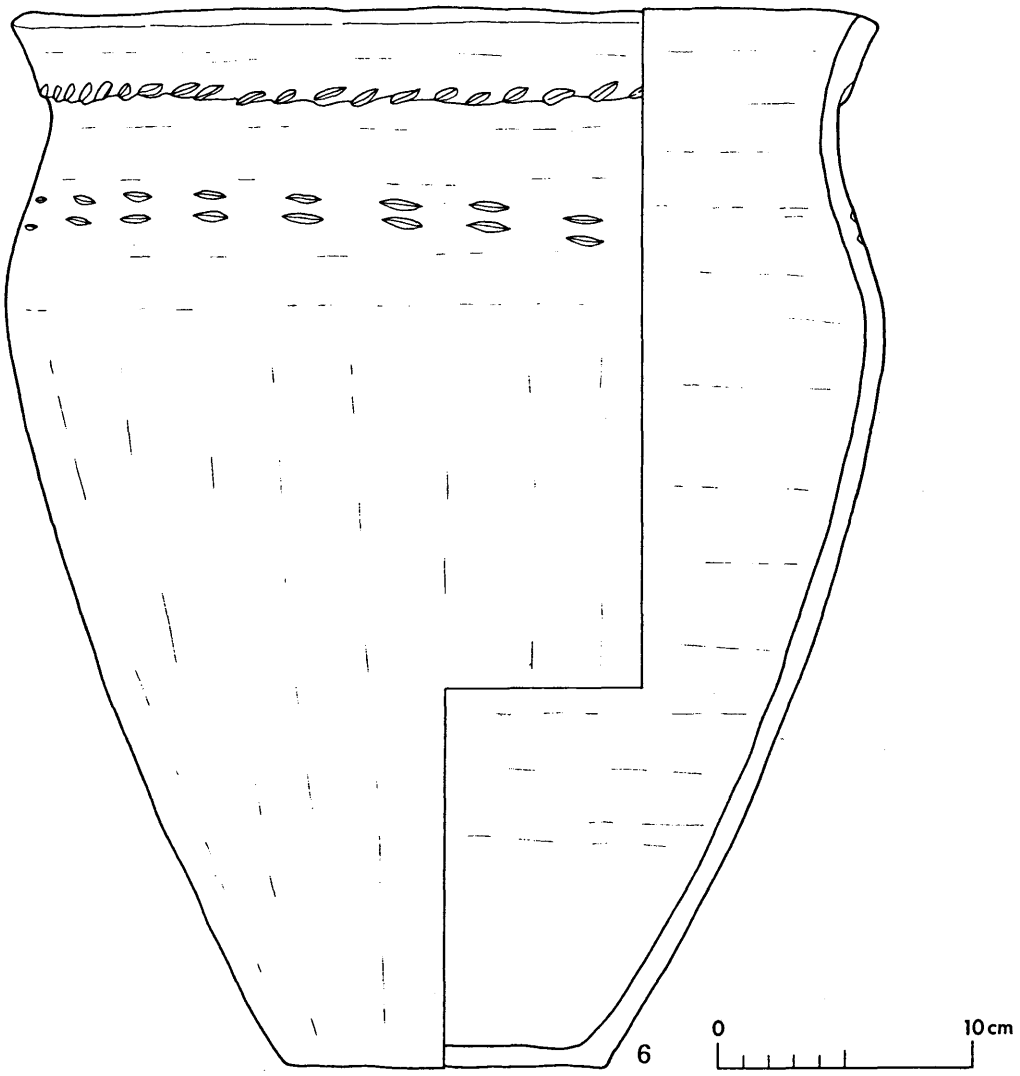
口縁部文様要素は刻文系文様であるが肥厚帯上には文様要素列が複数あり、その他の特徴はモヨロⅠ群 1a 類と同じ土器群。道北部の刻文Ⅱ群に対比できるが、刻文Ⅱ群よりも口縁部肥厚帯の幅が狭い傾向にある。さらに器形が「縦長」に限定されている点も刻文Ⅱ群とは異なる。

類例には斜里町ウトロ市街地上層（宇田川編 1981：第97図1）、国後島ニキシロ（五十嵐 1989：第10図103）の例などがある。北千島占守島片岡（五十嵐 1989：第6図65）もこの群に含めてよいであろう。



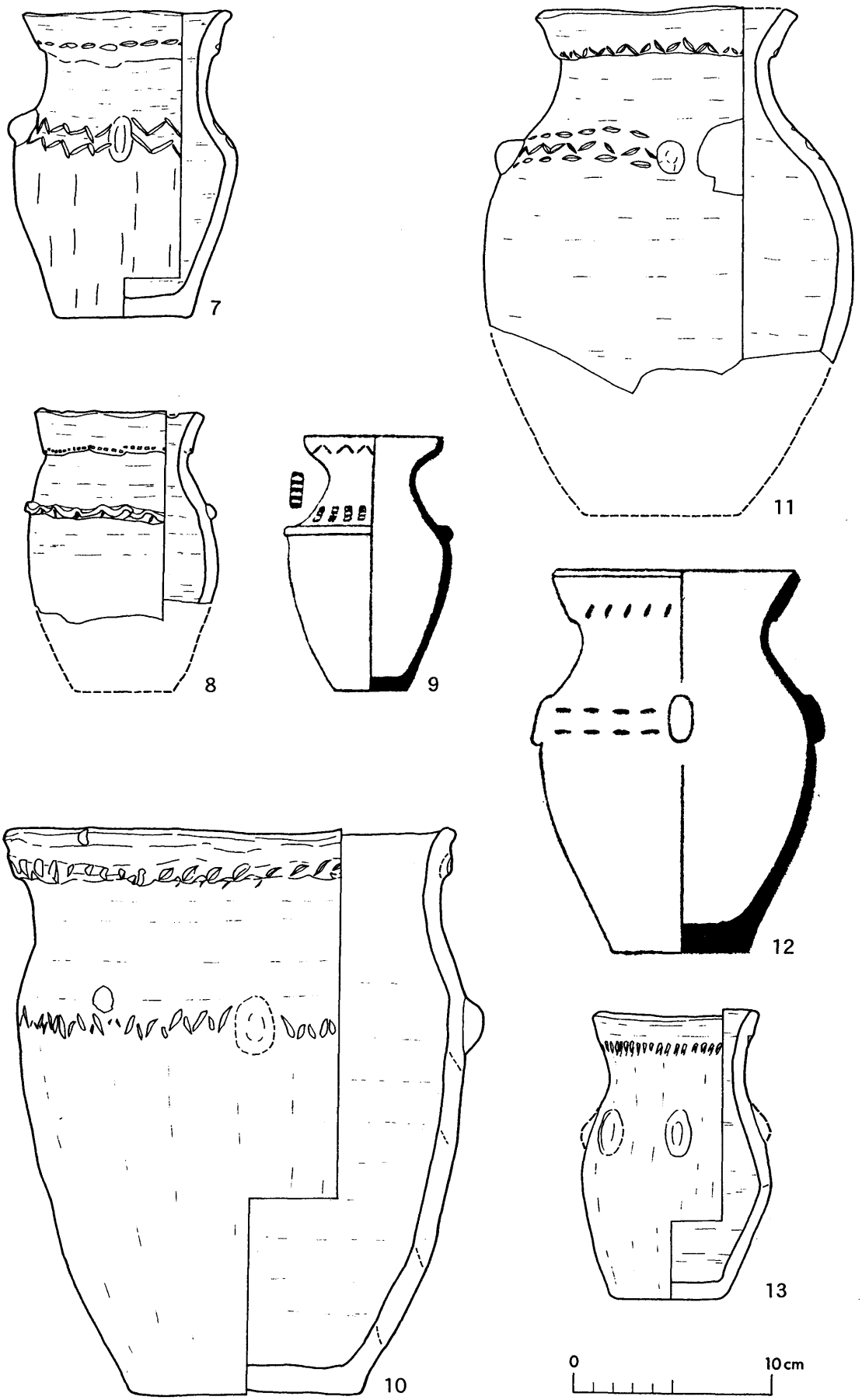
第76図　モヨロⅠ群1a類土器（1）

1・2・4：函館市北方民族資料館蔵　3：北海道立北方民族博物館蔵　5：網走市教育委員会蔵



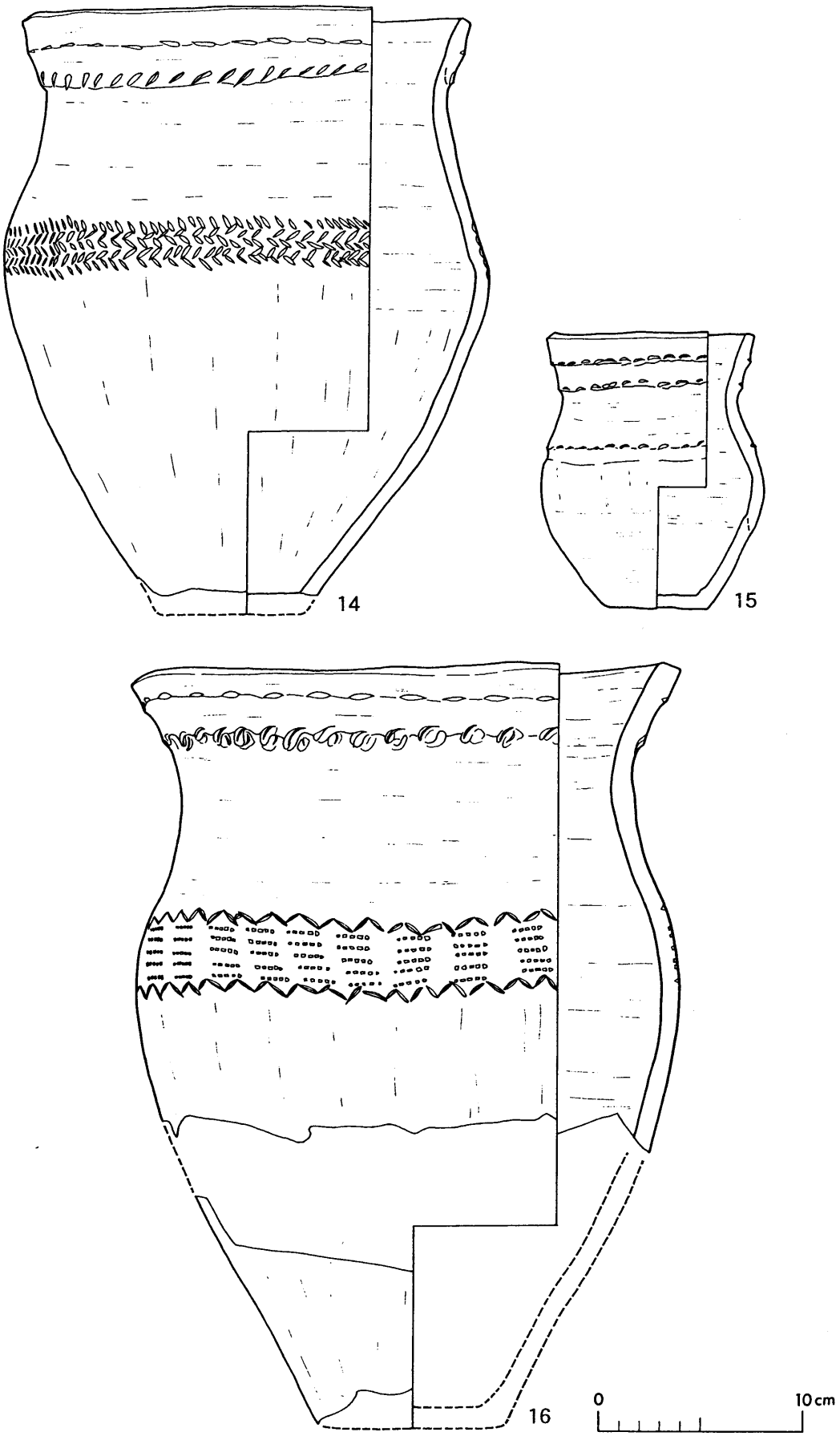
第77図　モヨロⅠ群1a類土器（2）

6：北海道立北方民族博物館蔵



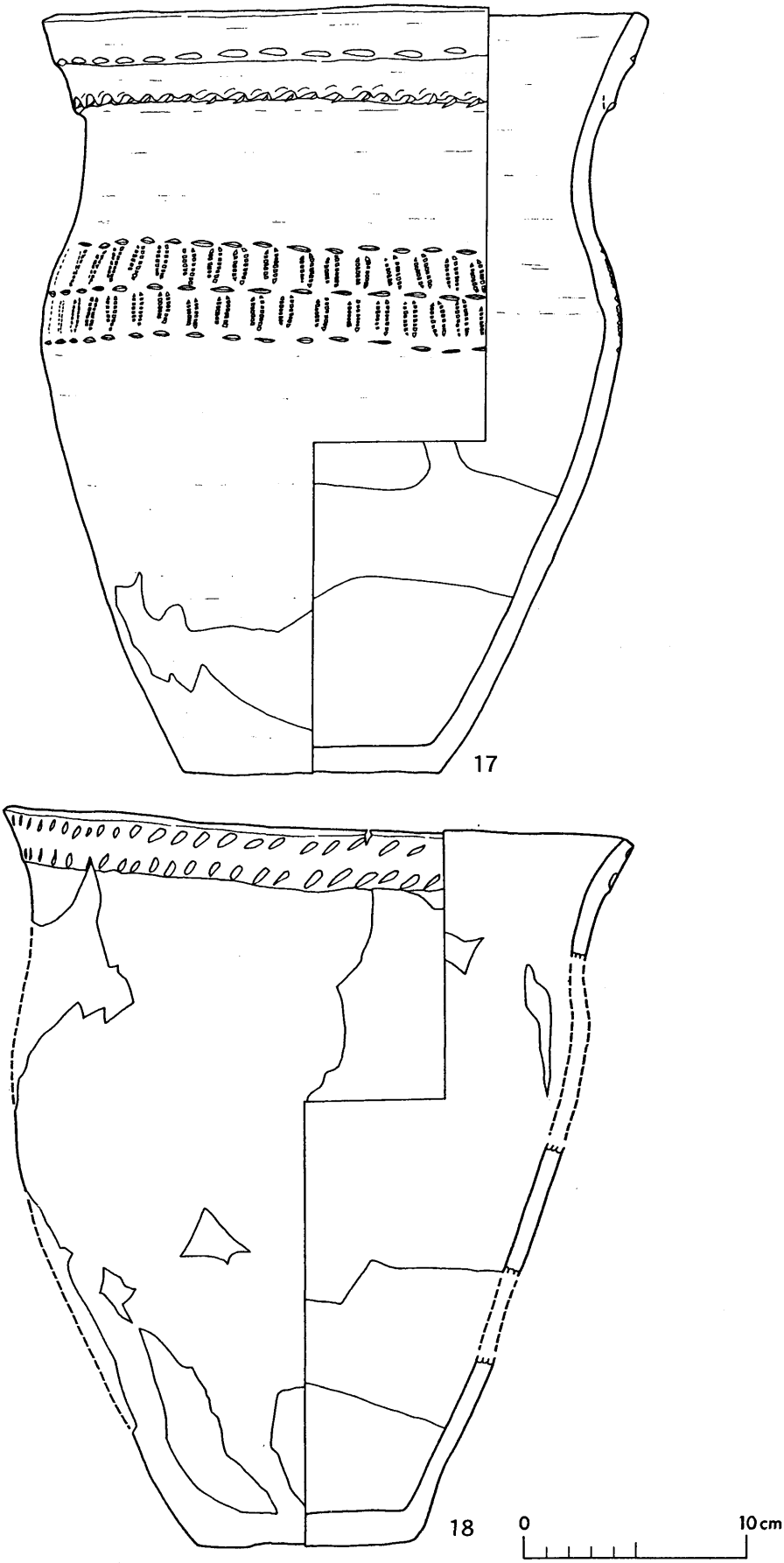
第78図　モヨロⅠ群1b類土器

7～9・11～13：函館市北方民族資料館蔵　10：北海道立北方民族博物館蔵



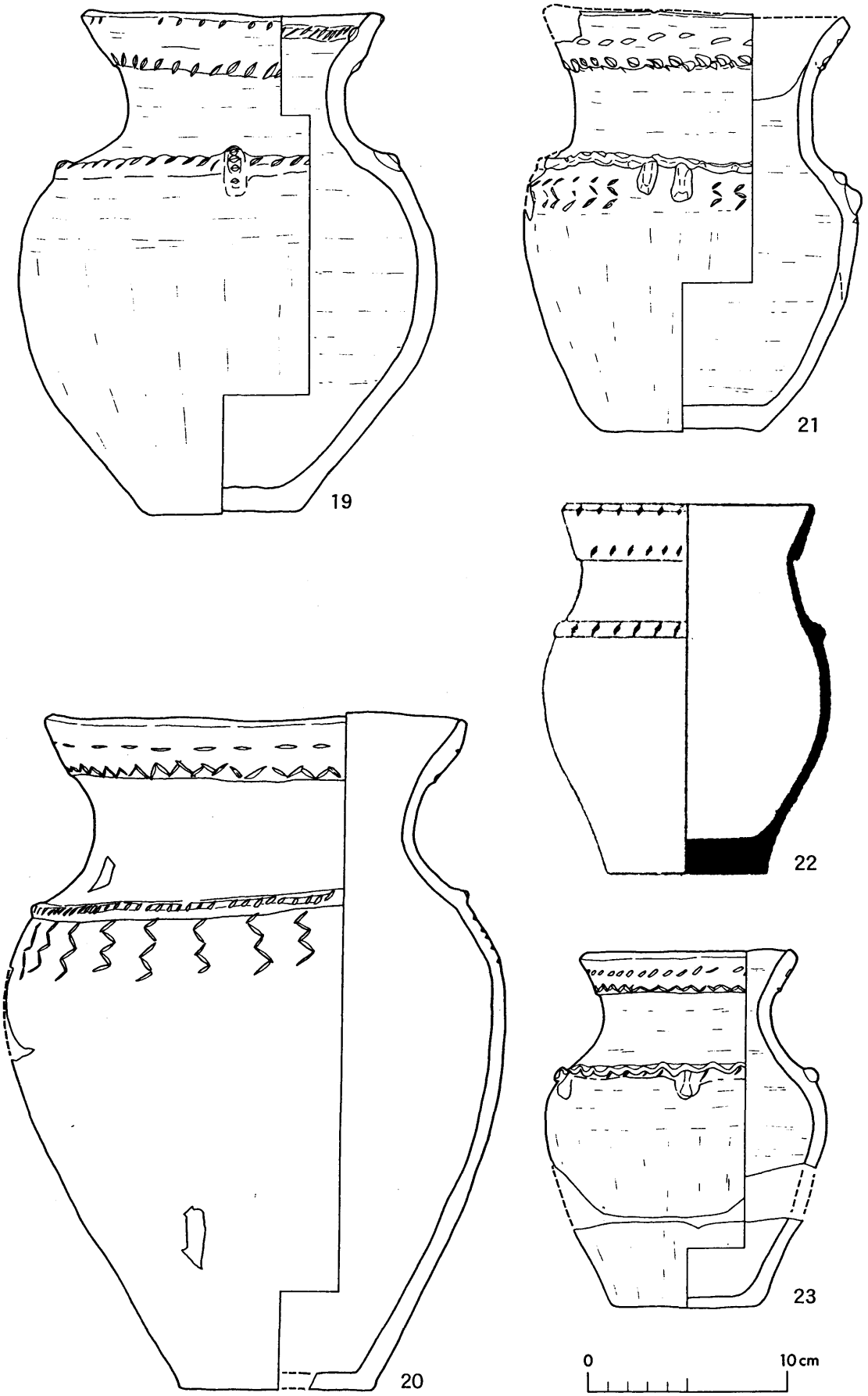
第79図　モヨロⅠ群2a類土器（1）

14・16：函館市北方民族資料館蔵　15：北海道立北方民族博物館蔵



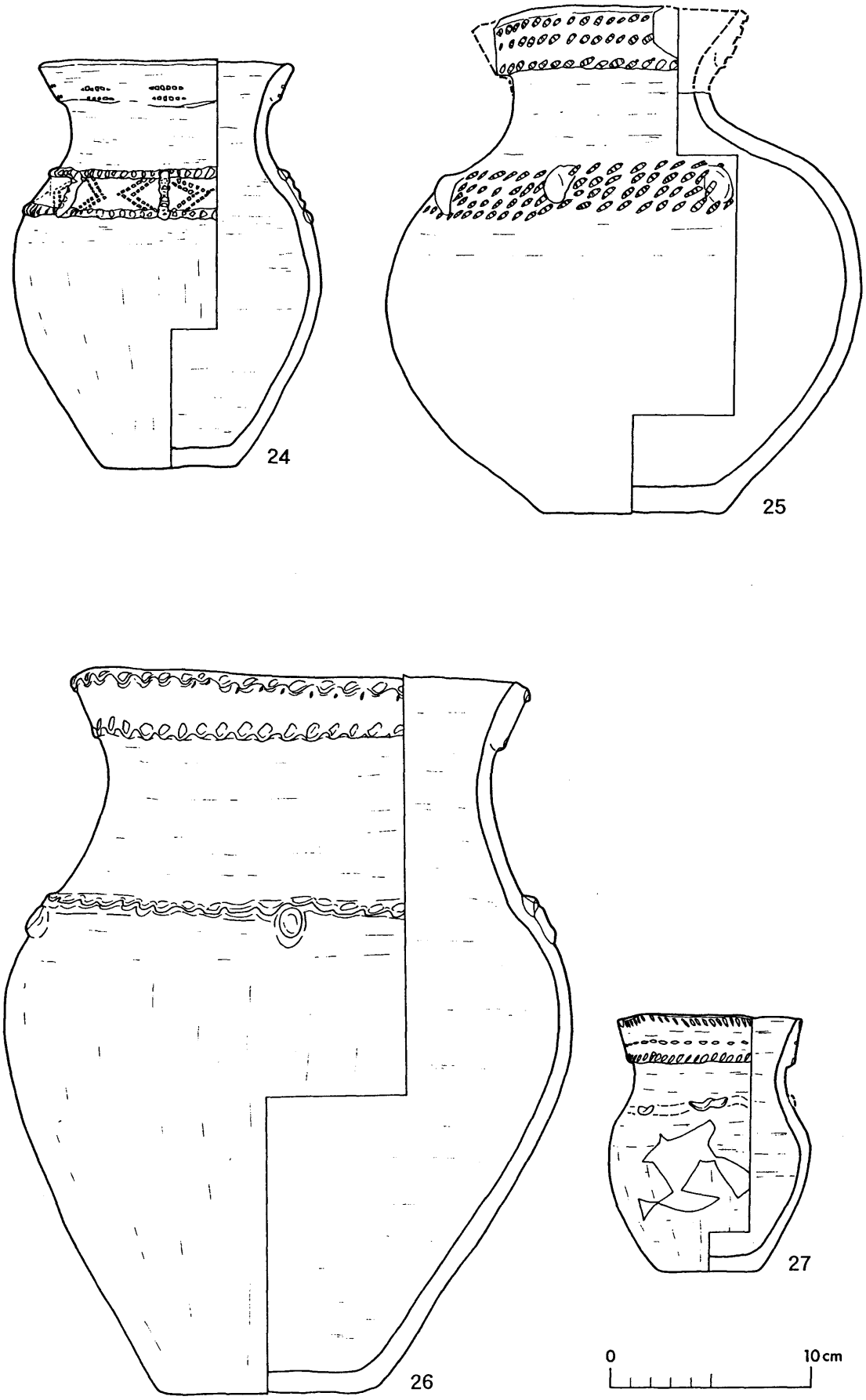
第80図　モヨロⅠ群2a類土器（2）

17：北海道立北方民族博物館蔵　18：網走市教育委員会蔵



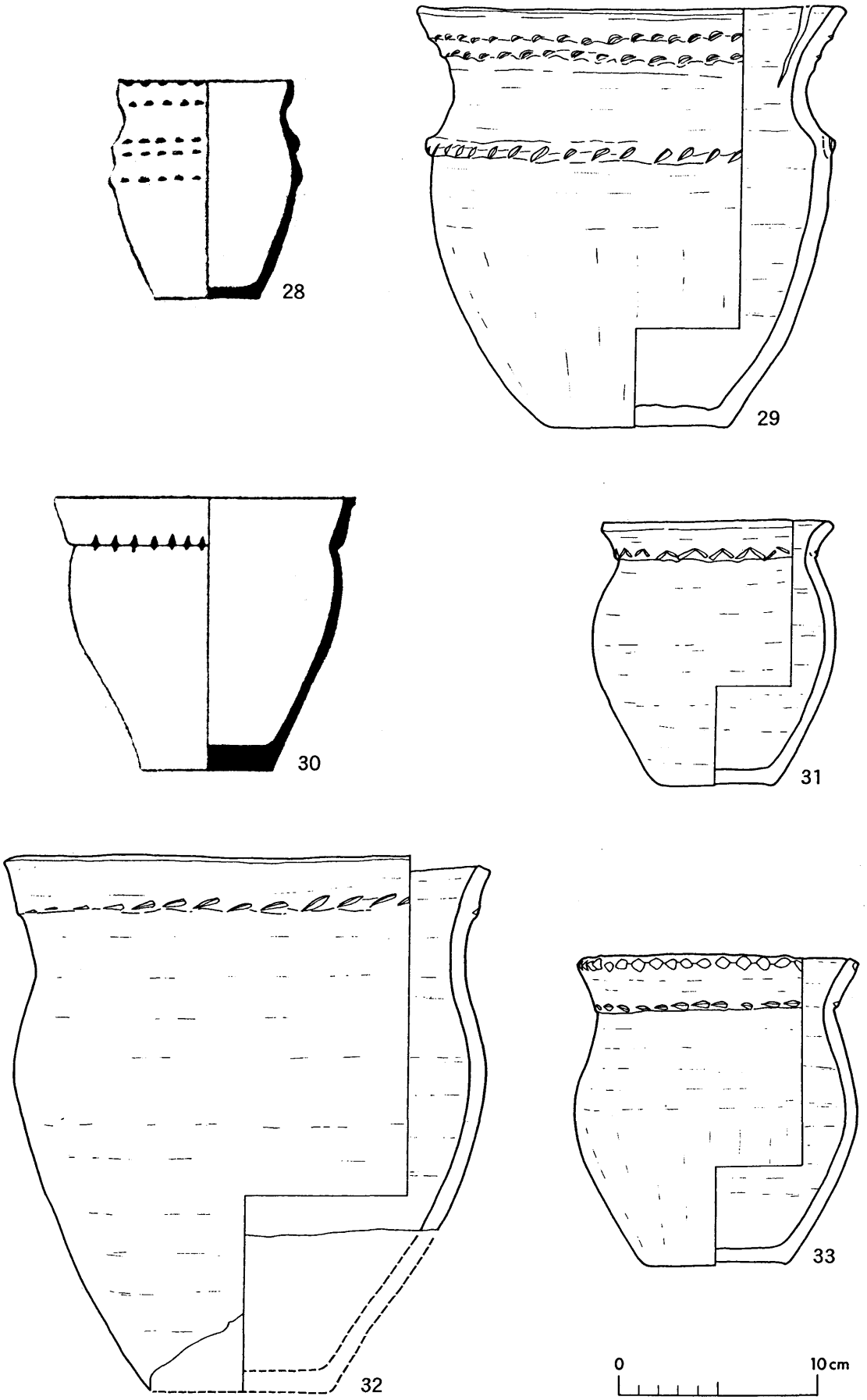
第81図　モヨロⅠ群2b類土器（1）

19・22・23：函館市北方民族資料館蔵　20：網走市教育委員会蔵　21：北海道立北方民族博物館蔵



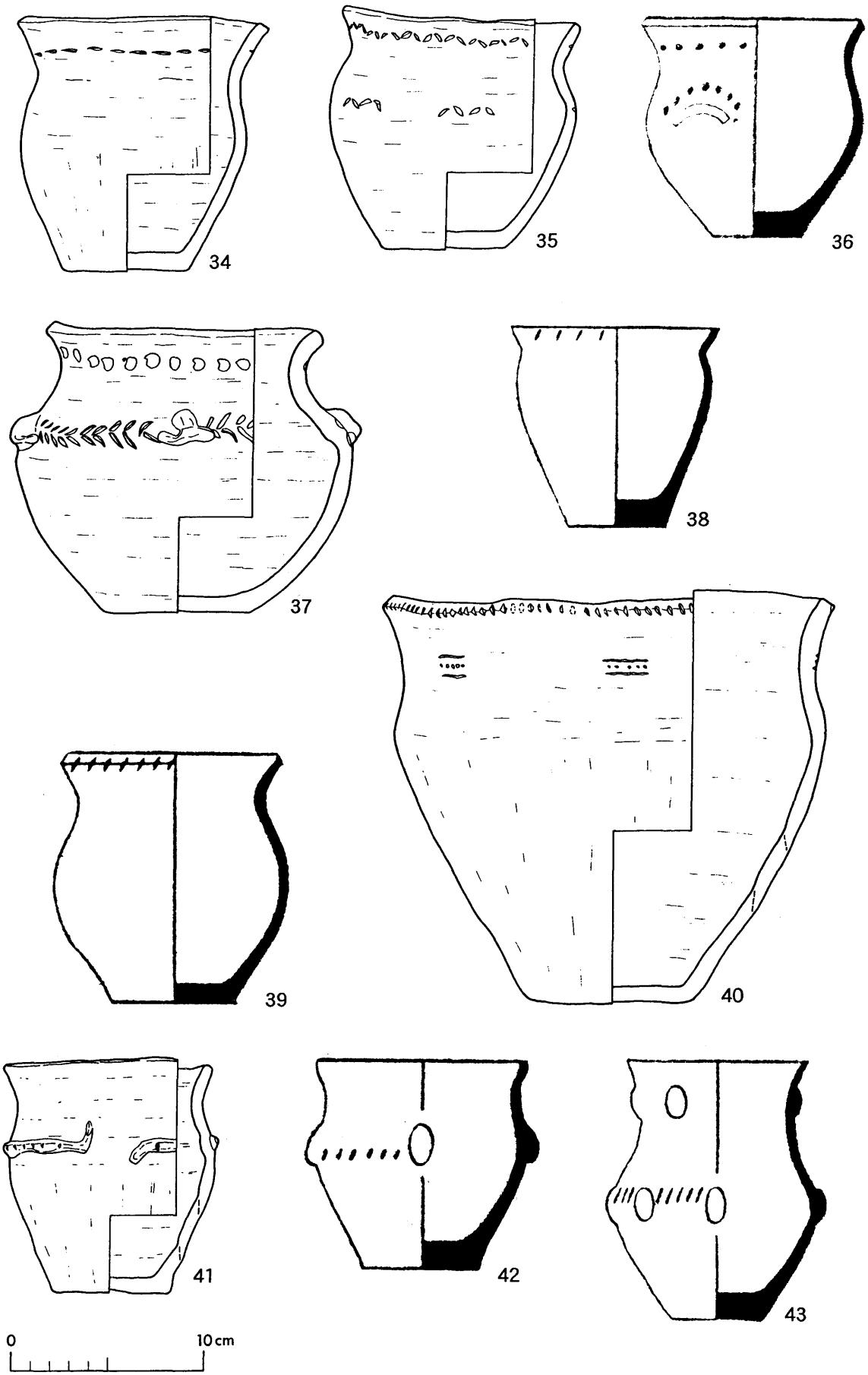
第82図　モヨロⅠ群2b類土器（2）

24・26：北海道立北方民族博物館蔵　25・27：函館市北方民族資料館蔵



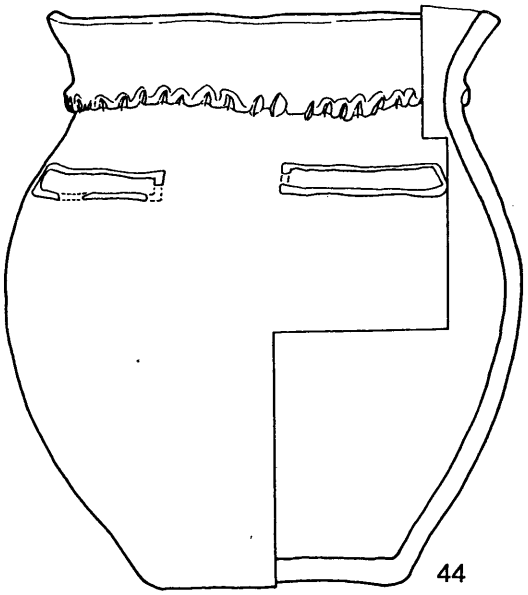
第83図　モヨロⅡ群土器

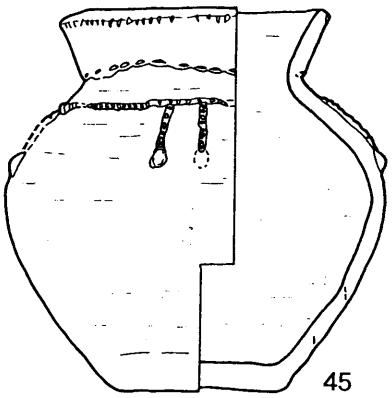
28～33：函館市北方民族資料館蔵

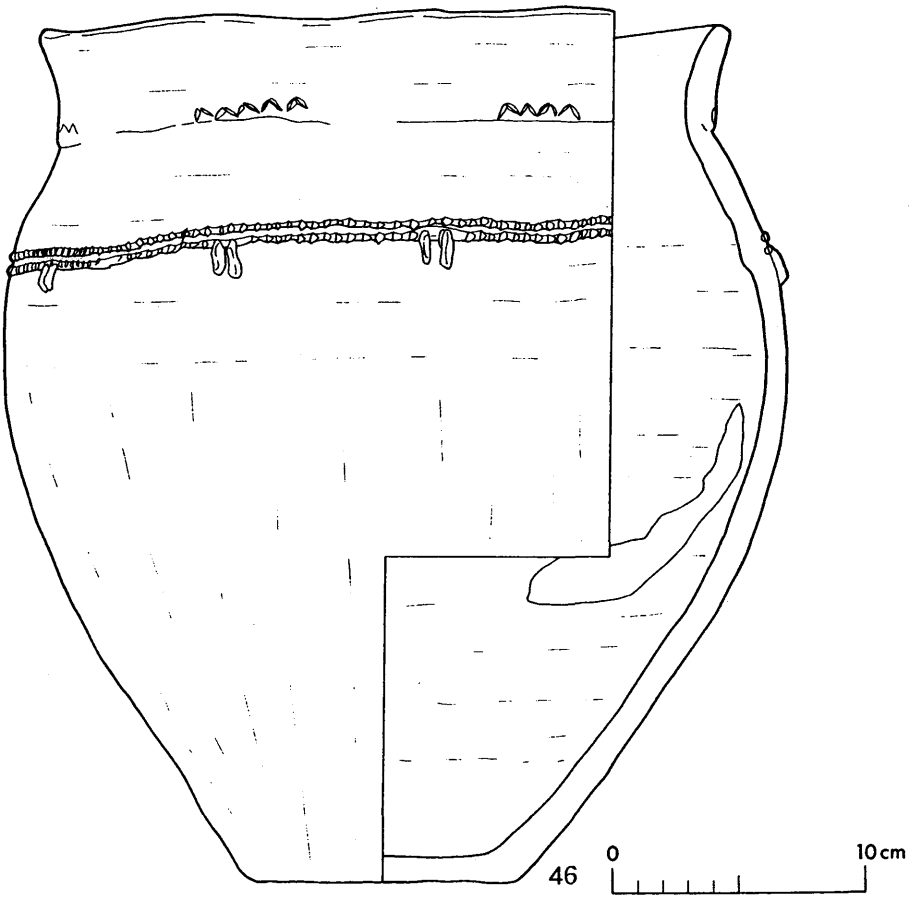


第84図　モヨロⅢ群土器

34～39・42・43：函館市北方民族資料館蔵　40・41：北海道立北方民族博物館蔵

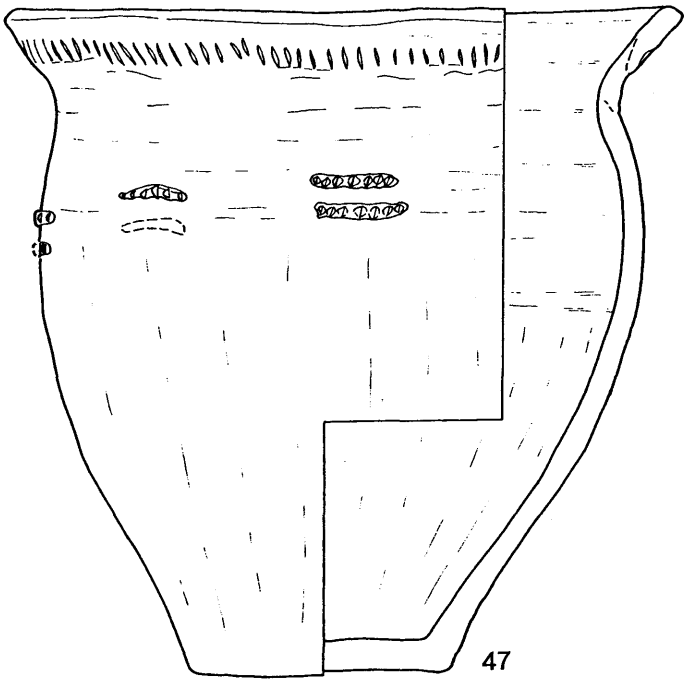


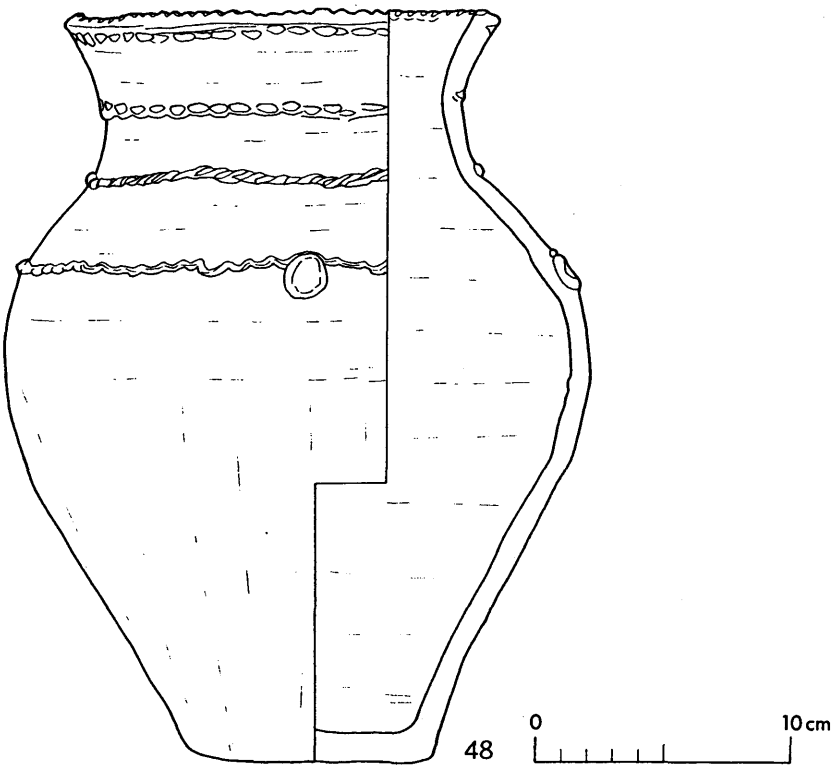




第85図　モヨロⅣ群土器（1）

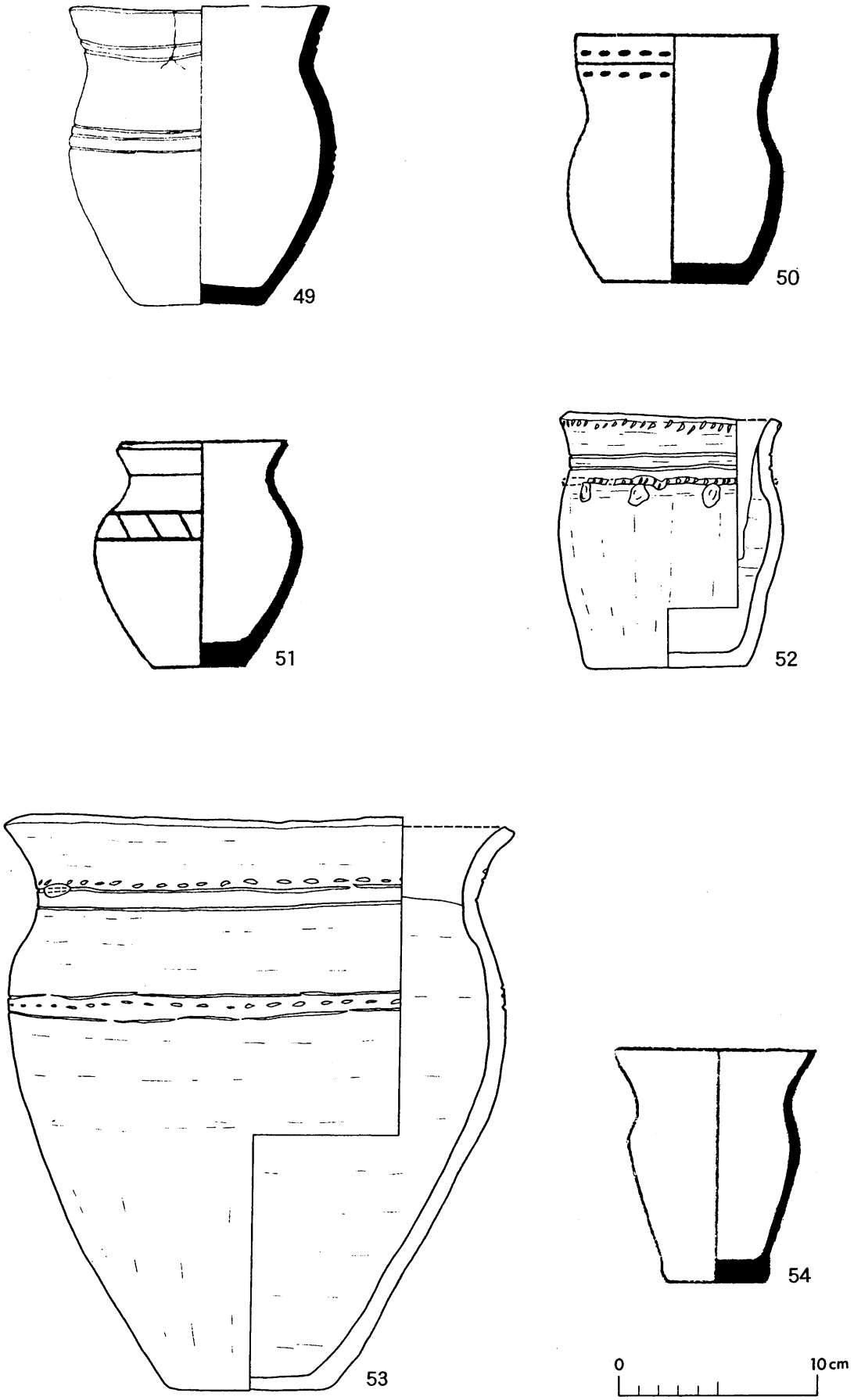
44：網走市教育委員会蔵　45・46：北海道立北方民族博物館蔵





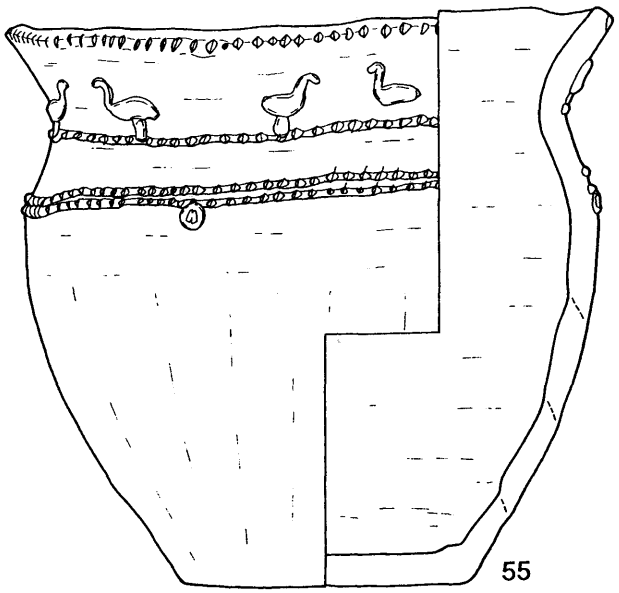
第86図　モヨロⅣ群土器（2）

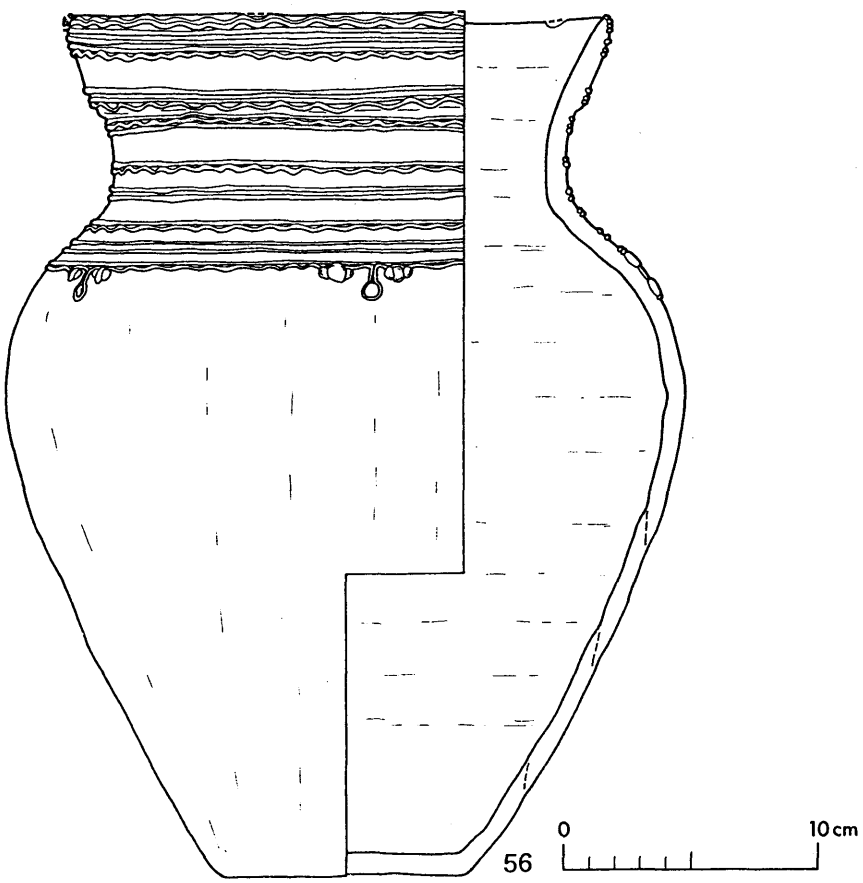
47：函館市北方民族資料館蔵　48：北海道立北方民族博物館蔵



第87図　モヨロV群1類（49～51・53・54）・V群2類土器（52）

49：東京大学文学部蔵　50～52・54：函館市北方民族資料館蔵　53：北海道立北方民族博物館蔵





第88図　参考図版　モヨロ貝塚出土の貼付文系土器

55・56：北海道立北方民族博物館蔵

d) モヨロⅠ群 2b 類（第 81 図～第 82 図）

口縁部の文様要素と施文位置、器形はモヨロⅠ群 2a 類と同じであるが、胴部文様が「貼太系」となる土器群。類例は斜里町ウトロ市街地（宇田川編 1981：第 98 図 1)、斜里町知床岬遺跡（大井 1984b：第 4 図 1)、羅臼町松法川島氏宅（大沼・本田 1970：第 2 図 8)、後述の相泊遺跡などの例がある。

e) モヨロⅡ群土器（第 83 図）

口縁部に刻文系文様を有し、器形は「横長」で肥厚帯を有する土器群。このⅡ群の中には、第 83 図-28・29・32 のように器形以外はⅠ群とほぼ同じ特徴を持つものから、第 83 図-31・33 のように肥厚帯以外は次のⅢ群に近いような特徴を持つものまでが含まれている。まさにⅠ群とⅢ群の中間的様相を呈する土器群としてグルーピングした。道北部の刻文Ⅱ群に対比できる要素もあるが、全体としては差が目立つ。

常呂町トコロチャシ跡遺跡の例（右代 1990：第 2 図 4）は一応Ⅱ群に分類されるが、器形や肥厚帯の特徴、胴部文様帯の位置などは次のⅢ群に近い。常呂町栄浦第二遺跡動物骨集積Ⅰの例（武田編 1995：第 84 図 3・4）も同様である。

f) モヨロⅢ群土器（第 84 図）

口縁部に刻文系文様を有し、器形は「横長」で肥厚帯を持たない土器群。口唇部にのみ文様を持つ例もここに含む。このⅢ群は肥厚帯を持たないという点でⅤ群と近い。文様帯についても確認しておこう。モヨロⅠ群・Ⅱ群は口縁部文様帯と胴部文様帯が分離するのを基本とするが、モヨロⅢ群では頚部にも施文する例があらわれる（第 84 図-40)。Ⅳ群以下につながる新しい要素といえよう。なお第 84 図-41～42 は口縁部無文、43 は器形が「縦長」で口縁部に「貼太系」文様を持つが、例外的なものとしてここに含める。41 の胴部文様はアムール下流域との関連を伺わせるものである。

Ⅲ群土器の類例には常呂町栄浦第二遺跡 4 号竪穴床面（藤本編 1972：Fig.184-5)・同 8 号竪穴埋土（同：Fig.220-1)・同 9 号竪穴下層オホーツク面（本章第 94 図 1。詳細は後述)・同遺跡発掘区（武田編 1995：第 223 図 3・4・5)、斜里町ウトロ神社山遺跡 1 号墓（高橋（理）1993：Fig.8）などの例がある。

g) モヨロⅣ群土器（第 85 図～第 86 図）

口縁部に刻文系文様を有し、胴部に「貼細系」文様を文様を持つ土器群。口縁部に肥厚帯を有し、器形が「横長」となる例が多い。藤本編年 c 群土器の典型例(注 9)に相当する。胴部文様帯を上方に移動させたり、胴部文様帯の位置はそのままで頚部に文様を充填したりして、口縁部と胴部の文様帯を一帯化させる例が目立ってくる。なお第 86 図-47 は肥厚帯が無い点で、48 は器形が「縦長」となる点でやや特異である。

類例には斜里町ウトロ遺跡（大井 1984b：第9図 19）、羅臼町トビニタイ入口（大沼・本田 1970：第2図 1）などの例がある。

h）モヨロV群1類土器（第87図 49～51・53・54）

口縁部に沈線文系文様を有する土器。口縁部に肥厚帯を持たないのを基本とする。器形は「縦長」・「横長」の両方がみられるが、頚部のくびれが少ない例が多いようである。文様帯は、口縁部・頚部が分離する例が多い。第 87 図 54 は無文の土器であるが器形が道北部の沈線文群に近いため、ここに含めた。

なお、モヨロV群と道北部沈線文群とは、後述するように器形や文様要素、文様帯などの点で若干の地域差が認められる。

類例には常呂町栄浦第二遺跡 9 号竪穴下層オホーツク面（藤本編 1972、本章第 94 図 2・3。詳細は後述）・栄浦第二遺跡 37 号竪穴（武田編 1995：第 109 図 22）・同遺跡 Pit88 埋土（同：第 139 図 3）・同遺跡 49 号竪穴 B 面（同：第 170 図 1）・同遺跡採集（右代 1990：第 4 図 5・7）、根室市弁天島（西本編 2003：第 16 図 15）、択捉島単冠湾（五十嵐 1989：第 11 図 120）などの例がある。

i）モヨロV群2類土器（第87図 52）

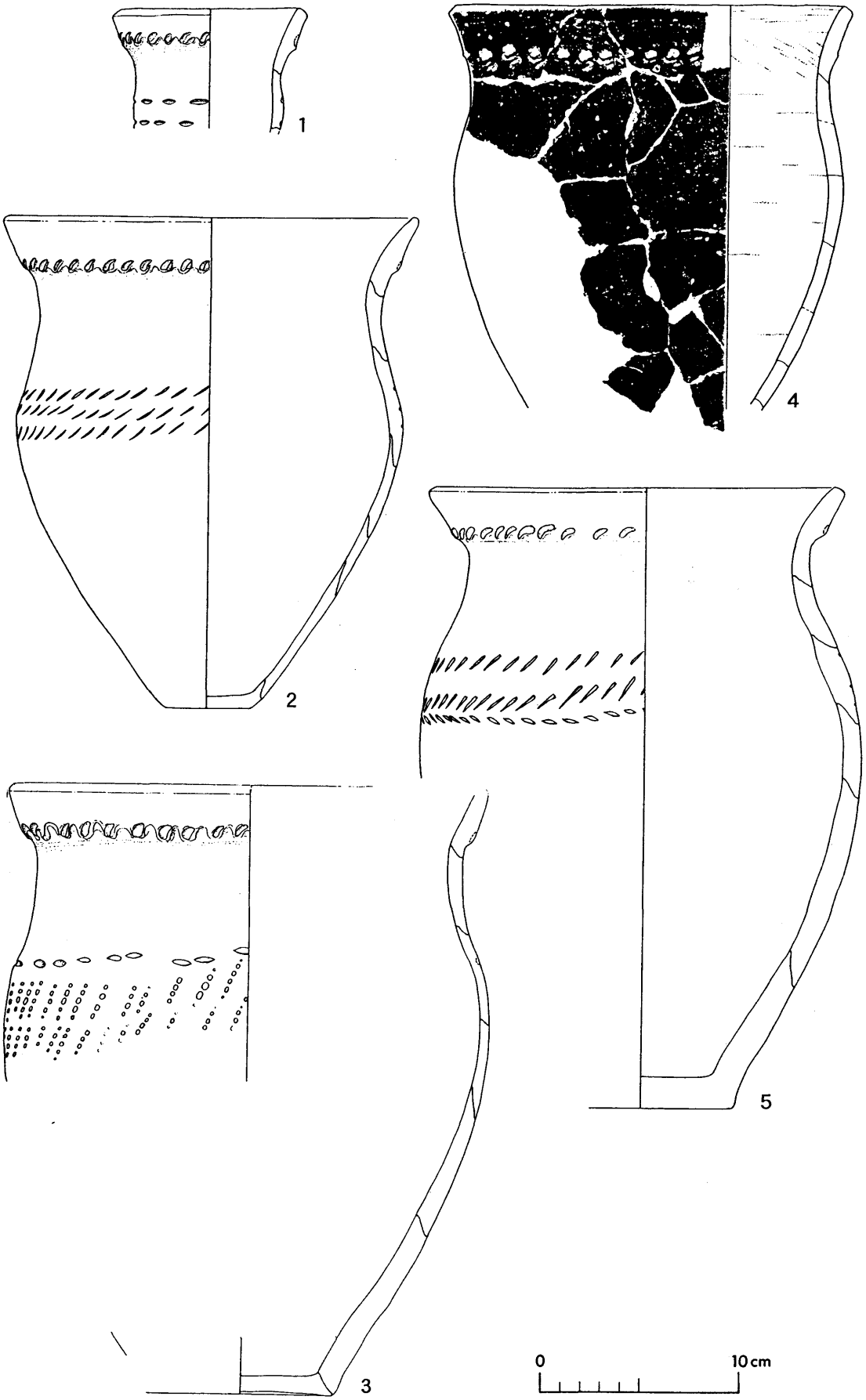
第 87 図 52 の土器は頚部に「貼細系」文様が施されている。口縁部と頚部の文様帯が一帯化している点でもモヨロⅣ群に近いといえる。

類例には栄浦第二遺跡 Pit29 埋土（武田編 1995：第 56 図 2）、羅臼町トビニタイ入口（大沼・本田 1970：第2図 2）などの例がある。

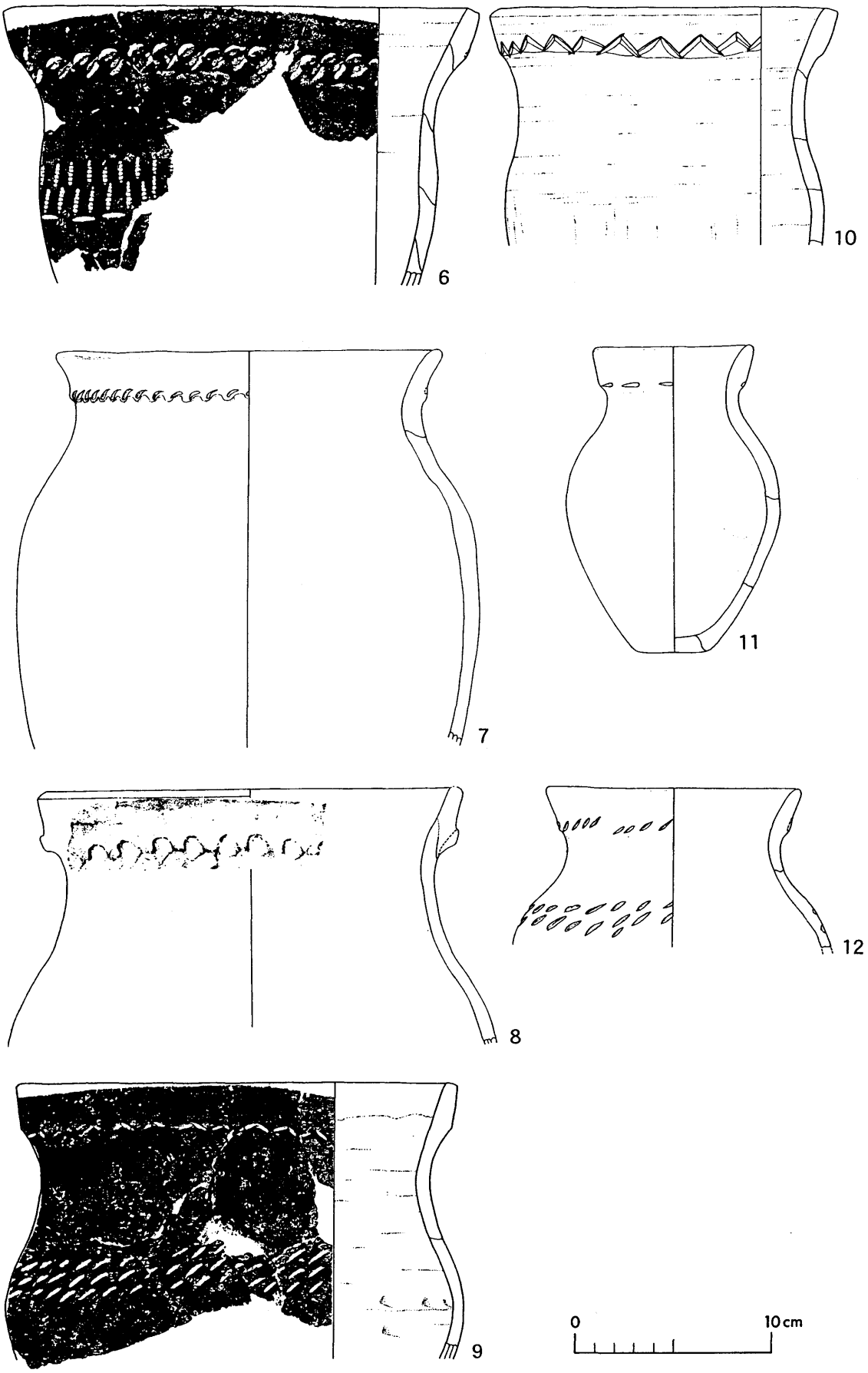
4.　道東部の編年

1）編年の基点となる出土例

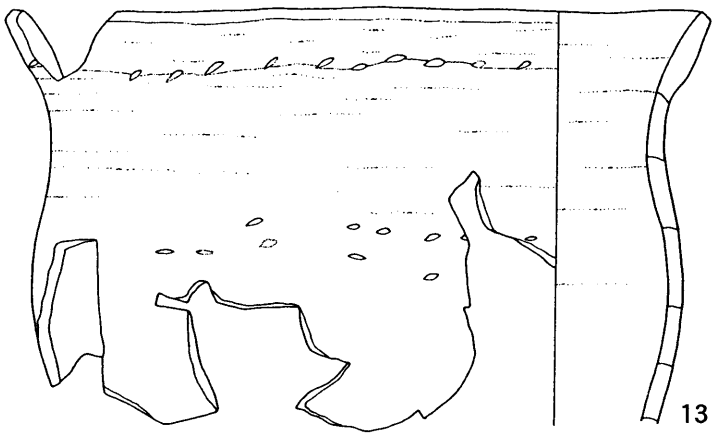
前節で型式分類したモヨロ分類群の編年を行う前に、他の遺跡での出土例について確認し編年の手がかりとしよう。道東部では貼付文期以前に相当する資料が比較的少ないことはすでに述べたが、中には時期的・型式的・出土状況的に狭い範囲に収まるような、まとまった出土例もいくつかある。これらの出土例をモヨロ分類群編年のための基点とすべく、内容を再確認する。

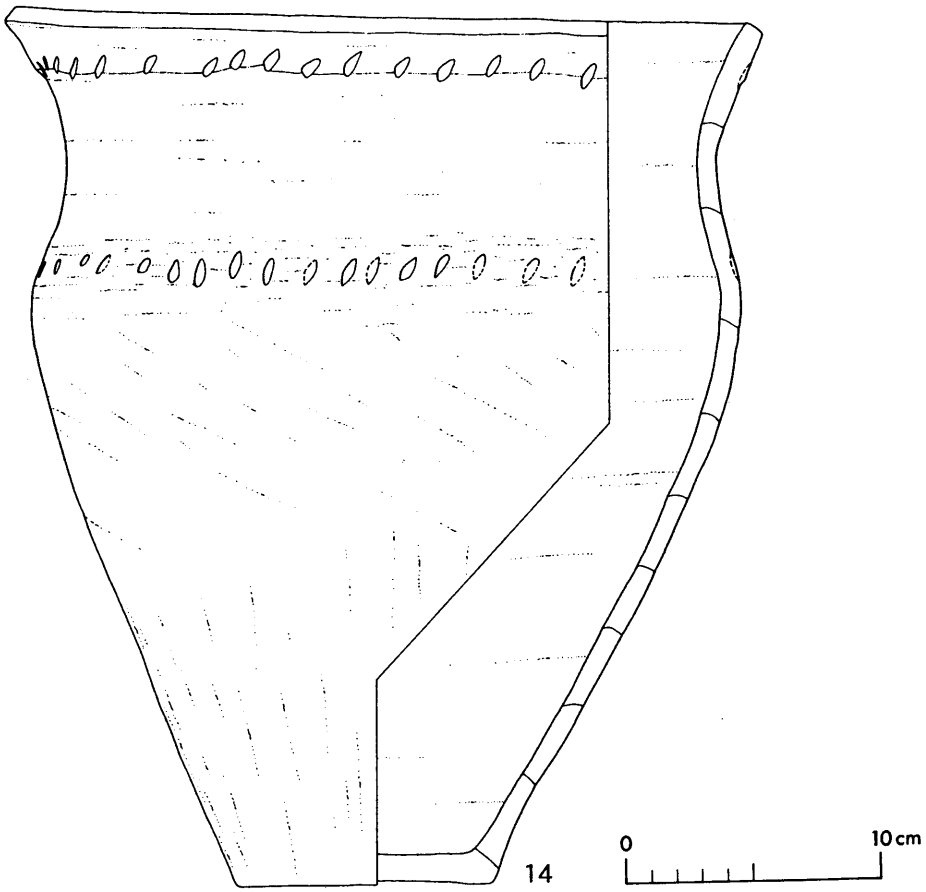


第89図　相泊遺跡出土土器群（1）

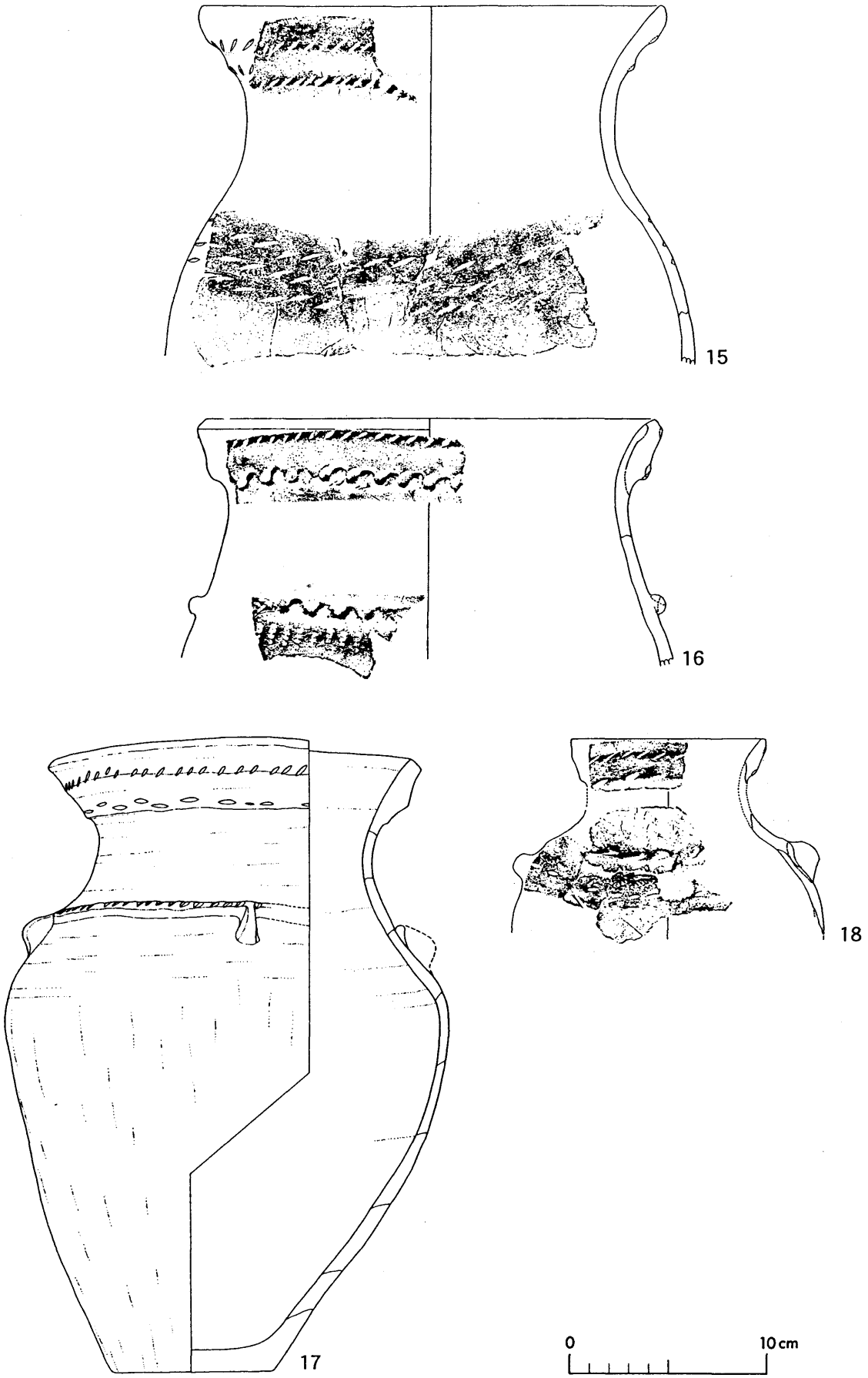


第 90 図　相泊遺跡出土土器群（2）





第 91 図　相泊遺跡出土土器群（3）



第 92 図　相泊遺跡出土土器群（4）

a）羅臼町相泊遺跡（第 89 図～第 92 図）

本遺跡では 1970 年と 1994 年の 2 回、合計 4 地点(注 10)で発掘調査が行われている（澤ほか 1971、涌坂編 1996）。オホーツク文化期の遺構については貼付文期の竪穴住居址 1 軒・刻文期の墓 2 基が検出され、土器は発掘区全体からモヨロⅠ群の土器が、竪穴周辺を中心に貼付文期の土器が出土している。土器型式の内容をみるとモヨロⅠ群の土器が多く、貼付文期の土器は少ない。また、沈線文期併行となる土器は全く出土しておらず、この時期に遺跡は一旦断絶したようである。

本遺跡で注目すべきは刻文期の土器群の内容である。以下にまとめてみる。

ⅰ）器形

土器全体の器形が推測できる完形・半完形資料は 20 個体程度であるが、それらは全てモヨロ分類では「縦長」の器形に属するとみられる。また口縁部には全て肥厚帯が認められる。

ⅱ）文様

口縁部文様が判明した 135 個体について、口縁部の文様要素と施文位置をクロス集計したのが第 93 図である。施文位置は口縁部肥厚帯の「下縁」が全体の 7 割強を占め、文様要素では 2 指による爪形文（「爪 2」）と斜めの刻文（「刻斜」）で全体の 8 割程度を占めている。

胴部文様については、確認できる例では刻文系の文様が大半である。太い貼付文や貼瘤文などの「貼太系」文様はきわめて少数であり、報告された全資料中ではわずかに 3 例が確認されるのみである。

相泊遺跡資料は破片資料が大半であり器形のデータが少ないので、モヨロ分類群との厳密な対比は困難である。しかし完形土器の例から推測すると「横長」器形が含まれる可能性はきわめて低いとみられる。また、「貼太系」の胴部文様がごく稀であることは確実である。以上の推測が正しいとすると、相泊遺跡資料は過半数がモヨロⅠ群 1a 類に、次いで少量がⅠ群 2a 類に、さらに若干数がⅠ群 2b 類に分類されることになる(注 11)。

筆者はこの相泊遺跡資料をモヨロⅠ群 1a 類のまとまりを示す例として捉えたい。そして本例を根拠として、モヨロⅠ群 1a 類とⅠ群 1b 類以下との間に時期差を設定する。すなわち、口縁部施文位置「面」や胴部の「貼太系」文様の出現は時間的に新しいと考えるのである。道北部との対比で検証すると、施文位置「下縁」／「面」の時期差は道北部の編年（刻文Ⅰ群→Ⅱ群）で確認されており、道東部でも適用可能であろう。問題は胴部「貼太系」文様の出現時期に関してであるが、これは道北部では例数の少ない文様であり判断が難しい。しかし本遺跡例が「貼太系」文様をほとんど含まないまとまりであることは注意されよう。

		口縁部施文位置			計
		下縁	面	無	
口縁部文様要素	爪2	58	5		63
	刻ハ	4			4
	刻斜	33	4		37
	爪1				0
	型				0
	刻刺		2		2
	刻横	5	13		18
	無			11	11
計		100	24	11	135

第93図　相泊遺跡出土土器群の属性クロス集計表

相泊遺跡例を根拠としてⅠ群 1a 類とⅠ群 1b 類以下との間に時期差が設定できる、という筆者の見解については異論が出るかもしれない。しかし相泊遺跡例＝モヨロⅠ群 1a 類を主体とするまとまりが道東部刻文期の最古段階のすがたを示していることは、道北部の刻文Ⅰ群土器との対比からいっても、相泊出土資料がモヨロⅡ群～Ⅴ群土器を全く含まないことからみても、確実であると筆者は考える。

相泊遺跡のほかに、道東部でモヨロⅠ群 1a 類土器がある程度まとまって、しかも続く時期とは連続せずに出土した遺跡としては、羅臼町舟見町高台遺跡（本田ほか 1980）、標津町三本木遺跡（北構 1992・工藤 1992）の例がある。両遺跡とも出土量が少なく確定的なことはいえないが、相泊遺跡例と矛盾するような型式学的特徴や出土傾向は認められていない。

b）常呂町栄浦第二遺跡 9 号竪穴オホーツク下層遺構（第 94 図）

本遺構は東京大学によって 1967 年度に調査が行われた（藤本編 1972）。9 号竪穴は 3 層に重なる遺構から成り立っている。すなわち最下層には続縄文文化の竪穴住居址があり、その窪みのなかに、それぞれオホーツク下層遺構、オホーツク上層遺構と命名された遺構面が重なって存在していた。これら下層・上層遺構の性格については、前者は竪穴の窪みを利用した人為的な活動の面、後者は竪穴住居址に近い性格の遺構とされている。

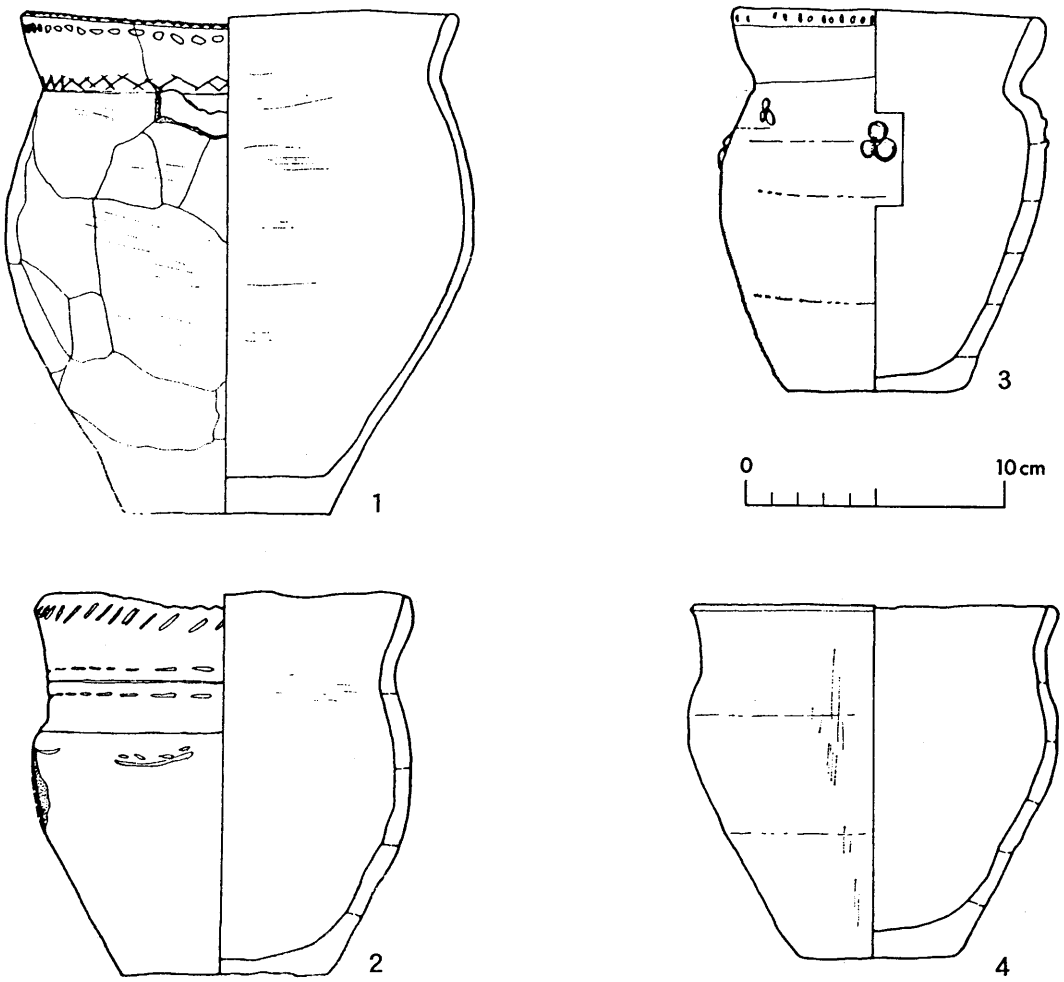
ここで取り上げるのはオホーツク下層遺構で「一定の面に一括して存在した」（藤本編 1972：331）4 個体の完形土器である。

ⅰ）器形

4 個体中 3 個体（第 94 図 1・2・4）はモヨロ分類でいう「横長」器形で、残り 1 個体（第 94 図 3）が「縦長」器形である。口縁部肥厚帯は 2・3・4 には全く認められない。1 については部分的に肥厚帯が認められるが、器面を全周しておらず肥厚帯がない部分の方が多い。また肥厚帯自体の厚さも薄い。

ⅱ）文様

胴部文様帯に着目すると、胴部文様帯がある 2 個体では（第 94 図 2・3）両方とも口縁部文様帯と胴部文様帯が一帯化している。口縁部文様のある 1・2・3 では口縁部施文位置はすべて「面」である。文様要素をまとめると 1 は刻文系で、2・3 は沈線文系が主体となっており(注 12)、4 は無文である。3 の土器には 3 ヶ一組の小さなボタン状貼付文が認められる。



第 94 図　栄浦第二遺跡 9 号竪穴オホーツク下層遺構出土土器群

1：モヨロⅢ群に相当　2・3：モヨロⅤ群に相当　4：無文土器

本土器群をモヨロ分類群と対比すると、1 はモヨロⅢ群に、2 はⅤ群 1 類に比定されよう。3 もやや新しい要素を持つがⅤ群 1 類としてよいであろう。4 についてもⅢ群・Ⅴ群 1 類併行の無文土器と考えることができる。Ⅲ群とⅤ群 1 類は文様要素以外の点では型式学的な共通点が多く、近い時期であることが想定されるのであるが、本土器群の出土状況はそのことを裏付けるものといえよう。筆者は本土器群の例を根拠として、Ⅲ群とⅤ群 1 類を併行関係に位置づける。

なお本土器群と同じ段階の型式、すなわちモヨロ貝塚Ⅲ群・Ⅴ群 1 類相当の土器については常呂町教育委員会が調査した栄浦第二遺跡（武田編 1995）での出土個体数が多いが、そこでも遺構に伴ってまとまった数の土器が出土した例はなく、セット関係は本例以外では不明である。

c) 常呂町トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 7 号外側竪穴（第 95 図～第 96 図）

本竪穴は東京大学によって 1998～1999 年にかけて調査された。正式報告は未刊であるが、2 冊の概要報告が刊行されている（宇田川・熊木編 2002、宇田川・熊木編 2003）。概要報告で筆者自身が述べたように、本竪穴では大小 2 軒の住居が入れ子状に重複しており、外側住居・内側住居の各々にオホーツク文化竪穴に特有の骨塚が認められた。今回取り上げるのは、外側住居の骨塚からまとまって出土した 4 個体の完形・半完形の土器である(注 13)。器形と文様についてまとめてみよう。

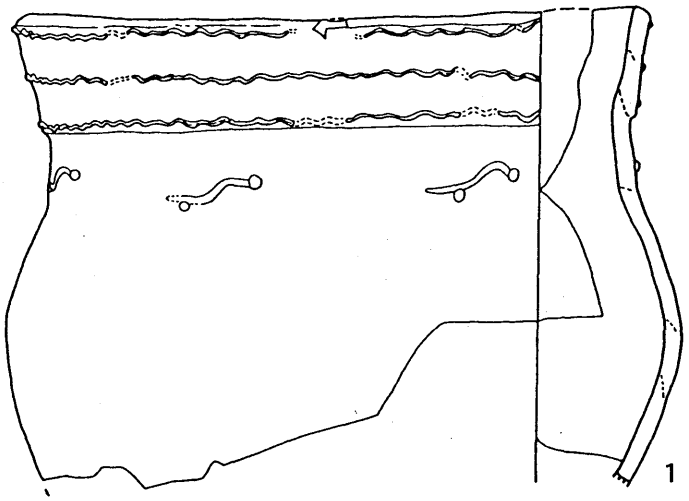
ⅰ）器形

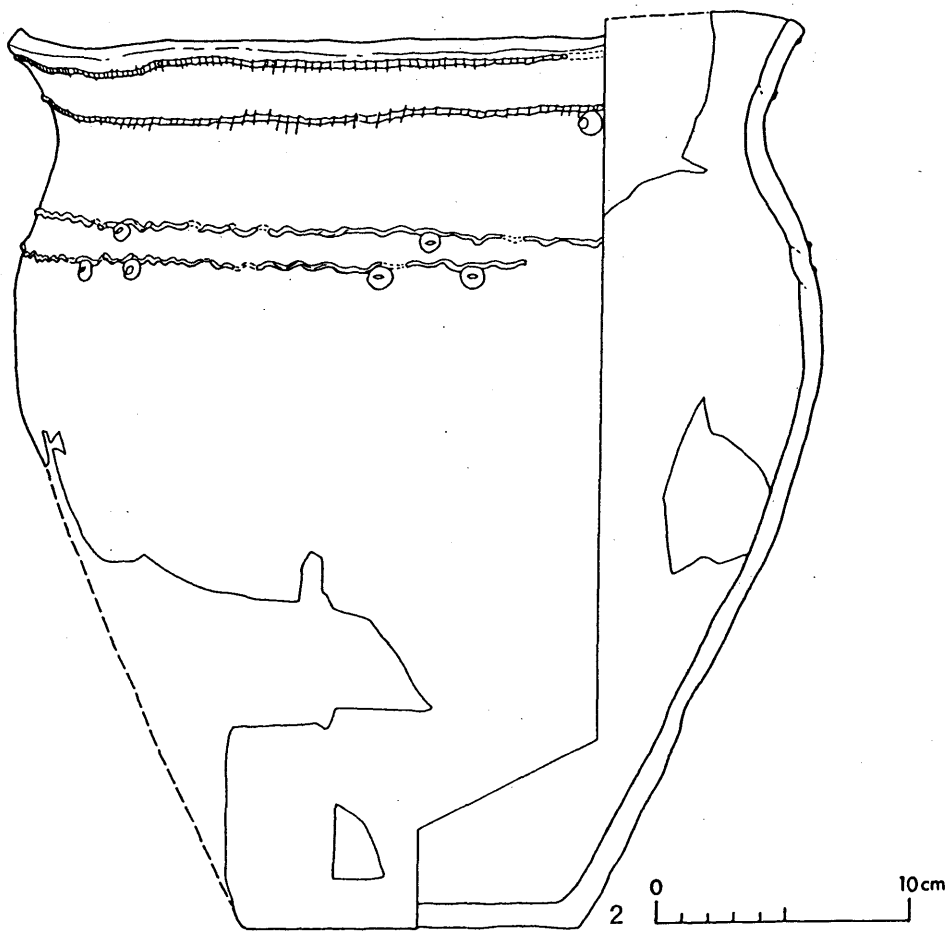
ほぼ完形の 3 個体はモヨロ分類でいう「横長」器形であり、残りの半完形 1 個体もおそらく同じ器形であろうと思われる。口縁部の肥厚帯は 2 個体にはなく（第 95 図 2・第 95 図 4)、他の 2 個体（第 95 図 1・第 96 図 3）にはあるがそれらでも肥厚帯は薄く、あまり明瞭ではない。

ⅱ）文様

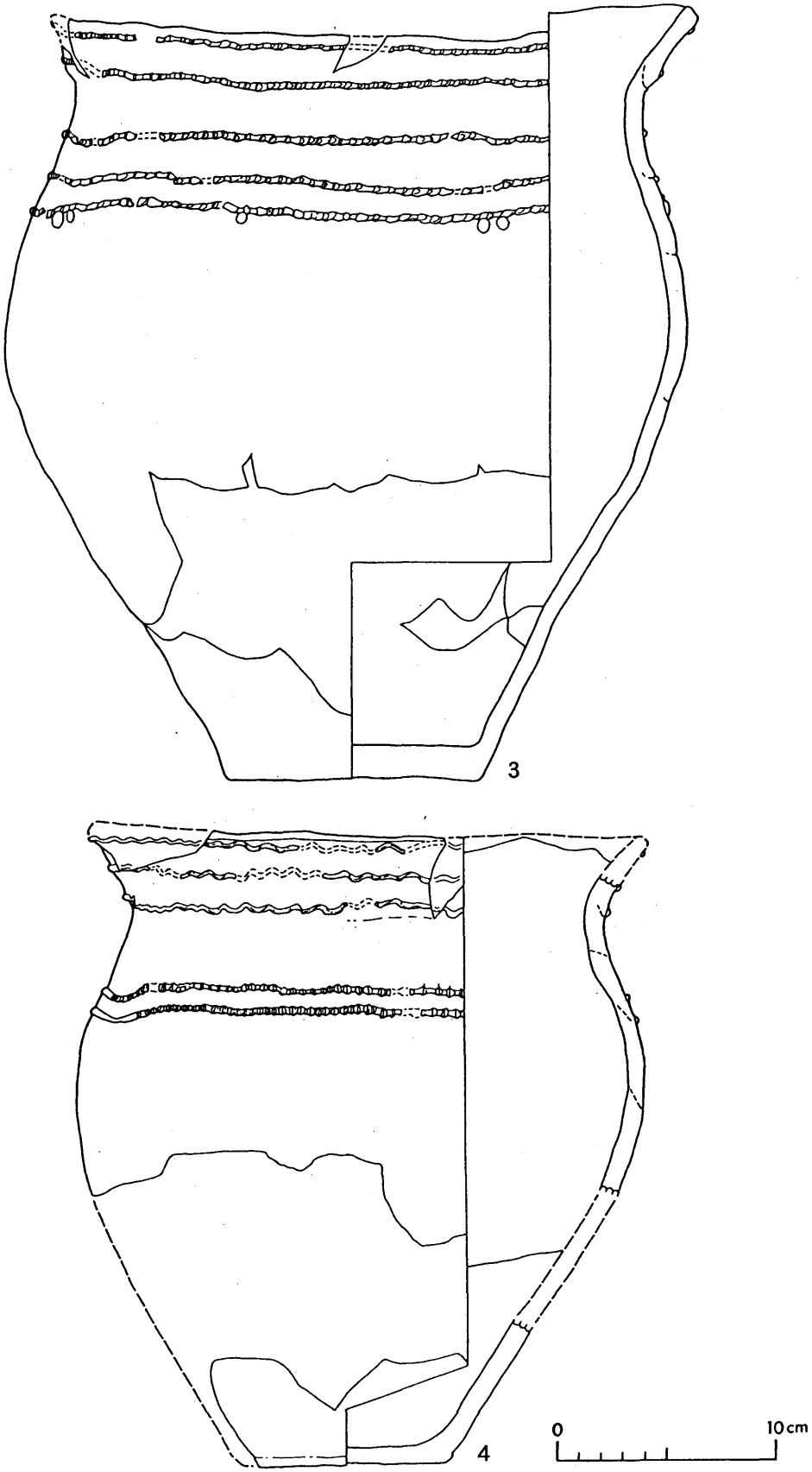
文様帯に着目すると、口縁部文様帯と胴部文様帯との間に狭いながらも無文帯が挟まる例が 2 個体（第 95 図 2・第 96 図 4)、口縁部と胴部の文様帯が一帯化している例が 2 個体（第 95 図 1・第 96 図 ~~4~~ 3）である。

口縁部・胴部の文様要素は全て貼付文系の文様で、刻文系・沈線文系の文様は認められない。モヨロ分類でいう「貼細」文様の他に、ボタン状の丸い小さな貼付文が認められる。「貼細」文様の意匠の基本単位（宇田川・熊木編 2001：84-85）は全て 1 本単位であり、2 本以上のものはない。また貼付文への施文（宇田川・熊木編前掲：85）にはひねり（「施文 H」）と刻み（「施文 K」）の 2 種類が認められるが、施文を行わない例（「施文 P」）はない。





第 95 図　トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 7 号外側竪穴骨塚出土土器群（1）



第96図　トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号外側竪穴骨塚出土土器群（2）

この土器群は点数こそ少ないが、出土状況的にも型式的にもよくまとまっているといえよう。藤本編年では d 群に相当することになろうが、藤本氏が d 群の標式資料とした各竪穴の一括出土例（トコロチャシ 1 号外側・トコロチャシ 2 号・モヨロ貝塚 10 号・トビニタイ 1 号）と比較すると以下の点で明瞭な差異が認められる。それは肥厚帯がない／目立たない点、貼付文の基本単位が全て 1 本単位で 2 本以上の例がない点、貼付文の施文を行わない例（施文 P）がない点等であるが、これらの差は時期差として、すなわちこの土器群が藤本編年 d 群の標式資料よりも一段階古いことを示すものとして解釈できよう。なぜならばトコロチャシ 7 号外側骨塚→藤本編年 d 群標式資料→藤本編年 e 群という型式組列を想定すると、型式変遷が矛盾なく連続的に説明できるからである(注 14)。一方このトコロチャシ 7 号外側骨塚資料の特徴は、器形・肥厚帯・文様要素の点でモヨロⅢ群・Ⅳ群土器とも共通する部分がある。すなわちこのトコロチャシ 7 号外側骨塚資料は、型式的に、そしておそらく時間的にも、モヨロ分類Ⅲ～Ⅴ群土器と藤本編年 d 群標式資料との間に位置づけられるまとまりとみることができる。ここでは藤本編年 d 群に含めることとし、その最古段階に位置づける。

このトコロチャシ 7 号外側骨塚資料と同じ型式はこれまでにも出土例がある。ある程度まとまった遺構一括資料としては、湧別町川西遺跡 10 号竪穴床面（青柳編 1995）の例がある。また、根室市オンネモト遺跡Ⅰ号竪穴埋土・床面（増田ほか 1974）の例も、トコロチャシ 7 号例とは若干の型式差があるがほぼ同時期と見なすことができよう。なお、オンネモトⅠ号が藤本 d 群標式資料よりやや古く位置づけられることはすでに同遺跡の報告中に述べられており（増田ほか前掲：107)、ここでもその見解を参考にしている(注 15)。

2）モヨロ貝塚資料の編年

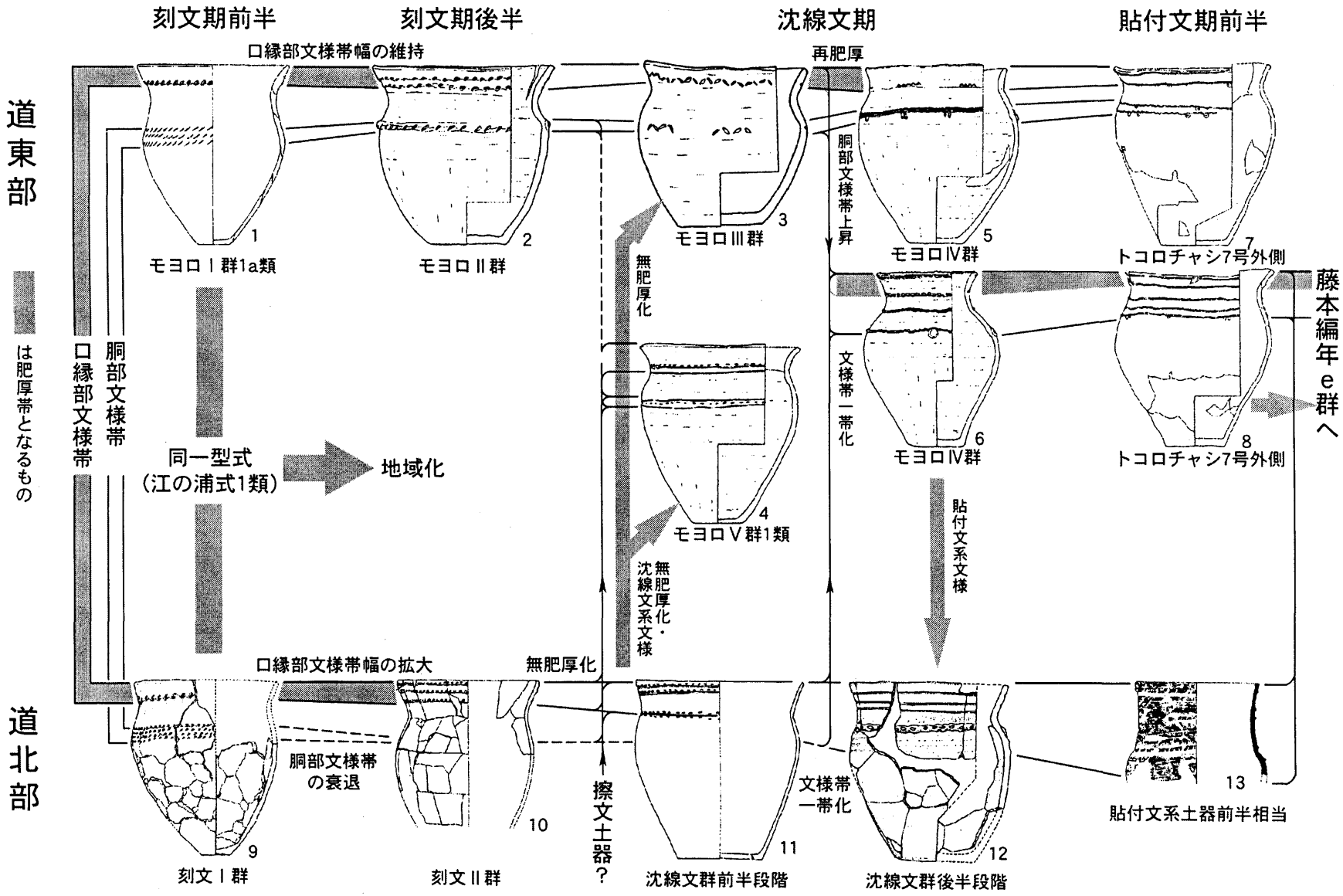
編年上の基点となる 3 つの出土例について確認した。ここではそれぞれⅰ）相泊段階、ⅱ）栄浦 9 号下層段階、ⅲ）トコロチャシ 7 号外側段階という基点を設定し、これらをもとにモヨロ貝塚分類群の編年を検討する（第 97 図)。

まず、最古である相泊段階に相当するのはモヨロⅠ群 1a 類土器である。前述のとおり相泊段階がモヨロⅠ群 1a 類を主体とすることを重視し、モヨロⅠ群 1a 類を他のⅠ群土器（Ⅰ群 1b 類・2a 類・2b 類）から分離して古い段階として設定する（第 97 図の a 段階)。ただし相泊遺跡の状況から推測できるように、モヨロⅠ群 1a 類から他のⅠ群土器への変遷は漸移的なもののようである。

時期		段階	モヨロ分類群
刻文期	前半	a段階 （相泊段階）	Ⅰ群1a類
	後半	b段階	Ⅰ群1b類 Ⅰ群2a類 Ⅰ群2b類
		c段階	Ⅱ群
沈線文期併行	（前半）	d段階 （栄浦9号下層段階）	Ⅲ群 Ⅴ群1類
	（後半）	e段階	Ⅳ群 Ⅴ群2類
貼付文期	前半	f段階 （トコロチャシ7号外側段階）	－
	後半 （仮）	g段階（仮） （常呂川河口15号段階）	－
		h段階（仮） （二ツ岩段階）	－

「時期」は確実な時間差を意味する。一方「段階」は、型式差はあるがそれが時間差か否か確言できない分類群どうしを区分するために設定したサブグループである。すなわち、各「時期」のなかに複数の「段階」が含まれている例では、段階の差を直ちに時間差とすることはできない。

第97図　道東部の編年とモヨロ分類群の対応関係



第 98 図　北海道のオホーツク土器の型式変遷過程

以上の相泊段階と、次の基点となる栄浦 9 号下層段階との間にはモヨロⅠ群 1b 類・2a 類・2b 類とモヨロⅡ群土器が挟まれることとなる（第 97 図の b・c 段階）。問題はモヨロⅡ群土器の位置づけであろう。すでに述べたようにモヨロⅡ群はⅠ群とⅢ群の中間となる型式学的特徴を有しており、Ⅰ群よりは新しい様相を呈している。ただしモヨロⅡ群を主体とする層位的・型式的まとまりはこれまで確認されていないので、Ⅱ群単独で一時期とする証拠はない。現状では前後いずれかの時期に含めて大別するのが妥当であろう。道北部の大別（刻文Ⅱ群／沈線文群）指標とリンクさせるのであれば肥厚帯の消失が画期となるので、肥厚帯のあるモヨロⅡ群は古い型式群と、すなわちⅠ群 1b 類・2a 類・2b 類と同時期とするのが適当と考えられる。

続いて栄浦 9 号下層段階となる。問題はこの段階（第 97 図の d 段階）とモヨロⅣ群・Ⅴ群 2 類（第 97 図の e 段階）との関係である。モヨロⅣ群・Ⅴ群 2 類は、型式学的には栄浦 9 号下層段階とトコロチャシ 7 号外側段階との中間的様相を呈しており、時間的にも両段階の間に位置することが予測される。しかしやはりモヨロⅣ群主体の層位的・型式的まとまりは確認されていない(注 16)ので、Ⅳ群単独で一時期を設定するだけの裏付けはない。ここでは栄浦 9 号下層段階を沈線文期前半段階、モヨロⅣ群・Ⅴ群 2 類を沈線文期後半段階として仮設する。なおトコロチャシ 7 号外側段階に刻文系文様は認められないので、モヨロⅣ群・Ⅴ群 2 類をそれより古く位置づけることに問題はなかろう。

以上の編年をまとめたのが第 97 図である。「時期」と「段階」が指す内容の違いに注意していただきたい。なお、貼付文期後半については参考のため仮設したものであり、検討は別の機会に譲りたい(注 17)。

5.　道北部との関係

次に道東部編年と、前章で検討した道北部編年とを対比してみよう（第 98 図。巻末付図 1 下の編年表も参照）。時期毎に両地域の関係を検討しその変遷をみてゆく。

1）刻文期

刻文期前半では地域差は少ないが(注 18)、刻文期後半になると地域差が目立ってくる。道東部では文様要素がやや単純であることに加え、ほぼ全例に肥厚帯がある、肥厚帯の幅があまり広がらない等の器形上の差も生じてくる。また、道東部では貼付文系の胴部文様が多用されるというのも目立つ地域差である。

刻文期後半における地域型式圏の境界（道北部／道東部）を確認しておこう。道北部刻文Ⅱ群

は、枝幸町ホロベツ砂丘遺跡においてややまとまった出土が認められる。北見枝幸周辺までが道北部の型式圏であることはほぼ確実であろう。一方、道東部のモヨロⅡ群はモヨロ貝塚より西側の常呂町栄浦第二遺跡でもややまとまった出土が認められる。刻文期後半における地域型式圏の境界は北見枝幸と常呂の間にあることになろうが、中間地帯となる雄武～紋別～湧別では出土が断片的で様相がはっきりしないため、境界が漸移的なのか排他的なのか、排他的であるならばどこに境界があるのか、等々については判断が難しい(注19)。

2) 沈線文期

沈線文期前半の道北部では大多数の土器が沈線文系土器（道北部沈線文群）に移行する一方、道東部では在地の系統の上に沈線文系土器の影響が及び、両系統が折衷したような土器群が生み出される。具体的にはモヨロⅢ群・Ⅴ群 1 類がこの時期の道東部の土器群であるが、モヨロⅢ群では在地の伝統が、Ⅴ群 1 類では道北部の系統がそれぞれ強くあらわれている。各々の系統について確認してみよう（第98図)。

まずモヨロⅢ群であるが、これはモヨロⅡ群土器が道北部沈線文群の影響を受けて変化し、口縁部が無肥厚化したものと考えられる。ただし、口縁部肥厚帯の幅は道東部の伝統を維持し狭いままであり、沈線文系の文様要素も借用されていないなど、在地の伝統を強く残している。一方、モヨロⅤ群 1 類は文様要素・口縁部文様帯ともに道北部沈線文群の影響を強く受けている。ただしモヨロⅤ群 1 類には道東部的な要素もある。一つは器形で、沈線文群は頚部のすぼまりが弱く口縁部が直線的に立ち上がるが、モヨロⅤ群 1 類には頚部のくびれがやや強いものや口縁部が緩やかに開くものがあり、道東的な特徴を残している。また、摩擦式浮文の施文例が少ない点、胴部文様が認められる例がやや多い点も道北部とは異なっており、これも道東部の伝統として説明できよう。このような道東部的な要素はあるものの、土器全体としてはモヨロⅤ群 1 類は道北部沈線文群前半段階に近い土器群である。

沈線文期前半の地域型式圏であるが、道北部では沈線文群前半段階がほぼ単純で出土し、道東部ではモヨロⅢ群／Ⅴ群 1 類のように刻文系／沈線文系の土器が併存する型式組成となる。道北部の型式圏すなわち沈線文群単純遺跡の分布域であるが、雄武付近まで拡がるのは確実であろう（松尾 1990：図 9・図 10、平川編 1995)。一方、常呂町栄浦第二遺跡（武田編 1995）では道東的な型式組成となっているので、この時期の地域型式圏の境界は紋別～湧別の一帯となろう。ちなみに沈線文系文様自体の分布は、前述の類例で確認したように、知床半島から根室までの道東部全域、さらには南千島択捉島まで及んでいる。ただし東に行くほど沈線文系の出土例は逓減するようであるので、この時期の型式交渉は、隣接地域間での情報交換が支配的になっていると想定できよう。すなわち、刻文期前半で認められたような、型式圏内で土器様相が斉一になる広域

的な型式交渉のあり方からは変化が認められると言ってよい。

沈線文期前半では以上のように道北部から道東部へと影響が及ぶが、次の沈線文期後半では道東部の系統が息を吹き返し（「型式変化の逆戻り」）、逆に道東部から道北部へと影響が及び始める。モヨロⅣ群の内容からそれを確認してみよう。

モヨロⅣ群（口縁部刻文系＋胴部「貼細系」貼付文）では口縁部の幅の狭さが踏襲され、道北部の影響で衰退していた肥厚帯も復活する。これら口縁部の形態は道東部の伝統下にあるといえよう。また、胴部に施された刻み目のある細い貼付文（「貼細系」文様）も、モヨロⅡ群以前の太い貼付文（「貼太系」貼付文）からの系統的変遷として理解できる（河野 1955、藤本 1966、柳澤 1999)。このようにして道東部で発達し始めた「貼細」系の貼付文系文様は道北端部にまで波及し、道北部沈線文群後半段階の土器にもこの種の文様要素が付されるようになる。ただし道東部でも沈線文系文様が全く消滅してしまうわけではなく、モヨロⅤ群 2 類土器（口縁部沈線文系＋胴部他に「貼細系」貼付文）にみられるようにこの時期まで道東部に残る。ちなみに沈線文群後半段階／モヨロⅤ群 2 類の地域差は、器形（前段階の道北部／道東部の地域差を引き継ぐ）や文様要素（鋸歯状の沈線文あり／なし）などに認められるようだが、両者の違いはそれほどはっきりしたものではない。

なお、口縁部・胴部の文様帯一帯化は道北部・道東部ともこの段階で顕著になる。おそらく道東部からの影響と考えられるが、両地域で全く同期している現象かもしれない。この一帯化された文様帯が次の貼付文期になると優勢になってゆくのである。

地域型式圏についても確認しておこう。モヨロⅣ群の分布の北限は常呂近辺である。それより北の雄武以北では、モヨロⅤ群 2 類または道北部沈線群後半段階（第 98 図-12、松尾 1990：図 7）となる。

3）貼付文期

この時期になると、よく知られているように道東部では集落遺跡が増加する一方、道北部では土器の出土量が減少する。そのような変化に伴うように、土器型式も道北部では地域の伝統が衰退し、道東部の系統に呑み込まれてゆく。ちなみに貼付文期前半までは沈線文系の要素が残存するようであるが、貼付文期後半になると道東部とほぼ同じ(注 20)土器群が道北端部まで分布するようになる。

6.　小結

モヨロ貝塚資料を基に道東部のオホーツク土器編年を論じてきた。これまで、道東部の刻文期～沈線文期にかけての資料は各地で得られてはいたが、今回モヨロ貝塚資料でそれらを大幅に補充することができた。特に本章で言う刻文期後半や沈線文期後半の資料はこれまで非常に少なかったため、それらの「空白」が埋められた意義は大きい。これらの資料補強により道東部の型式変遷を系統的にトレースできるようになったが、そこで明らかになった系統観は単純・単調なものではなく、道東部／道北部の系統が入り組むものであった。

そこで本章では前章で検討した道北部編年と道東部編年を対比し、両地域間の型式交渉を整理してみた。その結果、刻文期後半から地域差が拡大すること、さらに沈線文期前半では型式学的な影響は道北部から道東部へと及ぶのに対し、沈線文期後半以後は道東部から道北部へと影響方向が逆転することが確認できた。道北部と道東部で系統が交錯するプロセスはこれまでわかりにくかったが、今回の考察では地域型式圏の範囲・境界の規定を含めこれらの問題を明快に整理できたと考えている。

なお、道北部と道東部の型式交渉が変化してゆく背景には、当然のことながら擦文文化やサハリンの情勢、オホーツク文化内部での人の動きなどが関わっていると考えられる。この問題の考察は第10章であらためて行ってみたい。

注

(1) 現在、平成13年度より平成16年度まで、史跡整備事業に伴う発掘調査が網走市教育委員会を主体として継続中である（和田ほか2001、和田ほか2003）。この調査は昭和26年度以来50年ぶりのものであり、それまでの期間中は同遺跡が国指定史跡ということもあって調査は全く行われていない。

(2) 大場氏はモヨロ貝塚のオホーツク土器中に「少数の突瘤文と縄目文の複合文様例」が認められるとしているが（大場1956：5）、同論文掲載の図版・表には「突瘤文」例の記載はなく、実態は不明である。

(3) 筆者が観察した土器のほぼ全点で、大場氏論文中の「土器番号」が書かれた注記シールが認められた。また、市立函館博物館の目録に掲載された図版と大場氏論文の実測図とはかなりの点数が対照可能である。

(4) 大場氏論文の本文中には「完形及び復元した土器一八二個、復原可能な土器三個、並びに器形及び文様について、口縁部、頚部、胸部の観察をなしえた土器破片一一一個」（大場 1956：53）と記載されているが、実際に同論文中の「土器実測表」に記載があるのは、完形及び復元個体184個体、破片112個体である。

(5) 大場氏は、論文で紹介した資料について「大部分は児玉教授の所蔵品」（大場 1956：2）としている。逆に言えば、紹介資料中には「児玉教授の所蔵品以外の資料が若干含まれていた」と考えることができよう。

(6) モヨロ貝塚の貼付文系土器の器形に壷形が多い理由ははっきりしないが、おそらくそれらが副葬土器であったことと関連する可能性が高い。なぜならば同じモヨロ貝塚でも 10 号竪穴から出土した貼付文系土器群には壷形は認められないし（駒井編 1964)、逆に栄浦第二遺跡 Pit30（武田編 1995）の墓では貼付文系の壷型土器が出土しているからである。ただし貼付文期の副葬土器が全て壺形であったわけではなく、モヨロ貝塚の貼付文系壺形土器が全て副葬品であった確証もないので、詳細は不明とせざるを得ない。

(7) 器形の分析では筆者が実際に観察した土器のほか、筆者未観察でも、大場論文に記載があり本文中の条件に合うものについては全てサンプルに追加した。48 個体はその追加分 12 点を含む資料数である。

(8) 類例の提示は完形土器を中心とし、半完形・破片資料は省略した。

(9) ここで藤本編年 c 群土器の「典型例」としたのは、モヨロⅣ群をそのまま藤本編年 c 群土器と読み替えるわけにはいかないからである。詳細は後述の本章注 16 参照。

(10) 各発掘地点は 20～30m の間隔で直線的に並んでいるが、隣接地点間で土器が接合した例もあり（澤ほか 1971：47)、各地点は一続きの遺跡として捉えてよいと思われる。なお「合泊」（澤ほか 1971）と「相泊」（涌坂編 1996）の 2 つの名称が用いられているが、地名の変更によるものであり同一の遺跡である（第Ⅰ部第 2 章注 3 参照)。

(11) 全体の 1 割弱を占める無文の資料についても器形不明の例が多く判断が難しいが、やはり「横長」器形であるとは考えにくいので、モヨロⅠ群併行である可能性が高いと考えられる。

(12) 第 94 図 3 の実測図ではわかりにくいが、3 の土器には、頚部の最もくびれた部分に 1 条、胴部上半に上下 2 段に施されたボタン状貼付文の間に 2 条の沈線文が施されている。

(13) 7 号竪穴外側骨塚から出土した完形・半完形の土器は全部で 6 個体ある（宇田川・熊木編 2003：Fig.5・6、Fig.7-1・2)。本文中に述べた 4 個体以外の土器は、1 個体が続縄文後北 C_2・D 式注口土器、もう 1 個体がやや特殊な文様を持つオホーツク土器である。前者は外側骨塚を残したオホーツク人による「土器送り」の所産と考えられるもので（宇田川・熊木編前掲：39-40)、土器自体の製作時期は他の土器より明らかに古い。後者は本文中の 4 個体のよりもやや新しい様相を呈するが、文様自体はやや特殊である。後者の土器の帰属時期や他の土器との関係は正式報告時に検討することとし、今回は暫定的に検討対象から外しておく。なお、7 号外側竪穴に確実に伴う完形・半完形の土器は以上の土器が全てであり、骨塚以外の外側住居床面からは破片のみしか出土していない。

(14) ただし筆者は、藤本編年 d 群標式資料→同 e 群標式資料という変遷に関して、大筋では同意しつつも、貼付文の変遷のとらえ方や d 群／e 群細別の指標については再検討が必要と考えている。この問題については東京大学で現在発掘継続中のトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の資料を用いて分析を行っており、正式報告の時点で発表する予定である。現時点における仮設の編年は第 97 図に示しておく。

(15) オンネモトⅠ号埋土・床面例には多少の混入土器が含まれる可能性もあるが、主体となる土器群がト

コロチャシ 7 号外側併行であることは動かないであろう。なおオンネモト遺跡の報告では、栄浦第二遺跡4号竪穴床面（藤本編 1972）出土資料もオンネモトⅠ号と同じ型式学的内容を持つとされているが、筆者は栄浦 4 号の床面資料には型式学的なばらつきがあってやや古い時期の土器も含まれると考えているので、トコロチャシ7号外側段階には含めない。

ちなみに藤本編年 d 群土器には元々、このトコロチャシ 7 号外側や栄浦 4 号を含めてやや広い範囲の型式幅を持つ土器群が一括されていたようである。そのことは、藤本氏自身が栄浦 4 号の完形土器 2 個体を d 群に比定した点によくあらわれている（藤本編 1972：275-277)。型式設定者である藤本氏の見解は尊重されるべきであるが、筆者は「藤本 d 群」の範囲をトコロチャシ 7 号外側以降に狭く限定し、それ以降、すなわち狭い意味での藤本 d 群以降を「貼付文期」として大別する方が、オホーツク土器編年全体を区分する際には都合がよいと考えている。

(16) モヨロⅣ群は藤本編年 c 群の典型的特徴を備えた土器群といえるが、その藤本 c 群の標式資料である斜里町ウトロ海岸砂丘 1 号竪穴床面資料の内容をみると、モヨロⅣ群相当の土器は 1 個体のみであり、他はモヨロⅢ群・Ⅴ群・トコロチャシ 7 号外側段階などの各群で構成されている。これらの土器群を一括とみるか混在とみるかは評価の分かれるところであろうが、いずれにせよ「モヨロⅣ群主体の一括資料」を示す例とはならない。

なお、このウトロ海岸砂丘 1 号の内容から分かるように、藤本編年 c 群はもともとモヨロⅣ群単純の組成ではなく、いくつかのタイプの土器を含んだ一群として設定されたようである。よってここではモヨロⅣ群をそのまま藤本編年 c 群と読み替えることは避ける。

(17) 前注 14 参照。

(18) 刻文期前半における数少ない地域差といえるのは文様要素である。 相泊遺跡例で顕著であるが（本文第 93 図)、道東部では文様要素の種類が少なく、特に 1 指による爪形文がみられない、という点に道北部との違いがある。

(19)ちなみにわずか 1 点ではあるが、紋別市オンネナイ川河口左岸段丘上では道北部刻文Ⅱ群の出土がみられる（佐藤 1976)。 次の沈線文期前半の様相から類推すると、刻文期後半でも中間地帯（雄武～紋別～湧別）では道北部／道東部の折衷的な型式内容となっていたことが想定される。いずれにしてもこの時期の道北部／道東部の型式差は元々小さいので「境界」はそれほどはっきりとは認識できないであろうし、「境界」の持つ意味もそれほど大きくはない。

(20) 貼付文期後半における地域差としては、道北部では肥厚帯を持つ例が稀である、という点があげられる。これは沈線文群以来の地域的な伝統として説明できよう。